博　士　論　文

# 育成年代サッカーコーチのコーチング実践における
# ライフストーリー的リフレクションの可能性に関する研究

平成 28 年度

筑波大学大学院人間総合科学研究科
コーチング学専攻

原　仲　　碧

目次

第１章　序論

序　2

第１節　背景　4

１．育成年代コーチのコーチングの現状ならびにコーチングに関する先行研究の検討　4

（１）育成年代コーチのコーチングの現状と問題　4

（２）コーチングに関する先行研究　4

２．コーチングを対象とした質的研究の可能性　5

３．サッカーコーチング論領域において本研究を行う意義　8

第２節　目的　10

１．研究課題１の目的　10

２．研究課題２の目的　10

第３節　方法　11

１．質的研究法　11

（１）ライフストーリー法　11

（２）二重奏形式　14

（３）インタビューデータの信頼性と妥当性　15

（４）手続き　16

２．意味解釈法　17

３．倫理的配慮　18

第４節　本研究の構成と主な資料　19

第２章　研究課題１
育成年代サッカーコーチ（元 J リーガー）のコーチング実践知に関する
ライフストーリー研究　20

第１節　概要　21
１．本研究における研究課題１の位置づけ　21
２．対象者ならびに手続き　21

第２節　対象者のライフストーリー　23
１．大林氏のライフストーリー　23
２．柿田氏のライフストーリー　28

第３節　解釈と考察　34
１．省察的思考による受容　34
２．有機的改善の継続　35

第４節　研究課題１のまとめ　36

第３章　研究課題２
育成年代プロフェッショナルサッカーコーチの
コーチングに関するライフストーリー　39

第１節　概要　40
１．本論における研究課題２の位置づけ　40
２．対象者ならびに手続き　40
３．調査者　41

第２節　対象者のライフストーリー　42
１．藤井氏のライフストーリー　42
２．加藤氏のライフストーリー　50

３．藤井氏，加藤氏のプロ選手時代のライフストーリー　57
（１）藤井氏のプロ選手時代　58
（２）加藤氏のプロ選手時代　59
４．調査者の変化　61

第３節　解釈と考察　63
１．藤井氏にとってのサッカーとコーチング　63
２．加藤氏にとってのサッカーとコーチング　64
３．コーチングにおける批判的思考　65
４．コーチングにおける批判的思考と批判的視点　66

第４節　研究課題２のまとめ　68

第４章
コーチのライフストーリー的リフレクションから解釈される
コーチング実践を研究する意義と今後の課題　69

第１節　本論から導き出された既存の理論的枠組みに対する見方　70

第２節　結論　72
１．省察的思考による受容にもとづく有機的改善の継続によるコーチング　72
２．コーチングに関するリフレクションにおける批判的思考と批判的視点　72
３．結論　73

第３節　本論の総括と今後の課題　75
１．継続的な調査の必要性　75
２．コーチ本人がコーチング実践を対象化していくこと　76
３．コーチング実践思考モデルの最適化　77

注　78

資料　インタビューデータ　83
Ａ．大林氏のライフストーリー　84
Ｂ．柿田氏のライフストーリー　96
Ｃ．藤井氏のライフストーリー　108
Ｄ．加藤氏のライフストーリー　121

引用・参考文献　132

謝辞

# 第１章　序論

## 序

公益財団法人日本サッカー協会（以下，「JFA」と略す）は，日本代表チームが 2015 年までに世界のトップ 10 になることを目指し，代表強化，選手育成，指導者養成，普及を柱として，さまざまな取り組みを行ってきた（JFA 技術委員会，2012, 2016）．その結果，日本代表の FIFA（国際サッカー連盟）ワールドカップ（以下，「W 杯」と略す）5 大会連続本戦出場や，海外リーグにおける日本人選手の活躍など一定の成果を得ることができた．その一方で，W 杯本大会における最高成績は過去 2 度の決勝トーナメント進出に留まる．また，育成（ユース）年代の集大成である U-20（20 歳以下）日本代表は 2009 年エジプト大会より 4 大会連続で FIFAU-20W 杯の本戦出場を逃すなど [1)]，JFA および日本代表の掲げる目標に到達するための道のりが順調であるとはいえない．

内山（2013）によれば，コーチを対象とした研究は 1960 年代後半からスポーツ科学の領域で散見されるようになり，1970 年から 2001 年までコーチに関する研究は 550 件を超える報告があるという．同様に，Watanabe (2016) が Google Scholoar を用いたデータ収集法を参考にして，2001 年から 2015 年の間に公開されたコーチ，コーチングに関する研究を「coaching + sports」のキーワードから検索すると，約 25,000 件の報告が表示される．このことからも，スポーツ科学におけるコーチング関連の研究に対して，大きな関心が寄せられていることがわかる．

日本においても朝岡（2011）が 2010 年の日本スポーツ方法学会から日本コーチング学会への名称変更を「単に体育方法学にとどまらず，体育学の名称と存在根拠に関わる科学論的論議を再び引き起こす絶好の機会」としてとらえ，「トレーニング科学」とは区別された独自の「コーチング学」を確立していくことを提案した．

昨今，スポーツを通じたグローバルな交流が世界各国でなされており，「スポーツというのは，戦争をやるよりも大きな意味をもっているのかもしれない」（稲垣ら，2009）というほど，今後もスポーツのもつ意味の重要度は増加の一途をたどることが予想される．また，「世界的にみても，なぜコーチが専門職として認知されず，自活できる環境が乏し

く，資格を付与・認定する仕組みも見直すべきとされるのであろうか」（内山，2013, p. 678）という，スポーツの普及や発展において大きな役割を担うコーチの立ち位置についての問題提起もなされており，これらはコーチング学領域にとって切実かつ解決していかなければならない課題の一つであると考えられる．

このような背景のなか，日本の育成年代に携わるコーチ[2)]を対象に，コーチング[3)]の自明性を問う試みは，JFA の掲げる目標達成に向けた取り組みに対して，そのプロセスを再確認する意味において意義を有する．またそれらに付随して，コーチング学領域全体を取り巻くさまざまな問題解決に向けた有効な切り口になると考えられる．

## 第１節　背景

### １．育成年代コーチのコーチングの現状ならびにコーチングに関する先行研究の検討

#### （１）育成年代コーチのコーチングの現状と問題

育成年代のスポーツ現場において，チームスタッフ，家族，サポーターといった周囲の大人は適材適所でその役割を果たし，そのなかでも，コーチは，選手たちにフィードバック，教示，支援を担う必要不可欠な存在である（Bolter and Weiss, 2013, p. 32）．また，「コーチが指導理念を明確にすることで，選手は競技生活や競技成績，価値観の形成に大きく影響を受けて」おり，「コーチはコーチングの根幹をなす指導理念を確立しておくこと」（豊田，2012, p. 140）が求められる．

今日における学校部活動，スポーツクラブ等において生じる体罰をはじめとする諸問題は，「短期的な結果を過度に重視する」コーチングや「スポーツを通しての教育的プロセスを軽視したコーチング」（北村ら，2005, p. 27）と密接な関係を有すると考えられる．

このような背景のもと，日本のスポーツを統括文部科学省は，スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議（タスクフォース）から種々の問題解決に向けた報告書を一般に公開している．それによると，「コーチがコーチングに必要な知識・技能を十分に習得しておらず，コーチングの意味や目的を十分に考えずに倫理的に認められない行動や不適切なコミュニケーションをとってしまったり，非合理的なトレーニングを行って競技者やチームのパフォーマンスを低下させてしまう状況」（文部科学省，2013, pp. 50-51）が確認されている．また，これらの諸問題に関連して内山は，「コーチングの実践的な過程」が「不可視のものとして扱われすぎていた」（内山，2007, p. 53）と指摘してきた．

#### （２）コーチングに関する先行研究

陰田ほか（2014a, 2014b）は近年教育学領域で用いられることの多い「反省的実践家（reflective practitioner）」（ショーン，2001, p. 120）概念に着目し，コーチにとって反省的（省察的）であることがコーチングに関する問題点を把握し，解決策を探るうえで

有益であることを明らかにした. 一方で, コーチにとって日々のコーチング実践を省察（リフレクション）することが容易でないことを報告した.

コーチングにおける省察において参考となるのが東海林・金子（2014）による，コーチングの獲得プロセスモデル（ARAPモデル）となる．このモデルは，社会科学におけるゲーム理論にもとづき，コーチによる望ましいコーチングの獲得プロセスを「コーチング初期（迷いのコーチング）　Ambivalence」（①）（「強制」と「無責任」の間を行き来），「自己変革期　Reformation of self」（②）（コーチングのスタートライン），「蓄積期 Accumulation」（③）（考えて実行したことを振り返り蓄積する），「熟達期　Proficiency」（④）（選手の成長の見通しに応じてルールを適切に執行できる）という4つの段階に分類されることを明らかにした.

このように体育, スポーツ科学と近い関係にある領域において既知である理論を理解し, 馴化していくことで「哲学や倫理等の人文・社会科学的な課題を知ることが，『なぜ自分はコーチングを行うのか』『コーチとして何を目指すのか』『そのことが社会にどのようにつながっていくのか』を考えることにつながります」（文部科学省，2013, pp. 48-50）という立場を支持すると考えられる. 一方で, コーチングを学術的に論考する際には,「個々の特殊な事例的現象そのものが重視されそこから特殊な原理や法則性を見出す帰納的で実践的な思考態度が不可欠である」（村木，1991, p. 132）という主張もあり，コーチングを取り扱う研究において従来とは異なるアプローチが求められていると理解できる（図子, 2010, pp. 99-104）.

## ２．コーチングを対象とした質的研究の可能性

本論では，質的研究法によってコーチのコーチング実践知を明らかにしていく．コーチング現場における実践知を研究の対象とする會田・船木（2011）は，普遍性，論理性，客観性の3つの原理に特徴づけられる「近代科学の中枢をなす自然科学的方法」（中村, 1992）の限界を指摘し，「選手や指導者の実践知をリアリティ豊かに，科学的な知見として表現

する」には，質的研究が有効であることを報告している．また，スポーツ心理学分野においては十年来，質的研究法による価値の認知度が評価されているという報告もみられる（Strean, 1998）．

このような背景のなか，北村ら（2005）は，日本のエキスパートサッカー指導者を対象に質的研究を行い，コーチらのコーチング・メンタルモデルが「熟達化，意識化，及び，支援という3つの相互関係により構成」されることを明らかにした．また，こうしたコーチング・メンタルモデルが，「指導経験の浅い指導者や指導行動を再点検しようとする指導者にとって有効な判断材料に為り得る」ことを提示した．

梅崎（2010）は，コーチの行動観察とコーチおよび選手を対象にインタビュー調査を用いた研究において，指導行動から得られた質的データを分析した．その結果，コーチ（教える者）から選手（学ぶ者）への指導が「指導の場を構成する〔教える者−学ぶ者〕間の相互行為の産物」であることを説明した．なおこの調査では，指導者から選手への働きかけに，無意識下によるバイアスから，量的および質的な差異が生じることを提示し，指導者が選手の指導に関わる際，意識的にそれらのバイアスの排除につとめていく必要があることを明らかにした．

Côté et al. (1995) は体操のエキスパートコーチ 17 名を対象としたインタビュー調査から得られたデータを分析した．その結果，「練習」「試合」および「運営」という中心的構成要素に対して，「コーチの個人的特性」「選手の個人的特性」および「状況要素」という周辺的要素の相互作用からなるというコーチングモデルを構築した. また, Nash et al. (2011) は，さまざまな種目のエリートコーチ 10 名を対象としたインタビュー調査から，「長期的アプローチ」「適切なコーチング環境」「学習環境の整備」「トレーニングセッションにおける質と量」といった要素がコーチとしての専門性を高めていくために必要であることを明らかにした．

Werthner and Trudel (2006) は, カナダのエリートコーチのケーススタディをもとに，コーチが異なる学習状況をどのように活用しているのかについて検討した．その結果，コ

ーチが間接的学習状況（形式的なコーチングコース，カンファレンス）と，直接的学習状況（他コーチとのディスカッション，インターネットの活用，選手とのミーティング）の外部経験を内部経験として処理する内部学習状況を通じて，認知構造を生成していることを明らかにした．また，Werthner and Trudel (2009) はその後の研究において，カナダのオリンピックに携わったエリートコーチ 15 名の学習過程について調査した結果，エリートコーチの有するコーチング経験の複雑性について言及し，よりよいコーチの学習環境に向けて，さまざまな専門家が協働的に戦略を立て，コーチ養成を実施していくことの必要性を明らかにした．

このように，コーチやコーチングを対象とした質的方法を用いた研究は国内外において多くの報告がなされており，コーチング学やスポーツ心理学，スポーツ社会学をはじめとするスポーツ科学領域においても一定の評価を得ている． しかしながら，コーチ個々人のもつ経験や，コーチおよびコーチング実践の内面に焦点を絞り，それらを現場においてどのように活用しているかといった問いの設定から，コーチの有するコーチング実践知を記述することや，それらをもとに「コーチング」を「とらえなおす」という意味において再考する試みは管見の限り少ない．

このことは，コーチのコーチングを対象にした研究において，「当事者であるコーチが，自らを省察し再構築し続けるコーチング実践の中で醸成させてきた知を手掛かりとし，多くのコーチが納得する体系を確立していくこと」（図子，2014, p. 160）が求められていることや，コーチング学領域においてこのような研究の蓄積の必要性が唱えられていることとも関連すると考えられる（青山，2016）．なお，本論における「コーチング実践知」の「実践知」とは，「実践の場で求められていることが熟慮された，行為とともにある知ととらえられる」（會田，2012, p.3）や「経験から実践の中に埋め込まれた暗黙知（tacit knowledge）を獲得し，仕事における課題解決にその知識を適用する能力を支えている」（楠見，2012, p. 12）という見解に依拠する．

## ３．サッカーコーチング論領域において本研究を行う意義

本論では日本のサッカー選手育成における中核機関として機能するJリーグアカデミー[4]に所属するコーチ個々人のコーチング実践知に着目し論考していく．

JFAは1960年代より，当時のサッカー強豪国であった西ドイツのデットマール・クラマー氏の招聘や，FIFAコーチングスクールの開催を実施する等，日本のスポーツ指導者養成事業を積極的に行ってきた．また，2000年以降は，「JFA公認指導者登録制度」のもと，「指導者養成講習会」を全国各地域で開催する他，指導者資格取得後も定期的に指導者の学びの機会を確保するための「リフレッシュ研修会」や，それらを支えるために必要な人材育成のための「インストラクター制度」を確立する等，サッカー指導者の資質向上に向けたさまざまな取り組みを継続している（日本サッカー協会，2016）．さらに，今日では，過去に日本がサッカー先進国からコーチや選手を招くことで強化につとめてきた事例に倣い，アジア諸国を中心に日本人サッカーコーチが，育成年代の代表チームも含めて海外で指揮を執るといった報告も散見される（松山・土屋，2015）．

このように，JFA の代表強化ならびに国内サッカーの発展を見据えた取り組みや，それらにともなう環境の整備は国内外において評価を得ているなか，日本のサッカーにおける育成年代の主軸が，学校部活動[5]という独自の制度から，徐々に J リーグアカデミーへと転換してきていることにも留意しなければならない．

J リーグは，創設の理念において，クラブの運営，強化の一環として，小学生年代で構成される 4 種（ジュニア＝U-12），中学生年代で構成される 3 種（ジュニアユース＝U-15），高校生年代で構成される 2 種（ユース＝U-18）に属するチームを設置することを義務付け，選手育成につとめてきた（J リーグ，2016）．また，JFA では 2003 年より育成年代において主流であったトーナメント方式の大会から，参加チームの総当りを基本とするリーグ方式の大会への変遷およびリーグ戦文化の定着を目指し，全国各地域を主体にプリンスリーグ[6]や都道府県リーグといったリーグ戦を導入してきた．そのなかでも，2011 年よりスタートした東西各 10 チームに別れて実施される高円宮杯 U-18 プレミアリーグは，日本

の育成年代最高峰のリーグとして位置づけられている．高体連，クラブチーム（J リーグアカデミーを含む）が参加資格を有するなか，リーグのスタート以降，参加チームの内，約 6 割を J リーグアカデミーが占める．このように，日本サッカーの強化において，J リーグアカデミーが日本の育成年代における中核機関として機能し，大きな役割を果たしていることは周知の事実である．さらに， J リーグアカデミーで育成された選手が海外のトップリーグにステップアップし，活躍するといったケースも散見される．これらの背景をふまえ，J リーグアカデミーで選手育成に関わるコーチのコーチング実践知に焦点を当てて論考していくことは，意義を有する研究課題であると考えられる．

## 第２節　目的

本論では，育成年代サッカー現場のコーチのコーチング実践を対象に，コーチ育成やコーチ教育，コーチの成長の一助となり，コーチング学領域において「了解可能性」（今田，1986, 2002）を有する概念（視座）の生成を試みる．そのために，研究課題１，２を設定し，コーチの有する実践知，コーチング実践思考モデルならびに，それらを含むコーチング現場に資する有益な知見の提示を目的とする．

### １．研究課題１の目的

育成年代サッカーコーチのコーチング実践について，これまでになされてきた自然科学的な研究方法論とは異なる着眼点，立場において論考する．そのなかで人文・社会科学領域の研究において用いられるインタビューによるライフストーリー法から，育成年代のサッカーコーチが有するコーチング実践知を明らかにすることを目的とする.コーチが,各々のコーチング実践に関する経験について「何」を語り，またそれを「いかに」とらえ，意味づけているのかをコーチング実践知として詳細に記述し，解釈していくなかで，コーチングについての自明性を問いつつ，その再考を試みる．

### ２．研究課題２の目的

コーチにとってリフレクション（振り返り）が有益であるとする説を積極的に支持し，育成年代コーチング現場に即した知見の提示を目指して論考する．そのために，コーチが自らのコーチングを「どのように」リフレクションすることが重要であるのかというリサーチクエスチョンを設定し，研究課題１と同様，インタビューによるライフストーリー法から明らかにすることを目的とする．また，研究課題１において検討が不十分であった対話的構築主義による論考を全面的に繰り広げ，対象のコーチと調査者である筆者によって展開されたライフストーリーを詳細に記述し，解釈していく．

## 第３節　方法

### １．質的研究法

本論では，日本の育成年代サッカーコーチのコーチング実践について論考していくが，そのためには，コーチ本人に直接接近する質的研究によるアプローチが有効であると考えられる（會田，2014, pp. 164-166）．近年，各領域の実践者が保有する知識や経験に着目した研究が活発に行われており，特にコーチング学を包摂する体育，スポーツ科学と近しい領域である教育学ではその報告が多くみられる．例えば，松嶋（2005）による中学校教師を対象とした生徒指導における生徒との関係構築に関する経験に着目した研究や，岸野・無藤（2006）による教師としての専門性の向上における転機について体験の意味づけを検討した研究などがあげられる．

体育，スポーツ科学領域においても，現場や社会のニーズに応じた実践的な研究や質的データにもとづいた議論がなされている（豊田・中込，2000; 朝倉・清水，2010; 吉田，2012）．さらに，「量的研究では削ぎ落とされてしまいがちな人々の主観的な構造とプロセスを，質的研究は描きだせる」（山崎，2011）という報告は，指導者のコーチング・メンタルモデルを構築した北村ら（2005）の見解と同様に，対象とする分野や領域を専門とする人たちにとって有用な知見が質的研究によってもたらされ得ることを示している．

これらの検討から，スポーツを介した人と人との繋がりのフィールドであるコーチング学領域においても，質的研究法を用いたコーチングの実践と理論を結ぶ一助となる知見の提示が期待される．

#### （１）ライフストーリー法

社会学，心理学をはじめとした人文・社会科学領域において用いられることの多い質的研究は，代表的な方法論だけでもグラウンデッド・セオリー・アプローチ，KJ法，エスノグラフィー法，ライフストーリー法，現象学的アプローチ，事例分析法等，多岐にわたる（山崎・星野，2012, p. 128）．また，これらは体育，スポーツ科学領域においても近年

注目される方法論である（會田，2008; 北村ら，2005; 豊田・中込，1996, 2000; Werthner and Trudel, 2006; 吉田，2012, 2013, 2014）．そのなかでも，本論ではインタビューによるライフストーリー法を用い，「対話的構築主義」（石川・西倉，2015, pp. 1-20）のもと，対象者であるコーチと，調査者である筆者の相互行為によって紡ぎだされた語りを再構成し，描出されたコーチングに関するライフストーリーを論考していく．

ライフストーリー研究（ライフストーリー法）については，質的研究法を取り扱う概説書において「対象者個々人の人生経験の物語をそれぞれの対象者と研究者との対話をとおしてともに生みだし，それをもとに，対象者が自らの人生経験をどのように意味付けているのか，様々な意味付けをどのように関連付けて物語っているのか，また，そうした意味付けや物語をかたどる文化や制度とはどのようなものなのか, といったことを考察しつつ，対象者のライフストーリーを記述的に（再）構成したい場合に使います」（山崎・星野，2012, pp. 142-143）と説明されている．

同様に，ライフストーリーについて，桜井（2012）は「個人のライフ（人生，生涯，生活，生き方）についての口述の物語」であり，「個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから，自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つのことでもある」としている．また，石川・西倉（2015）は，「ライフヒストリー研究を批判的に継承し，発展させたのがライフストーリー研究である」（石川・西倉，2015, p. 1）と解説している．さらに，桜井はライフストーリーに類似する概念としてライフヒストリーやオーラルヒストリー（オーラル・ヒストリー）等をあげるが，ライフストーリーには「〈いま–ここ〉」（桜井，2005, pp. 38-39）の語り手と聞き手の相互行為，すなわち，インタビュー行為によって生みだされる対話的な構築物であるということをその独自性としてあげている（桜井，2005, pp. 38-41）．

この他にも，「ライフストーリー研究」の理解・触発・記述をめぐる特質からもたらされる知については，「（a）調査研究者と調査協力者との異化し・異化されるコミュニケーションによる新たな社会的現実（認識）の生成だけではなく，（b）読者の追体験（経

験の重ね合わせ）を可能にし，調査協力者（語り手）・調査研究者（聞き手＝書き手）・読者（読み手）の三者が当事者となって（三者の経験が関係づけられて），そこに参与的にコミュニケーションすることによって新たな社会的現実（認識）が構成されていくという生成を仕掛けていく，この二重の生成性こそが，ライフストーリー研究がもたらす「知」であると私は考える」（小倉，2011, p. 143）という報告もみられる．

これまでにもコーチング実践を対象とした研究においては，コーチが自己の経験をもとに判断，行動することは自明のことであると考えられてきた．また，この経験について「経験および実験というものは説明を要しない，つまり自明の思考様式ではない．むしろ経験や実験の意味するところは，探究されるべき問題の一部なのである」（デューイ，2004, pp. 29-30）という言説は，コーチの経験をもとに見いだされた原理や原則（理論）を集約することが，コーチング学における重要な課題である（中川，2016）という見解と軌を一にしており，コーチのライフストーリーを考究していく本論において示唆的であると考えられる．同様に，コーチの選手としての経験やコーチングに関する経験は，「選手として経験したことやコーチから教えてもらったことは，自分のコーチング法に確実に影響する」（リーズ・ミア，2007）というように，コーチのコーチング実践能力を高めていくうえで重要な意味を有するであろう．

JFAは，指導者養成事業の一環である各レベルでの指導者養成講習会やリフレッシュ講習会，トレセン活動における各コーチの指導実践[7]において，インストラクターやナショナルトレセンコーチ，他のコーチや他の講習会受講者らを交えた振り返りの場を設定し，指導実践を反復するなかで，改善していくことの重要性を提唱してきた．一方で，これらの講習会等による指導実践とは別に，コーチは自らのコーチとしての根幹を成すと推察される選手としての経験や，日頃のコーチング実践に関する経験を振り返り，整理することが有意義であると考えられる．しかしながら，サッカー選手として，あるいはコーチとしての経験等の振り返りの重要性について，コーチング現場において触れられることは少ない（JFA, 2012, 2016）．

このことは，コーチング現場のコーチを対象としたライフストーリー的な研究の報告が少ないことにも関連すると考えられる．また，コーチング学領域の研究においても，「新しい知の創造と方法論の開発に挑戦していかなくてはならない」（図子，2010, p.101）や，「この種の研究はまだその緒についたばかりであり，その方法についてはなお難解な問題が立ちはだかってはいる」（朝岡，2011, p. 13）といった指摘がなされている現状を説明し得る．

本論ではこれらの背景をふまえ，研究課題１および研究課題２において，選手育成に携わる4名の育成年代プロフェッショナルコーチを対象に，インタビューによるライフストーリーを用い，それぞれの対象者と筆者との対話によって構築されたライフストーリーを記述していく．また，ライフストーリーを記述することで描出された育成年代サッカーコーチの有するコーチング実践知について解釈ならびに考察していく．そのなかで，コーチが自らの経験をコーチング実践にどのように活かしているか検討しながら，対象コーチの有するコーチング実践知を明らかにしていく．

### （２）二重奏形式

本論におけるライフストーリーの呈示[8)] 方法は，研究課題１，２のいずれも，対象者の有するコーチングに関する経験の「『リアリティ』を伝えるべく『語り手の言葉をそのまま活かした部分と〈わたしが〉解説する部分とを交互に重ねて呈示』する」（吉田，2012, pp. 578-579）「二重奏形式」（小林，2000）とした．また，各々のコーチのライフストーリーを呈示するにあたり，考察ないし解釈はこの二重奏形式に倣い，その間に組み入れる形式とした．

呈示において留意すべきは，「『個人的な語りはいかに正確に記録したとしても』，あくまで過去についての『現在の時点からの語り手の解釈』（桜井，2002, p. 39）である点，さらに語りの呈示において，上記のような語りを書き手（筆者）が『さらに解釈』するという『二重の解釈』（小林，1995, p. 69）が不可避である点」（吉田，2014, p. 857）が

あげられる．まず前者について，本論では，対象者に記入を依頼したプロフィールに事前アンケートを添えることで，対象者が有するサッカーに関するこれまでの経験についての想起および回想を促した（原仲ほか，2015, p. 165; 原仲・中山，2016, p. 126）．また，後者について，本章のスタイルとしては，対象者および，筆者の主観的解釈であるという前提にもとづきながら，その解釈および記述に論理的な飛躍を生じさせないため，質的研究に造詣の深い研究者による継続的なスーパーバイズならびに，コーチングを専門とする複数研究者による，定期的なディスカッションの場を設けた（浅野・中込，2014, p. 38）．

### （３）インタビューデータの信頼性と妥当性

質的研究に対する古典的な疑問として，データに関する信頼性と妥当性の問題があげられる．これらについて，ライフストーリー研究を進める際，量的研究における「信頼性や妥当性の基準がかならずしも適切で重要とはいえない」（桜井，2005, pp. 49-50）といった指摘もあり, データ収集から分析, 解釈等, 調査の過程を記述し, 手続きの「透明性」（桜井，2005, p. 50）を確保することでライフストーリー研究の信頼性を高めていくことが可能になると考えられる.

また, 妥当性については, 語りに表出される内的一貫性や外的一貫性といった一貫性を検討することが求められ（桜井, 2005, pp. 51-52），具体的には，「トランスクリプトや筆者の解釈を調査対象者に示すことで, その反応や整合性を確認する」（桜井, 2005, p. 51）ことが重要であると考えられる.

本論の調査では，研究課題１，２において，4名のコーチを対象に，何れもインタビューを用いて実施されたが，調査の過程である手続きを本文中で詳細に記述し，その透明性を確保することで，研究の信頼性および妥当性を高めることにつとめた．実際の調査においては，対象者へのインタビュー実施後，録音したインタビューの音声データを逐語的に文字起こしし，テキストへとコーディングした．その後，プリントアウトしたデータ（トランスクリプト）を4名の対象者にそれぞれ郵送し，内容についての意見を電話にて求め

た．4名ともインタビュー内容に対する意見，修正等はみられなかった．また，対象者に調査を依頼する段階において，インタビュー内容を学術論文としての投稿，公表について口頭で説明ならびに確認の後，承諾を得たうえで調査，執筆，投稿という一連の手続きを進めた．なお，研究成果の公表となる学術雑誌への掲載後，それぞれの対象者へ論文の別刷りを送付あるいは直接手渡し，筆者の解釈についての確認の機会を設けた．この筆者の解釈についての確認の機会であるが，研究課題１の対象者は電話ならびに対象者所属クラブのクラブハウスでの対話，研究課題２の対象者は，電話あるいは対象者所属クラブのクラブハウスでの対話によるものであった．インタビューデータの確認時と同様，研究成果である論述やインタビューデータに対する筆者の解釈に対する異議，修正要求等はみられなかった．

### （４）手続き

研究課題１，２ともに，インタビュー調査実施の1週間程前にインタビュー調査内容に関する自由記述形式のアンケート用紙を対象者に郵送または直接渡し，調査者（筆者）側で用意した質問に回答を依頼した．インタビュー調査時には，記述されたアンケート用紙を「補助資料」（會田，2008, p. 64）として用いた．

調査において使用した自由記述形式のアンケートの内容は，以下の通りである．

1）コーチを志すきっかけ

2）コーチングで大切にしていること

3）コーチングでしてはいけないこと

4）コーチングにおいて印象に残っていること

5）選手時代に受けたコーチング

6）コーチングに影響を与えていると感じるサッカーに関する経験

7）今後のコーチングにおける課題等

なお，このアンケート内容は，筆者自身のコーチングに対する問題意識から抽出された質問項目について，筆者ならびにサッカーコーチングを専門とする複数の研究者を交えたディスカッションを重ねて素案を作成した．その後，インタビューを用いた調査に造詣の深い研究者による助言のもとに適宜修正されたアンケート項目を実際の調査において使用した．

インタビュー実施の際，あらかじめ作成されたインタビュー実施用紙を用いた半構造化インタビューによって調査者の質問に答えるかたちで対象者にライフストーリーを語ってもらった．ただし，ライフストーリー法の特徴を活かすため，対象者の語るストーリーの流れに応じて具体的，個別的な内容に立ち入りつつ，対話に柔軟性をもたせた．また，対象者と筆者による対話の状況に応じて語りの内容を変化させながらインタビューが展開され，インタビュー場面でのやりとりには可能な限り自由度を設けることに注意した．

インタビューの場で，調査者である筆者は，対象者の語りに「敬意と好奇心」（徳田，2004）を持ち，可能な限り対象者の語りを尊重しながら，適宜それまでに語られたことについて調査者側の理解や解釈を伝え，対象者の語りの意味の明確化や拡張を試みることを心がけた．また，「ライフストーリーはそれぞれの価値観や動機によって意味構成されたきわめて主観的なリアリティである」（桜井，2002）点に留意し，対象者の内なる声を聞き出すため，誠実な態度で耳を傾ける姿勢でインタビューに臨んだ．

### ２．意味解釈法

本論におけるライフストーリーの解釈ならびに考察は，科学を「科学とは，現象についての認識を存在に接続する理性手続きのことである」（今田，1986, p. 14）と定義づける今田によって提唱された科学の方法理性[9] である「意味解釈法」に立脚する（今田，1986, pp. 33-137; 今田，2001, pp. 29-43）．また，その際「『意味解釈法』は，意味認識を解釈法によって了解可能な経験に存在接続する方法理性である．この存在接続は前2者（仮

説演繹法，観察帰納法）とは異なり，存在（経験）を完成（生成）させることにある」（小倉，2003, p. 58）という解説に依拠する．

この意味解釈法を提唱する今田は，科学の方法理性について，経験主義にもとづく観察帰納法,合理主義にもとづく仮説演繹法,理念主義にもとづく意味解釈法の三つに類型し，これらは科学の方法として等価であるという．特に意味解釈法は，「個性的な事例の奥にひそむ，個別で特殊なしかし偶有的でない本質的なリアリティに焦点を当てる」（今田，2001, p. 2）ことに優位性があり，本論で扱うコーチのライフストーリーを論考していくための方法理性に適していると考えられる（小倉，2006）．

このことにより，特殊で個別な事象である，本論で対象とする育成年代プロフェッショナルサッカーコーチの有する経験についての特殊で個別にあり，たえず変動する「ゆらぎ」や，コーチング実践に関する変化の起ころうとする前ぶれである「きざし」（今田，1986, p. 135）を含むであろう対象者のライフストーリーを解釈していくことが可能となり，既存のコーチングに関する考え方や価値観に対して，新たな視座を生成することが期待できると考えられる．

### ３．倫理的配慮

本論における一連の研究調査は，筑波大学体育系の研究倫理委員会に研究計画書等（研究目的，手続き，分析方法および依頼書，同意書並びに資料や個人情報の取り扱いに関する事項を含む）を審査申請し，厳正な審査手続きを終え，研究倫理委員会ならびに所属長による承認を得たうえで実施された．

実際の調査においては,インタビューを実施する前に研究に関する倫理的配慮について，口頭ならびに書面において説明した．インタビューは研究としての公表を前提にICレコーダーで録音すること，本人の意志により，どの段階においても調査への協力を拒否する権利を有すること等を伝え，同意書に署名後，インタビューを実施した．

## 第４節　本研究の構成と主な資料

第１章では，本研究の背景から全体の構成について記述する．研究の背景として，コーチの置かれる環境や国内外のコーチングを対象とした先行研究をふまえ，育成年代のコーチングや日本のサッカーコーチングにおける成果や課題について概観する．そのなかで，コーチングを取り扱った質的研究について整理し，サッカーコーチング領域において本研究を行う意義についての基本的立場を示す.

第２章においては，研究課題１について論考し，記述していく．なお，第２章の内容は以下の既発表論文にもとづいてまとめられた.

原仲　碧・中山雅雄・小井土正亮・桑原鉄平・森　政憲・浅井　武（2015）育成年代サッカーコーチ（元Jリーガー）のコーチング実践知に関するライフストーリー研究．コーチング学研究，28 (2): 163-173.

第３章においては，研究課題２について論考し，記述していく．なお，第３章の内容は以下の既発表論文にもとづいてまとめられた.

原仲　碧・中山雅雄（2016）育成年代プロフェッショナルサッカーコーチのコーチングに関するライフストーリー．日本オーラル・ヒストリー研究，12: 123-144.

第４章においては，第２章および第３章の論考を総合的に考察し，本研究全体のまとめと今後の課題について記述していく.

# 第２章　研究課題１

## 育成年代サッカーコーチ（元Ｊリーガー）のコーチング実践知に関するライフストーリー研究

## 第１節　概要

### １．本研究における研究課題１の位置づけ

研究課題１では，育成年代サッカーコーチのコーチング実践に着目する．コーチが自らのコーチングに関わる経験についてライフストーリーを語るなかで，コーチがおさえておくべきコーチング実践知を描出し，そこからコーチングに対する新しい視点を生成することを試みた．

### ２．対象者ならびに手続き

研究課題１では，関東地方の都市をホームタウンとしてJリーグに所属するXアカデミーにおいて，同クラブのU-18チーム（高校生年代）に関わる大林氏（男性，40代（インタビュー時），監督）とU-15チーム（中学生年代）に関わる柿田氏（男性，30代（インタビュー時），監督）の2名を対象として調査を実施した（いずれも仮名）．2名のコーチは筆者の知人を通じて面識を持ち，「コーチの経験に関するインタビュー形式の研究」について書面ならびに口頭で伝え，協力をお願いした．

対象者の両コーチとは，2010年代初頭に共著者とその他のサッカー関係者を通じて面識を持った．それぞれの対象者に電話で「これまでのコーチング経験を軸としたインタビュー調査」を依頼し，快諾を得た．インタビューに先立ち，プロフィール用紙および，過去の経験を想起するための事前アンケートを郵送し，インタビュー前の記入および，回答をお願いした．2010年代初頭10月，対象者である大林氏と柿田氏の2名のコーチの都合に合わせ，Xクラブハウス内の食堂において，筆者がインタビュアー（調査者の立場）としてそれぞれ1回ずつインタビューを行った．また，インタビュー当日に改めて調査の趣旨を口頭ならびに，文章で説明し，インタビューが開始された．なお，調査に関する説明では，インタビューは研究論文としての公表を前提にICレコーダーに録音すること，調査協力者本人の意思により，どの段階においても調査への協力を拒む権利を有すること等が，調査者である筆者から伝えられた．2名のコーチによって記入されたプロフィールおよび，回

答されたアンケートをもとに，インタビューを実施し，ICレコーダーに録音した．インタビューの所要時間は書面で1時間程度と事前に通知し，大林氏が51分，柿田氏が1時間10分であった．

コーチは2名ともJFAが認定するコーチライセンスを所有し，コーチとして生計を成り立たせているプロフェッショナルコーチである（大林氏：S級，柿田氏：A級ジェネラル）．また，2名のコーチはプロサッカー選手として10年以上のキャリアを有しており，サッカー選手としての「熟達者」（北村，2011）であったと考えられる． 2名のコーチはプロサッカー選手としてのキャリアが豊富であること，JFAの上級ライセンスを保持していること，近年の各育成年代の全国規模の大会で優勝を含め，頻繁に上位進出の実績を残し，なおかつ，コンスタントにトップチーム昇格選手を輩出する日本トップレベルのJリーグアカデミーに在籍していること，プロフェッショナルコーチとして選手育成に携わっていることなどから，本章の目的に対して適任者であると判断した．

## 第２節　対象者のライフストーリー

以下，インタビュー中の＊「　」は調査者（筆者），大林「　」，柿田「　」はそれぞれのコーチの語りの引用，語り内の『　』は語りの中に出てくる会話（読者の理解に必要と思われる場合に限り（発話者）を表記）および発話や擬声語等の表現，…は語りの省略，（　）は筆者がインタビュー時のメモ等を参考に記述した補足である．個人名は全て仮名にて表記した．また，国，地域，組織名に関しては適宜アルファベットおよび仮名で表記した．インタビューデータに関して，筆者が個人の特定に結びつかないと判断したものに関しては逐語的に文字起こししたデータの通り表記した．本章では，論考の構成上，サッカーに関する経験と密接な関係性を有するコーチング実践知の描出において，重要であると考えられるストーリーを中心に記述していく．なお，呈示されるストーリーは事前アンケート，全体の語りならびに，インタビュー前後や最中にとったメモ等を参考にし，筆者と共著者による選択および判断にもとづき記述されたものである．以下のストーリーは，筆者の育成年代のサッカーコーチングに対する問題意識や，フィールドワークによって得られた情報をもとに，サッカーコーチングを専門とする共著者とのディスカッションを重ねたうえで選択された．

### １．大林氏のライフストーリー

大林氏は，東北地方出身で高校卒業後にS（実業団チーム；後のX）に社員選手として入団．後にプロ契約を結び，15年（途中2年はJリーグ他クラブ）のキャリアを過ごした（Jリーグ加盟以前の5年を含む）．引退後から4年間Xクラブ強化部スタッフ（普及コーチ兼）としてチームに携わった．その後，XアカデミーU-18コーチに着任し，S級ライセンスを取得．その翌年から監督に就任した．インタビュー当時のコーチ経験は4年（普及コーチ兼任期間を含めると8年）であった．

【語り１】サッカースタイルの変化

大林「ぼくが（選手として）プロでやっていた頃の全盛のサッカーってやっぱりね，しっかり守備をしたなかで，素早いショートカウンターだったり．というところで，どちらかというと主導権を相手にわざと渡しておいて，カウンター仕掛けるサッカーだったんで．今はもう，全く真逆になってくるんで．サッカースタイルが，哲学が変われば，指導は全く違うんですよね」

＊「その辺りで指導される内容が全くこう，変わってきてるということが，やはり受けてきた指導とは全く違うなあと」

（大林）「そうですね．そういう意味ではこういうふうに（過去に受けたコーチングからの影響を否定する内容をアンケートに）書いてますけど．ただね，本当，こう普段やらなきゃいけないフィジカル要素だったり，選手としての気持ちの部分とかっていうのは，もちろんね，そんなのは変わんない．変わんないと思うんで」

大林氏は事前アンケートにおいて，被コーチング経験が自身のコーチングに与える影響はないと回答した．その背景として，「いや，もうトレーニングメニューから全て変わっちゃってるんで」と語り，サッカーのスタイルやトレーンングメニューや，チームとしての哲学の変化等をあげた．「フィジカル要素」や「選手としての気持ち」等，変わらない部分もあるとしながらも，サッカーの変化とともに，サッカー観やコーチングの内容が変化してきたことから，大林氏の有する経験と，大林氏のコーチングにおける直接的な関連性は薄いと考えていることが見受けられる．

【語り２】サッカーへの姿勢

大林「（大林氏の現役当時は）『おれらサッカーやってればいいんでしょ』（大林）っていう．『結果出せばいいんでしょ』（大林）っていうような感じだったんですけど．ぼくらが今，選手に伝えているのは，もちろん結果もそうだけど，内容．Xとして誇りを持って．で，Xのプレーヤーとして，やると．ピッチ以外のところもね．ちゃんと，プロ，プ

ロになる選手としてはどういう選手じゃなきゃいけないとか．普通，ちゃんとね，あの，世間に，一般の人に混じっても，逆に見られてるわけだし．その辺のところはもう．昔はねえ，Jリーガーなんか茶髪でピアスして，外いって（外出して）ね．ちょっと騒がれて．…そういう時代もあった.実際ぼくらも,おれらもそういう時代を経験してるし見てるし．で，そこに対して（コーチから）何かいわれたかっていうといわれてないし．でもそうじゃなくて，もう本当にプロっていうのはあの，みんなの見本にならないと．なれるような人じゃなかったら，なる資格はないって逆に教えてるから」

＊「時代の変化とか，社会的な立場の，周りからの見る目の違いとかもやはりそういった指導にはかなり影響を」

大林「そうそう．（アカデミーの選手たちには）『そこ（プロサッカー選手を志す人間としての立振舞い）ができないんだったら，もうサッカーをする資格はない』（大林）というふうにいってるから．昔はね，『サッカーしてればいいんでしょ』（選手）っていうような雰囲気が．その辺もね，やっぱ違う，違いになってくる」．

大林氏がアンケートにおいて記述した「サッカーへの姿勢」に関しても「昔よりは意識はもう違いますね」と，大林氏が選手時代の経験とは状況が大きく変化しており，「実際（記憶に）あんまなくて，覚えてる，印象に残ってる言葉とかもなくて」と当時のコーチから受けたコーチングから印象に残っている事例は特にないと語った．一方で，大林氏が現在コーチとして関わる選手に対する要求は「そこ（プロサッカー選手を志す人間としての立ち振舞い）ができないんだったら，もうサッカーをする資格はない」と，時代や社会的変化を起因とするものであった．15年に渡るプロ経験やプロサッカー選手が置かれる社会的立ち位置の変容のなかで構築された大林氏の価値観を規準としたコーチングを意識していると考えられる．サッカーと直接関連するオン・ザ・ピッチ[10] におけるプレーに関する事柄だけでなく，サッカーを離れたオフ・ザ・ピッチ[11] におけるプロサッカー選手としてのあるべき姿に対するコーチングに重点を置いていることがうかがえる．

【語り３】コーチングのスタイル

大林「キャラクターでいったら，基本あまり怒らないようにはしてる．さっきも話したけども，その，コーチってね，言葉があって．要はその，選手を，チームを引っ張って行く，グイグイ引っ張って行くタイプではないと思うので．どっちかっていうと，ナビゲーターじゃないけど，『こうするんだよ』（コーチ）『チームとしてはこういうやり方でやるよ』（コーチ）っていう，ナビゲーションをして，で，それに対してチームが勝手に動き出すように持っていきたい．で，ちょっとズレてるやつがいたら，ちょっと修正してあげる．指摘してあげる．でも，引っ張れる，そのグループのなかでどんどん先頭を引っ張れるやつは前にいると引っ張っていくし．っていうようなこう，状態を作るような」．

大林氏はインタビューの途中で会話の内容を現役時代の監督についての補足に戻した．

大林「森田さん（大林氏が現役時のXクラブトップチーム監督）はすごい先頭で行く感じがあったんで，選手としてはすごい楽だった部分はあるんだけど．その，伸びなかったかもしれない．その，森田さんが結局いなくなったことでXって『ガタッ』って成績が落ちた．それじゃあ困るし」

＊「その辺り，プロの指導者，トップの指導者と育成年代を指導されてるってことでの違いもありますか」

大林「多少あるけど，でも，そんなにでも大きく変わりはないのかなって気はしてる」

＊「とういうと，やっぱり大林氏がチームを離れられた後でも，そのチームが，ブレずに（一貫性を保って）行けるというような」

大林「もちろん，もちろん．ちゃんと．というか，勝手にあとはその，ここに，今やってる子たちはね，トップ行ったり，大学に行ったり，次の進路に進むわけだから．ここから離れたから，何も，ねえ．『大（大林）さんから離れたから，何もぼくらできなくなった』（アカデミー選手）じゃあ困る，ほんと困るし．Xから離れたからできなくなるじゃあ困

るんで，ある程度自分たちでもちゃんと進めるように，自立したところを作っておかないと．私生活も，サッカーに関しても」

＊「そういった面でいうと，（U-16（高校生年代）からU-18の）3年間だけではなくてもっと長い目を，見据えた指導を実際にされていると」

大林「そうですね」

＊「ピッチ内でも，ピッチ外でも」

大林「だから本当，目的はね，そのトップチームにやっぱあげることだから．そう．そこはやっぱり大きなところだと思う．トップ，プロになったから満足してしまう選手だったらね，困るわけだし．プロにいって，レギュラーになって，代表に入って海外まで行くような選手をやっぱ育てなきゃいけないと思ってるんで」．

大林氏は現役時の監督を尊敬するが，当時の監督のスタイルは大林氏の目指すものではないという旨を語った．コーチ独自のカリスマの重要性を理解しながら，選手育成を長期的な視点で考えた際，コーチのカリスマ性が有する影響力に頼るスタイルの脆弱さを指摘した．大林氏が目指すコーチングスタイルとして，大林氏がXから離れたとしても選手が変わらずプレーできるような「ナビゲーター」としてのスタイルの確立について語ったことからも，コーチングスタイルに対する一貫した考えを読み取ることができる．

【語り４】海外チームのコーチング現場

大林「（S級コーチライセンス講習会の課題である）海外研修で．その前からもう，（バルセロナ（スペインリーグ強豪クラブ）が）好きだったのもあるし．Xのアカデミーが目指してるところもそれに近いものがあるんで．そこはもうかなり影響は受けていますね」

＊「具体的にどういったことが影響を受けられていますか．哲学の部分であるとか，指導の方策とか」

大林「だから．まず，クラブの哲学のところ．で，（Xと）哲学の内容は多少ずれるかもしれないんだけども，その，ただ一つクラブがそういうフィロソフィーをもってやれるかやれないかっていうので，大きく変わってくると思うんだよね．何となく育成持ってる下部組織があって．で，でもいろんなコーチがいて，いろんな指導をしながらやっていくのも一つの手だと思うし．Xはさっきもいいましたけど，本当に一本ね，芯を通して指導しててて．それがもうクラブのフィロソフィーになってきてるので．それをブレずに．やれるのは，やってたのは，もちろんバルサ（バルセロナ）だと思うし．それはすごく参考にしたと思う」．

大林氏はサッカー先進国のクラブチームの視察から，「それ（あるトレーニングメニュー）をジュニアから，…U-18．で，ジュニアから同じメニューを，トレーニングをちゃんとやってる」とコーチングにおいてチームとして一つの哲学を共有することの重要性を実感し，チームマネジメントの部分で参考にしたという旨について語った．また，Xアカデミーにおいて「本当に一本ね，芯を通して指導してて．それがもうクラブのフィロソフィーになってきてるので」や「（海外のコーチは）基本みんな情熱家だよね」と海外でのコーチング現場において参考になった面をアカデミーに持ち帰ってスタッフ間で共有するなどの取り組みを行っているということからも，海外チームのコーチング現場の影響を受けていると考えられる．日常ではなかなか経験し得ない環境から学ぶ姿勢や態度はコーチにとって価値あることであり，その経験から，自分たちの所属組織に還元することの重要性を認識していると考えられる．

### ２．柿田氏のライフストーリー

柿田氏は関東地方出身で，X クラブユースからトップチームに昇格した後，プロとして 10 年（最終 2 年は J リーグ他クラブ）のキャリアを過ごした．引退後は X に戻り，アカデミーのコーチとしてクラブに携わることとなった．インタビューを実施した 2010 年代

初頭年より U-15 監督に就任．インタビュー当時のコーチ経験は 8 年（U-12（小学生年代）監督 1 年，U-14（中学生年代）, 15 コーチ 7 年）であった．

【語り 1】プロとしての姿勢

柿田「もう当然，プロサッカー選手で勝負していくっていうと，ねえよくいわれるのが複数年とか1年契約とかいわれるんだけど．その職業を持って1年契約っていう．…でも実際やっぱね，年齢をこう重ねるにつれて，結局その，プロでやっていく，プロで食べてく，サッカーで食べていくっていうものの，厳しさっていうか．当然浮き沈みがあって．沈んだ時期を経験していれば，外（他チームに）出されちゃったりとかね，クビ（契約満了）になったりとかすることがあって．あのそういう挫折で，厳しさを知る．要はメンタリティというか，弱いやつじゃこう，這い上がれない．…そういうのも含めて結局その，自分のこのねえ意識，メンタリティの強さがないと，本当のバイタリティがないと，勝負していけない世界なんですね．プロってやっぱり．…本当にその，本当に，その来週の次の試合のその1日の中の1時間，2時間の試合のために全力で，こう，自分を，あのしっかりとコントロールしていくプロ意識っていうのは，今のアカデミーの教える子の現場に立っても．あの，アカデミーなんていったら今ね，もうJリーグの下部組織（アカデミー）っていったら，プロの集団の下部組織だから．ね，そこで，こうプロになれるやつが多いっていう環境でもあるから，そういうのをちゃんとしっかり植え付けていく．だからそういうことを知っている自分にとって，やっぱりちゃんとそのプロ意識の大切さというか，自分をしっかりとコントロールしていく．アカデミーの選手に伝えられることで，もっと具体的にいったら，本当にその，プロじゃないけど，やっぱりそのプロを目指す集団，選手にとって，本当に今まで，アプローチされなかった，その食事の部分だったりとか，睡眠．あと練習に対する情熱とかサッカーに対する情熱とかそういうのを習慣化させることがすごくぼくらにとってはこう，大切で．そういう経験をしてきたからこそ，こう，そういう，情熱を伝えれるのかなとは思っているんですけど」．

柿田氏はプロサッカー選手としての経験を活かし，「そういうことを知っている自分」が「プロ意識の大切さ」「自分をしっかりコントロールしていく」等の「情熱」を現在コーチとして関わりを持つ選手に伝えることの重要性について語った．また，柿田氏自身の経験を振り返り，その経験と重ね合わせながら，プロサッカー選手として大切にしなければならないと感じる意識や「プロを目指す集団」としての行動，「食事」「睡眠」といった生活習慣等を，育成年代の段階から植え付けていくことに重点を置く考えを語った．さらに，アカデミーに所属する以上，社会的立場を踏まえた自覚を選手たちに促すことも把握している．そのなかで，プロという厳しい世界で活躍していくためにはどんなときでも備えておくことが重要で，柿田氏が経験してきたことだからこそ伝えることができる強みであると自覚していると考えられる．

【語り２】受けた言葉

柿田「プロでやってたときに，自分は割と早い段階でデビューをして．Xに8年いて，R（Jリーグ他クラブ）に2年いたけど．あの，プロの1年目のときに，直接その，ブラジル人の監督だったんだけど．結局その人の監督とブラジル人選手が助っ人で来てて．アンドレスっていうみんな知っている，ぼくの世代の人はみんな知っているんだけど．そのアンドレスがこういったことで.指導者じゃないんだけど,でももうその当時はもう超ベテランで,もう指導者並みの．本当に，グラウンド上の監督みたいな方なんだけど，その人にいわれたのは.結局,指導でっていわれたらあれだけど.あの『サッカー選手っていうのはあの,試合に出ることが成功でもないし，えー成功でもないし．えー簡単ではない，簡単ではないんだ．出ることじゃなくて，出続けること』（アンドレス）．その『（レギュラーとして）いることじゃなくて,い続けることが,今の自分が変わらず,在り続けることがその,成功なんだ』（アンドレス）っていうようなことを．自分が（トップチーム昇格後）ちょうどすぐに（試合に）出て，あっという間に『ダダダダ』って，こう，あの，レギュラー

確保して，経済的にもこう，何ていうんだろうな．もう，ほんとにマスコミにもこう，取り上げられて．ちょっと天狗になっちゃってのときに，そういうこといわれたのが，こう常にこう，ちょっと自分が見失いそうになったときでも，その言葉で，ちょっとこう思い留まるような．こう，言葉っていうのをかけてくれたっていうのはすごくこう，自分では，こう影響与えた（受けた）っていう．指導．具体的な指導じゃないけど，でも言葉がけってところでは指導に近いのかな」．

柿田氏は現役時代，同チームに在籍したベテラン選手から受けた言葉に感銘を受け，さまざまな場面において自分自身をコントロールすることができた経験について語った．コーチからの具体的なコーチングではないものの，言葉がけの部分の重要性を認識し，コーチとなった現在は選手たちに「納得してやってもらえるような（プレーできるような）説得力のあるような言葉を勉強しなきゃいけない」と語った．柿田氏が影響を受けたと語る「ぼくの世代の人はみんな知っているんだけど」というベテラン選手は「世界的な人」（世界的に活躍した選手）で，そのような選手の言葉だからこそ，自身に響いたことを振り返った．一方，柿田氏がコーチングする選手は「ぼくが現役の頃は，まだ赤ちゃん」で，柿田氏がベテラン選手から影響を受けた場面とは大きく状況が異なる．そのなかで自身のコーチングと置き換えて，選手から「やっぱこの人がいうからだよな」というコーチングを心がけるものの「全く今はそれができているっていう自信はないです」と，その難しさを認識していることがうかがえる．

【語り３】海外チームの現場

柿田「あの，スペイン行って，アトレチコマドリード（スペイン）のその監督さん，U-15の監督さんは基本的には，…．あの，トレーニングのときに，全く，あんまりいわないの．コーチングを．あの，シンクロ[12]で（コーチングしていた）．止めたりしないの．『フリーズ[13]を，フリーズっていうのは，あんまりないね』（柿田）っていう話をしたら『いや，

フリーズなんかはする必要はなくて』（アトレチコマドリードU-15監督）要は，やらないやつはもうクビ（他チームへの移籍）になっていっちゃう環境なんだけど，みんなやる．それはもう最低限，集中してやるし，トレーニング，試合のようにトレーニングしてるし．ただ，その選手の発想だったり，選手のいい分だったり，選手の気持ちだったりっていうのは当然リスペクトしてて．それが全て．だからそんな，1人1人にそんな．その人を戦犯扱いして，『バサッ』って止めて，いちいちそう（フリーズ）やって正したりとかするんじゃなくて．『そういうときはシンクロで，ある程度やんわりとこう，その人のプレーっていうのを尊重しながら，こう選択肢を植え付けていけばいいだけのことなんだ』（アトレチコマドリードU-15監督）．みたいな．だからトレーニングが，しっかりとこうオーガナイズされてて，いい習慣があれば，何もいちいちこう，ね．『ピッ』（ホイッスル）って止めて，『お前のプレーな』（コーチ）っていうところでその人が戦犯扱いにならないというか．する必要ないっていうか．何かね，そういうもう，そういういいトレーニングのサイクルができあがってる．ビッグクラブのアカデミーは．やっぱそういったのを見たときに，ちょっと自分にも影響受けたというか，『ああ．そういうふうな』（柿田）そういうね，自前なそういうそのいい習慣，いいグループ，いい教育があれば，そんないちいち，サッカーの，サッカーのね．スペインの，そのスペインのサッカーの歴史とか，サッカー先進国であるから，ちっちゃい（小さい）頃からそういうサッカー見てれば，当たり前のように，スペイン代表のように子どもたちもプレーする，プレーするし，しようとするし，バルセロナみたいに．その差，違いはあるにせよ．そういうね．しっかりとこう，当たり前のことをさせれる習慣とか．こう，いい教育，いいその習慣があれば，結局のところ，そんなにこう，いちいちいちいちそのプレーに対してこう，止めたりとかする必要とかはあんまりなくなるものなんだなっていう．本気でやってるとか，本気でこう，戦ってるとか，本気でこう，監督に認められようとしているような，そういう，傾向が，あの，風潮があれば，結構意外となんでもスムーズにこう，コーチがいちいち『ピーピーアーアー』いわなくても，本当にちょっとした言葉がけで済んじゃうっていう．…そういうあれ

ですよね．ちょっとしたこう，何ちゅうのかな．気づきはありますけどね．自分は．だって自分はでも，そういうレベルに立ってないっていう」．

柿田氏は自身のコーチングに影響を与えていると考える事柄として，海外チームの現場視察を振り返り，サッカー先進国のビッグクラブのアカデミーとの差を実感した経験を語った．具体的には，サッカーが文化として根付いている地域（スペイン）の選手やコーチの意識の違いや，コーチングなど，柿田氏や，日本サッカーのコーチング現場における課題として感じたことをあげ，今後の改善点として認識していると考えられる．また，今まで積み上げてきたコーチングを振り返り，「だって自分はでも，そういうレベルに立ってないっていう」と今の自分自身に力がないことを認めた．

## 第３節　解釈と考察

本章は，質的研究法のインタビューによるライフストーリーを用い，Jリーグアカデミーコーチが過去の経験について「何」を語り，またそれを「いかに」とらえ，意味づけを行い，コーチング実践に活かしているのか検討するなかでコーチング実践知の記述および解釈を試みた．コーチング学領域においてこれまでにない方法から2名のコーチのライフストーリーを考察したうえで，2名のコーチのコーチング実践知を「省察（せいさつ）[14] 的思考による受容」および「有機的[15] 改善の継続」という視点において解釈していく．

### １．省察的思考による受容

大林氏は自らのコーチングについて「自分が，あんまりちゃんと理解していないことっていうのは，いわない方がいいかな」や「今日のトレーニングは全然上手くいかなかった」「メニューがおかしかったのかな」「人数構成とかいろんなことが何かあったんだろうな」と真摯に振り返った．また「会心のトレーニングってまだ，そんなにないと思う」「完璧なトレーニングは絶対ないから」「万能なトレーニングって絶対ないから」や，トレーニングにおけるコーチングの失敗に関しても「つきものだろうね．もう，日々，日々そう」と冷静に受容していると考えられる．

一方柿田氏は，コーチライセンス講習会において「自分の感覚でやっていたものだけ」に頼ったコーチングの難しさを実感したと同時に，「それが逆に興味になった」「ああ，こんなに面白いんだ」と感じたことがコーチを志すきっかけとなった．またコーチとしての経験を積み重ねた現在も，自らのコーチングについて，「もうリアリティのないというか」「ゲームでこれないじゃん」（アカデミー選手）「有り得ないじゃん」（アカデミー選手）といったトレーニングにおける失敗を「今でもあるんだけど」「それはもうしょっちゅうあるよね」と大林氏と同様，実直に受容していると考えられる．コーチは経験をもとに継続的に組織，コーチングおよび評価を強化，確認することがCushion（2011）によ

って報告されており，両氏はそれぞれの経験をもとにそれらを習慣化することの重要性を認識していると考えられる．

### ２．有機的改善の継続

大林氏は「サッカーのスタイルもまた変わっていく」ものであり，サッカーの情報に関して「アップデートしていかないといけない」と理解している．また，アンケートでコーチングの向上について記述し「（選手に）もっと的確に響く言葉」「言葉探し」「『ストン』って入るような相応しい言葉」を「常に探して」「見つけてというか，していかないといけない」や「本当，日々改善するようにはしてますね」とあるように，コーチングの向上を模索し，コーチングに対する改善を継続していくことの重要性を認識していると考えられる．一方柿田氏は，自身のコーチングについて「ちょっとずつ，ちょっとずつこう，自分も前進しなきゃいけないので」との認識から「（コーチングにおける）言葉の持つ意味なんかは常にこう考えて」コーチングを実践することを心がけている．その過程においても「もっとこう的確な言葉があったかもしれない」と自問し，「当然，自分で工夫して，振り返って勉強して調べたり」といった思考によってコーチングの改善を意識している．さらに，近年のXアカデミー出身選手の活躍についても「これで全然満足してはいない」と語った．「まだまだもっと良い」コーチングをすることで，アカデミー組織としての成長の停滞を危惧し，現状を「キープしていくのも難しい」といった認識から，継続していくことの重要性を理解している．また，これは柿田氏が選手時代にアンドレスから受けたアドバイスの内容に近似したもので，選手としての経験をコーチングに応用しているとも考えられる．Mallett et al.（2009）は形式的なコーチ育成の限界を指摘しており，上述した両氏の現場における実践を通じたコーチング技能向上の取り組みは，コーチ育成の観点からも，重要な知見となり得る．

## 第４節　研究課題１のまとめ

本章で対象としたコーチの語りから，コーチは過去の経験について，ポジティブ，ネガティブな事例に関わらず冷静に受け入れ，自らのコーチングに踏襲するのではなく，コーチ自らによってそれらの経験を解釈したうえで，修正し，コーチングに活用するといった方策を採用していることが確認された．このことから，コーチは自らのコーチング実践を省察的思考によって振り返るなかで，コーチとしての成功体験を好意的にとらえるだけでなく，失敗事例も誠実に受容しつつ，選手育成に関する長期的な視点から日々のコーチング実践において有機的改善を絶えず繰り返していることが推察される．

これは「コーチは自らに『脱体験化』への研鑽を課していかねばならないことは至極当然であろう」（内山，2013，p. 690）や，教育学の見地からさまざまな分野の専門家についての分析によって提示された，「反省的実践家」（Schön, 1983）という概念をもとに「反省的実践家としてのスポーツコーチ像」を考究した報告による「『反省的実践家』論はコーチングにも応用できるであろう」（陰田ほか， 2014b）という説を支持するものであると考えられる．また，2名のコーチのライフストーリーから読み取れるサッカーへの姿勢や態度から，サッカー選手として熟達化を成し遂げた経験や方略を，コーチとしての熟達化へ順応させていくことに活かしている可能性がうかがわれる．このことは「コーチの存在理由は，なによりも『自分（の競技レベル）より優れた選手を育成する』と言う点にあるはずです」（佐藤，2011, p. 60）との指摘にある通り，コーチが対象とする選手の目標に対してどのようなコーチングを心がけるのかということにおいて重要な視点を含むと考えられる．

以上，本章の試みから，コーチは過去の経験から学び，自らのコーチングを「省察的思考による受容」をもとに「有機的改善の継続」によってコーチとしての熟達化に向けた取り組みを日々実践することの重要性が新たに提示された．このことから，コーチングという名辞を「コーチによるコーチング実践によって，コーチ自身を成長させる営みである」と，従来にない視点によって再考することができる（図１）[16]．

これらは一見自明のことのように考えられるが，コーチが自らの経験について，ライフストーリーを語ることによって振り返り，自己をどのようにとらえているか追考することによって生成される新たな気づきは，コーチ本人にとってだけでなくコーチング学への貢献という観点においても中枢的な知見となり得る．ライフストーリー研究の特徴として「読者が，ひとつの社会過程たるライフストーリーの生成プロセスを追体験（追試）出来るようにし，そのことによって調査協力者（語り手），調査研究者（聞き手＝書き手），そして調査研究作品の読者（読み手）を出会わせ（相互に関係づけ），三者間での経験的コミュニケーションを可能にしていくこと」（小倉，2011, p. 147）が指摘されており，本章のライフストーリー研究によって生成されたコーチング実践知が現場においてどのように活かされていくのか，今後の検討が必要である．本章の解釈を実践現場において了解可能な存在へと完成させるため，本章におけるアプローチをさらに展開，蓄積し，コーチ・研究者を含めた相互主観的世界での批評に晒されることが必要不可欠である．そのプロセスにおいて，解釈に修正が加えられ，研磨されるなかで，多種多様な環境下にある育成年代のコーチング現場（生活世界）と理論（科学的世界）を含めたトータルな世界で相互主観的な妥当性の追求が求められる．また，本章において充分な議論がなされていない，オン・ザ・ピッチ，オフ・ザ・ピッチにおけるコーチングや，コーチの価値観などについても克明な論考が要求されると考えられる．

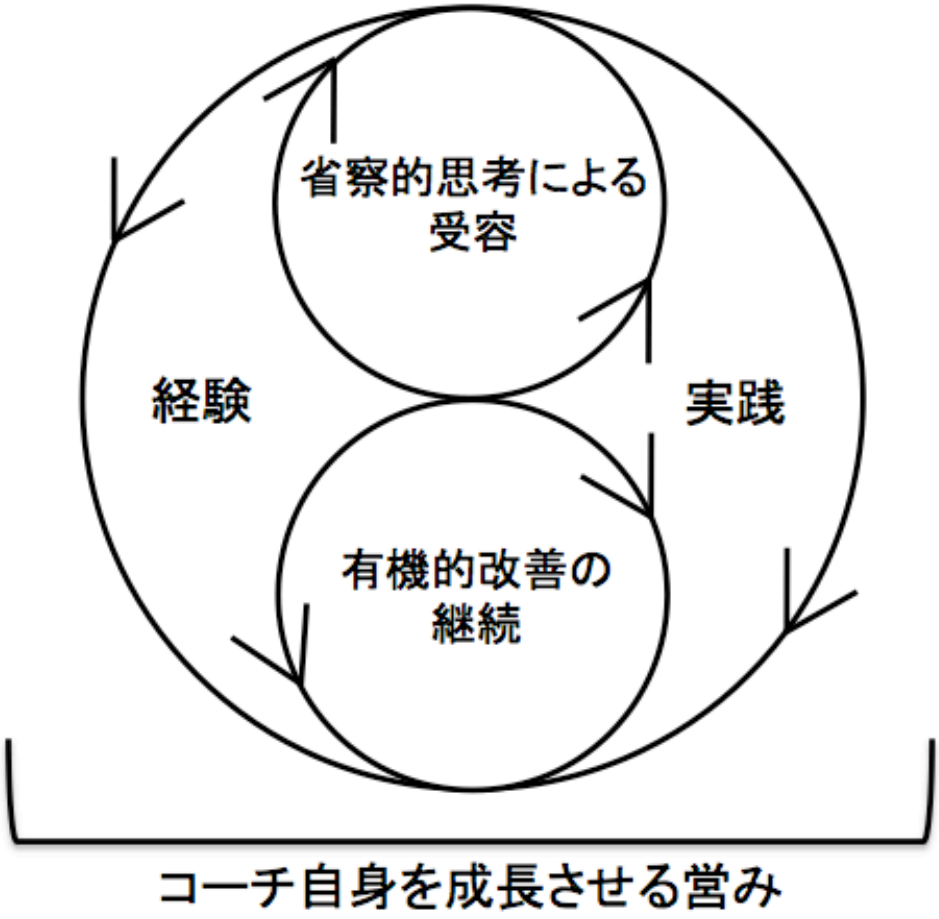


図１．コーチング実践思考モデル

# 第３章　研究課題２

## 育成年代プロフェッショナルサッカーコーチの
## コーチングに関するライフストーリー

## 第１節　概要

### １．本論における研究課題２の位置づけ

研究課題１では調査者である筆者の語りの呈示はなされているものの，筆者の構えや思考の変化に対する考察や記述等が欠ける．これは，ライフストーリー研究の標榜する対話的構築主義において決定的に重要な問題点であると考えられる．そこで，本章で取り扱う研究課題２においては，調査対象者である２名のコーチはもとより，調査者である筆者の立場を明確にしたうえで，筆者の語りを記述することで，筆者自身の姿や思考の変化についても，解釈および考察していく．

### ２．対象者ならびに手続き

研究課題２で対象とするのは，Jリーグディビジョン1（2016年シーズン）に所属する，Pクラブアカデミーの藤井氏（男性（40代），P東部ジュニアユース監督）と，Yクラブアカデミーの加藤氏（男性（30代），Yユースコーチ）のコーチ2名とした（いずれもインタビュー当時）．両氏はJFA公認の上級コーチライセンス（A級ジェネラル）を所有し，コーチとして生計を成り立たせている育成年代のプロフェッショナルコーチである．また，種別を問わず，全国規模の大会において優勝を含む優れた実績を残し，トップチーム昇格選手を継続的に輩出する日本トップレベルのアカデミーにおいて，藤井氏は14年，加藤氏は9年にわたりコーチングに従事する．さらに，両氏は大学において体育学を専攻し，卒業後，プロサッカー選手を経て，引退後にプロフェッショナルコーチとしてセカンドキャリアをスタートした経歴を有する，日本の選手育成現場における数少ないコーチであることから，本章の目的に対して適任者であると判断した．

対象者の両コーチとは，2010年代初頭に共著者とその他のサッカー関係者を通じて面識を持った．それぞれの対象者に電話で「これまでのコーチング経験を軸としたインタビュー調査」を依頼し，快諾を得た．インタビューに先立ち，プロフィール用紙および，過去の経験を想起するための事前アンケートを郵送，または直接手渡し，インタビュー前の記

入および，回答をお願いした．インタビュー当日に改めて調査の趣旨を口頭ならびに，文章で説明し，インタビューが開始された．なお，調査に関する説明では，インタビューは研究論文としての公表を前提にICレコーダーに録音すること，調査協力者本人の意思により，どの段階においても調査への協力を拒む権利を有すること等が，調査者である筆者から伝えられた．2名のコーチによって記入されたプロフィールおよび，回答されたアンケートをもとに，インタビューを実施し，ICレコーダーに録音した．インタビューは，藤井氏がP東部クラブハウス，加藤氏が筆者所属大学院セミナー室において，筆者がインタビュアー（調査者の立場）としてそれぞれ1回ずつ実施された．インタビューの所要時間は書面で1時間程度と事前に通知し，藤井氏が1時間7分，加藤氏が1時間2分であった．

### ３．調査者

調査者である当時の筆者は，体育・スポーツ科学を専攻し，サッカーコーチングの研究に従事する大学院生であった．本論における調査の出発点は，育成年代の優秀なコーチは自らのコーチングに関する経験をどのように理解し，とらえているのかという問いの設定であった．調査当時の筆者は院生としての立場を生かし，サッカーの育成年代を中心にさまざまなコーチング現場におけるコーチング実践や，フィールドワークの一環である本章を含む一連の調査において，多様な背景を有する育成年代のコーチを対象にインタビューを実施した．本章ではその内，プロフェッショナルコーチ２名の語りをライフストーリーとして再構成し，論考の対象としている．

## 第２節　対象者のライフストーリー

以下，それぞれのコーチの語りは，質的研究のなかでも詳細記述重視による方法論を用いた論考において読者の読みやすさとリアリティの確保を支える「二重奏形式」（小林，2000, pp. 101-114）に倣い，呈示する（吉田，2012, 2013, 2014）.

以下，インタビュー中の，藤井「　　」，加藤「　　」はそれぞれのコーチ，＊「　　」は調査者（筆者）の語りである．語り内の『　　』は語り中の会話等（発話者），その他の（　　）は筆者による補足等，…は省略で，個人名は全て仮名，地域および組織名はアルファベットにて表記する．本章では，論考構成の関係から，両氏のコーチング実践ならびにそのリフレクションに関連すると考えられる語りを選択し，全体の文脈に配慮ながら呈示していく.なお,ライフストーリーと並行して記述される筆者による解釈においても，同様に両氏の語りは「　　」で示す．また，本章はライフストーリーの特徴ともいえる対話的構築主義に依拠するため，調査者である筆者自身の姿，思考の変化についても，語りに沿って適宜記述していく.

なお，呈示されるストーリーは事前アンケート，全体の語りならびに，インタビュー前後や最中にとったメモ等を参考にし，筆者による選択および判断にもとづき記述されたものである.

### １．藤井氏のライフストーリー

北信越地方のW県内上位の進学校であるG高校を卒業後,関東のS大学に進学した藤井氏は，卒業後にJリーグPクラブへ入団し，2年で契約を終え選手としての現役を引退．引退後，S大学時代の恩師の計らいで，コーチライセンスを取得した後，Pクラブのアカデミーコーチとして選手育成に携わることになった．その後，Pアカデミーにおいて，各種年代のチームに監督,コーチとして関わり,育成年代プロコーチとしてのキャリアを形成する.

【語り１】高校時代

藤井氏のコーチングの根底には「人間としてどうしなきゃいけない」あるいは，「道徳的に話をされる人」であった「高校時代の先生」からの薫陶があるという．当時の先生は「あれこれいわない人」「極端にいえば練習（に）出てこないとき」もあり，また，練習においても「見てるだけ」というような印象であったという．一方で藤井氏は，「情熱がない」ということではなく，選手の自主性を重んじ「自分たちがやれ」（高校時代の先生）という先生のスタンスから「影響を受けましたね」とも語った．

＊「そういった，サッカーと，サッカー以外のところで受けた指導っていうのが特に印象に残っていると」

藤井「そうですね．サッカーの面でも，ありましたね．合宿のときに，朝から坂道走るのとか（というメニュー）があって．…でも自分は『まだ朝起きて，ちゃんと血液もちゃんと循環もしてないし．…そんなの走っても…有酸素的なものとか，鍛えるとかって，…意味ないじゃないですか』（藤井）っていったんですけど．『それはお前が走りたくないだけだろ』（高校時代の先生）っていって．でも，そういわれても自分のなかでは，確かにその，そこに走るっていうこと自体で，その，体力的な効果とかっていうものは『ないだろうな』（藤井）って．ちょっと不服に思いながらも，決められたことだったのでやってはいたんですけども」

＊「はい．高校時代にそういう（笑）」

藤井「はい．いいます．いいます．そういう先生だったんで．練習も自分たちで．ぼくも休み時間とか，授業中に，今日の練習メニューこうしようって考えたり．あのー，（基本的に先生から）練習メニューはいわないので」

＊「はい．自分たちで」

藤井「自分たちでっていう．この前の試合こういうところがあれだったから．多分でも，自分のなかでそういうの（経験）もあって指導者なりたいっていうのは，多分自分のなかでそういうのもあったんでしょうけども．そういう先生だったんで．あの，自分のこう，

考えてることとかを，その，押さえてまで，嫌なことを別にやる必要ないし．『いいたいことあれば別にいえば（主張すれば）いい』（高校時代の先生）っていう．『そのうえで答えを出していけばいい』（高校時代の先生）みたいな，感じの先生でもあったんで．で，その合宿のときに，『そんなん走っても意味ないじゃないですか』（藤井）っていって」．

高校時代の先生は，「いいたいことがあれば別にいえば（主張すれば）いい」や，「（自分で考えた）そのうえで答えを出していけばいい」（高校時代の先生）というように選手の自主性を重んじる人物であったという．合宿中に先生が準備したトレーニングに対して，藤井氏は効果の低いことを理由に，「あんまり意味がないじゃないですか」と主張したが，結局「決められたこと（メニュー）」であったこともあり，「ちょっと不服に思いながら」実施したという．先生から，「嫌だけども，嫌だけど，やらなきゃいけない」という「精神的な面での，その，強さ」をそのトレーニングにおいて「求めてたんだ」（高校時代の先生）という意図を「後で」知らされた藤井氏は，「そういうことだったんだな」と，「指導者っていう立場になってから」初めて理解することができたという．

筆者の語りから，藤井氏の高校時代の顧問の先生との一連のやりとりに関する語りに少なからず驚きを感じていることが推察される．筆者自身，高校時代は先生からの指導に疑問を持つことはほとんどなく，先生に意見をするという機会は皆無であったと記憶していることがその理由として考えられる．

G 高校から S 大学を経由し J リーグ P クラブに入団から 2 シーズンを過ごした藤井氏はシーズン終了後，P クラブから選手としての契約未更改を伝えられた．P クラブのコーチをはじめ「いろんな人」に相談した結果，コーチとしてのセカンドキャリアを歩むことを決意し，大学時代の恩師の計らいで指導者講習会を受講したことが，コーチの道に進むきっかけとなった．藤井氏によると，「中学，高校くらいから，あの，本当は先生になりた

いっていう気持ち」があったという．「大学の途中からＪリーグができて」というように，藤井氏の少年期はＪリーグ発足前であった．高校時には「将来的にサッカーをずっと続けていくっていうと，実業団でやるか，もしくは先生やりながら，サッカーに関わっていくかとかっていうのしか（選択肢として）なかった」こともあり，サッカーに長く関われるのは「やっぱり指導者かな」という考えがあったという．コーチとしてのセカンドキャリアを選択した藤井氏はコーチとして大切にしていることについて語った．

【語り２】コーチの情熱

藤井「一言でいうと，パッションですかね．情熱ですかね．今自分が見てるチームは，プロ選手になりたいっていう選手ばっかりなので．選手がプロになりたいのであればそれを助けるというか，そういう立場として選手にプラスになることを，常に伝えると．伝え方とかいろいろあると思うんですけど，そこは絶対にブレない（一貫性を保つ）っていうのは一番大切にしているところです」

＊「情熱の伝え方で，実際にされているようなことっていうのがあると思うんですけれども，それについて教えてください」

藤井「はい．よく見るということと．選手の精神的な状態とかを見ながら．あとチーム全体として動かないといけないところもあるので．よく見て，その状況によって，叱ったらいいのか，理解させるように伝えたらいいのかとかっていう，その伝え方ですよね．その部分を．何でも熱けりゃ情熱があるっていうわけでもないと思うので．こっちが冷静になって伝えなきゃいけないこともあるでしょうし．ただあくまでその選手をプロにするためにという，熱い気持ちをもって接するという部分で．情熱というのはそういう意味ですね」．

藤井氏は，例えば，プレーのミスに関して，「一生懸命やろう（プレーしよう）としてのミス」なのか，「100％（の力で）やって（プレーして）ないうえでのミス」なのか，といった現象に対するコーチとしての「見極め」が重要であると認識していると考えられ

る．そのなかで選手が 100%のパフォーマンスを追究できていなければ「（全力で）やれよ」と，厳しい要求をする一方で，「（一生懸命）やってる（プレーする）うえで，質が足りない」場合には「こういうふうにすればいいんだ」というように「冷静に伝えて」いくなどの，状況に応じたコーチングを心がけるという．

コーチングにおいて，選手の主体性を重視するという藤井氏であるが，その一つのきっかけとして，後に J リーグや国際舞台において活躍することとなった，現役の J リーガーとして活躍する（2016 年現在）三宅選手のサッカーに向き合う姿勢について語った．

【語り３】基準

＊「何か具体的なこれまでの経験のなかで，これは印象に残ってるなみたいな」

藤井「そうですね．いろんな選手を見てきたんですけど，自分が向上したい向上心っていうんですかね．一言で向上心っていっていいのかわかんないですけど，それが強い子（選手）っていうのは，自分でもやろうとするし，伸びてくんだなあって．自分が見てたその期間だけじゃなくて，その後の成長とかも含めて．変わっていったりとかっていうことは多々あるんで」

（中略）

＊「藤井さんの情熱が，彼（選手）にも伝わったっていう」

藤井「いや，そういうことではないですね．別にあの，自分（藤井氏）どうこうじゃなくて．それは変な話，他の人でも．例えば（自分と関わっていない）他の場でも，そうであったでしょうし」

（中略）

＊「そういったものを持っている選手と関われたということは非常に印象に残っていると」

藤井「はい．そうですね」．

藤井氏によれば，三宅選手は「小学校時代からいろんな（チームの）セレクション」を受けるが入団に至らず，ようやく合格したＰ西部ジュニアユースで「一緒に」サッカーに向き合うこととなった．Ｐクラブ内で三宅選手の「よさ」について，「（スタッフから）認められてた部分は多かった」ものの，「逆に（要求するレベルに）足りない部分」もあり，「ユース」昇格が見送られ「高校（部活動）」へ進路を選択した．Ｐクラブを離れた三宅選手は紆余曲折を経て，「（日本）代表になってっていうくらい（の選手に）なってる」という成長を遂げた．藤井氏は，「彼（三宅選手）を思い出したときに，さっきの自分のパッション（情熱）っていうこともそうですけど，彼のサッカーに対するその気持ち」には相当の気概があり，「すごかった」という．当時から，「サッカーが大好き」で「自分っていうものをやっぱりしっかり」と確立されていた三宅選手の「どういう環境であっても，もう好きだからやる」という「サッカーに」取り組む姿は，藤井氏の「選手を見る」評価の「基準に」なったと考えられる．

ここでの対話における筆者の語りで，藤井氏の三宅選手についての説明に対する理解の変化に着目したい．筆者はインタビューの冒頭部分における藤井氏の「情熱」に関する語りの内容から，あたかも藤井氏のコーチとしての情熱が三宅選手の成長において重要な役割を果たしていると理解していた．筆者は「コーチの情熱」の対話中「情熱の伝え方で，実際にされているようなことっていうのがあると思うんですけれども，それについて教えてください」と問いかけにあるように，「コーチング」＝「コーチから選手への働きかけ」という筆者の認識がそのような語りの表出に起因していると考えられる．しかし，その後の対話における藤井氏の語りの内容から，筆者は自身の理解に対する誤りに気づき，藤井氏の語りの本旨についての正確な把握につなげていることが筆者の語りから確認され，対話のなかで筆者のコーチングに対する見解に変容が生じていることが推察される．

【語り４】コンディショニング

藤井「そうですね．…トップのプロは当然週末の試合がかなりハードなんで．中学生もハードなんですけどね．（トップのプロはより）ハードなんで，それ（試合）にもっていくために．例えばその前日なんかちょっと軽く調整して．試合終わったところ（試合後のトレーニング）はフィジカル（トレーニングを集中的に）やって．（試合に向けて）徐々に軽くしていって．シーズン始まるとほとんどもうコンディション調整で，次やる対戦相手のそのとこ（特徴や戦術等）に合わせて，戦術確認したりっていう流れが多いんですけど．でも，中学生は，逆にあんまり軽い（トレーニング）っていうのは必要ないのかなとか．それは自分の経験のなかでと，あと選手たちの状態とか見てて思ったことで．前日でも，普通に，『ガンガン』（負荷の高いトレーニングを）やることも結構ありますし．でもそれが続いてきて，ちょっと疲れたまってきてるって思ったら，軽くしたりってこともあるんですけど．その辺は．あ，何ておっしゃいましたっけ．質問」

＊「あの」

藤井「あ，そうそうそう．あの，いろんな影響」

＊「はい．とくにどの年代で（受けられましたか）」

藤井「というのが難しいですよね．何かあの，自分たち．自分が選手でやってきたときを踏まえたうえで，でいろんな年代があって（を経験してきて）．で，逆にそれと今違うなっていうふうな意味で，その経験となってる影響っていうか，っていうのもあるし」．

藤井氏は，これらのコンディション調整における差異について，「というのが難しいですよね」と付言し，「自分が選手でやってきた（プレーしてきた）ときをふまえた」感覚や，選手，コーチとして「いろんな年代」を経験してきたことによって獲得した知識等が「逆にそれと今（は）違う」こともあり，それらが相互に「影響」し合うというような「そういう括りで，（自分の経験と照らして）この年代が，この年代がということではない．トータルとした（これまでの）経験」が現時点でのコーチングの幹となっているという認識を示した．このように藤井氏は自らの選手経験やコーチとしての経験を有効に活用し，

現在関わる選手たちに見合ったコンディションの調整方法をコーチの目線から模索する．ここで，「あ，何ておっしゃいましたっけ．質問」という藤井氏の語りに対して筆者は，「あの」と反応することしかできなかったが，藤井氏はさらに語りを展開し，語ったばかりのコンディションに対する理解をとらえなおしていることが推察される．

筆者は，藤井氏のコーチンングにおけるコンディションに対する語りを受け，藤井氏がこれまでの経験において特にすばらしかったと考えるトレーニングをどのように踏襲し，コーチング実践に活かしてしているのかに着目した質問をしていることが見受けられる．それに対する藤井氏の語りはプロ時代に経験したトレーニング実践を育成年代の選手に即した内容にアレンジしながら応用するというものであった．藤井氏は，経験と知識を織り交ぜ，擦り合わせながら実施するコーチングについても「というのが難しいですよね」と問いかけ，常に最適なトレーニングを追い求めながらコーチング実践につとめる真摯な姿勢を，筆者が肯定的に受け入れていると考えられる．

藤井氏のコーチングに対する一連の姿勢には，「今もって（関わって）いるチームを．選手１人１人を上（トップチーム）につなげられる」ように育成することと，「チームを強くする」という両軸が備わっていると考えられる．さらに，「選手たちもそこを希望しているんで」と，ユースやトップチームへ昇格させることが「第一」の目標であるとしながらも，「（昇格）だけじゃないです」と含みをもたせた．「三宅選手（2010 年代初頭，当時海外リーグ所属）みたいにどこにいってもやっていけるような」選手の育成という目標をアカデミーとして共有していることについて，「（選手たちには）いろいろな可能性はあると思うので．別にユース上がったからって（に昇格したからといって）それがゴールっていうわけでもないですし」と語りをまとめた．

## ２．加藤氏のライフストーリー

関東地方のM県内上位の進学校であるR高校を卒業後，関東のS大学に進学した加藤氏は，卒業後にJリーグYクラブへ入団した．2年で選手としての契約を終え現役を引退．引退後，Yクラブ普及部，女子ジュニアユース等のコーチと，各種チームに関わり，育成年代プロコーチとしてのキャリアを形成する．

【語り１】高校時代

加藤「顧問の先生から影響を受けたと．それは，何かいわれたというよりも，一緒に体を動かしていろんなことを見せてくれたっていうのが，すごいぼくのなかでは今の自分の指導に影響してるなっていう．見せることによって，選手として納得するっていうのもありますし．それを見せられるっていうのが，ある意味，すごいなっていうのがあったので．…数学の先生だったんですけど，でもサッカーの練習は必ず出てきてたし．プロを意識させてくれたのもその人なので．プロになるためには，ここの，「S（大学）に行った方がいい」（顧問の先生）とか．そういう何ていうんですかね．プロへの道を作ってくれた人というか」

（中略）

＊「その当時受けた指導が実際に加藤さんが，今，されている指導にどういうふうに影響されていますか」

加藤「だからできるだけ一緒に，何かこう選手たちとプレー，プレーできるのであれば見せていこうとか．あとはそのサッカーに対して．真直ぐ．サッカーに対して真直ぐっていう表現がちょっと曖昧ですけど．本当にサッカー好きっていうのがにじみ出ているっていうところですかね．何か」．

このように加藤氏のコーチングは，「体を一緒に動かしていろんなことを見せてくれた」あるいは，「プロを意識させてくれた」という高校時代のサッカー部顧問の先生からの影

響を受けるという．「その当時もM（県）の教員チーム」において選手としてプレーを続けていたという先生は，「国体に何回も」出場し，「優勝も経験されている」という実力者であった．

加藤「サッカーを指導している姿とか．いろんな先輩だとか何かの不満とかにも向き合ってるというか．逃げずに．試合に出れない選手も先輩でもいたし．そういう選手，OB（からの意見）とかにも対しても結構毅然としてたように感じて．何かそういったものって，今も．ぼくも何かこう間違った，何か曲がったことに対しては，何を思われようが『ビシッ』という．いったりとかも選手にもするんで」

＊「もうこのあたりにつきますか．指導者の情熱というところで．…」

加藤「そうですね．そういうところ（情熱）が．メンタルの部分というのが，その人を動かす大事な要素だと思うので．そこって何ていうんですか，感じる部分で．その先生がいろんな技術を見せてくれたことが，ぼくの技術．もっと上手くなりたいっていうようなことも．火をつけてくれたっていうのはあるかもしれないです．その技術的な」．

加藤氏は当時の先生について，「その人の人柄なのかもしれないですけど」と前置きし，「短い時間でも，グランドには来てたのかな」や，練習後のミニゲーム等にも「結構いたりとかして」と，「何かともに過ごす時間がっていうのが長かった」という印象を語った．実際に加藤氏も，練習の前後を含めて「4，5時間」という限られた時間のなかで，選手がクラブハウス（練習会場）に「来てから帰るまでは，常に」滞在し，選手たちの「来たときの表情」「雰囲気」「選手の様子」について，「観たい」あるいは，練習が「終わった後の表情とか雰囲気とかも気になる」ことを念頭に置き，選手よりも「先に帰るとか，（選手より）後から来る」ということは「絶対にしないように」コーチの役割を務めるという．

後にプロサッカー選手となった加藤氏に「すごいな」と感じさせるという実力者であったという高校時代の先生との出会いや過ごした時間について，加藤氏がプロサッカー選手を志すうえで重要な転機であったと理解していると推察される．

「その（Y）クラブで（選手生活を）終わるっていう決意」であった加藤氏はＹ クラブから選手としての契約未更改を伝えられ，「プロの選手として（の今後）はない」と実感し，「次のステップ」として，コーチとしてのセカンドキャリアを選択した．現役引退後の加藤氏は，コーチとしてサッカーに関わるきっかけについて，「引退したらっていうのは考えていたとは思いますね．高校の先生とか，教員っていう選択肢も含めて，指導者っていうのは考えてましたね」と語り，プロ選手としての現役中に，漠然とながらも引退後の人生を模索していたことが見受けられる．また，加藤氏は「サッカーやってるときは」コーチとして「サッカーを教えるとかそういうこと」について，「何か特別に考えてはいなかった」ものの，プロ選手としてプレーしていくなかで，「普通経験ができないところのステージ」まで到達した自身の経験を「伝えていきたいな」という思いが「芽生えてきた」という．引退後，Ｙクラブ普及部においてコーチとしてのキャリアをスタートさせた加藤氏が，「競技として」の育成年代コーチとして最初に携わったのが，女子ジュニアユースであった．

【語り２】女子ジュニアユース

加藤「要は，（全国大会につながる）地域大会で負けて，全国大会に U-15 の全国大会にいけなかったっていうことがあって．その戦ってるときに，自分自身も…，何か選手を信じきれなかったっていうのが，自分のなかであって．これじゃ勝てねーだろうっていうような．何かそういうチーム状態のまま，（地域）大会に臨んだみたいな」

＊「それは他のチームと比較して戦力がというようなことですか．それとも，チームの」

加藤「チームの，何ていうんですかね．そのサッカーを．『よくそんなんで（そういう状

態で）サッカーできるね』（加藤）みたいな．何か一つになってないっていうのが．一つにさせられなかったっていうのもあるんですけど」

＊「仲が悪いとかそういうことですか．それも含めて」

加藤「表面上は仲いいんですよ．ただ，試合に負けたり，何か上手くいかないときに，誰かのせいにしたりとか．そういうのを平気で口にしたりする．『何であの子（選手）使ってるの』（選手）とか．『いやいやいや』（加藤）っていう．何か，そういうの（不平不満を）平気で何かいっちゃう選手たちで．そういうふうに（コーチングスタッフが）させてしまってたっていうのがあったんですよね．…だから，こういうのじゃだめなんだなっていう．…こっち（コーチングスタッフ）が，その目標を立てたことに対して妥協しないっていうか．やり抜く．いくら選手の不満が出てきたりとかなんかしても，この目標に向かっては絶対曲げない，っていうものを指導者として，何か持ってないと，やれないんだなっていうのは感じました」．

選手間で「表面上」は円滑なコミュニケーションがとられていると思われるチーム内でも，状況によって「何であの子（選手）使ってるの」（選手）というような不満の声が漏れたという．それに対して加藤氏も，女子ジュニアユース１年目はコーチとしての「自信がなかった」というように，選手たちの主張，意見等「柔軟にいろんなこと」を「聞きすぎちゃった」ことから，「こっち（コーチングスタッフ）が示すべき」コーチとしての姿勢や態度が「ブレて（一貫性に欠けて）」しまったという．

＊「先ほど，「選手を信じれなかった」（加藤）っていわれたのは，どういったことになるんですかね」

加藤「選手をよく見れてなかったっていうことですかね．自分のなかで．（戦術的な選手の）組み合わせも含めて，選手たちを理解しきれてなかったっていう．それはその選手たちの不満とかそういうことをいろいろ聞きすぎてしまって．どっちかといったら．ぼくが

ブレてたというか．そういう状況で，何か選手たちと．選手を信じられない」．

これらの語りから，シーズン途中に生じてしまった亀裂を修復することは，当時の加藤氏にとって困難な課題であったとことが推察される．加藤氏は，現在の地点から，当時の自分を「どっちかといったら．ぼくがブレてた」あるいは，「何か選手たちと．選手を信じられない」までに陥ってしまったというように受容した．地域大会敗退と，結果を残せず，アカデミー内からコーチとしての厳しい評価を受けた加藤氏は，翌シーズンのコーチングについて語った．

＊「その経験から，その後変わられたことっていうのはあるということですね」
加藤「目的を（に対して）ぼくがブレないように．全国で優勝するっていう目的，目標に対して，ブレないっていうことを次の年（シーズン）に徹底して．（周囲から）何をいわれようが，このためにこれをやってるっていうふうに，こっちも断固としてブレずにやったんで．（全国大会で）一応優勝はしたんですけど．周りのスタッフに経験（コーチとしての実績）のあるスタッフの方はいましたけど．その方に特に．（女子ジュニアユース１年目に）屈辱的なこともいわれて．『（全国大会に）いけなかったか』（アカデミースタッフ）みたいな．『無理だよね』（アカデミースタッフ）みたいなことを，いってくれたので」．

地域予選敗退という結果に終わった前年シーズンに，アカデミー内から下された「（全国大会に）いけなかったか」や「無理だよね」（アカデミースタッフ）という評価について，「甘かったと思います」と受容した加藤氏であるが，「どんなことしてでも優勝してやる」「屈辱的な言葉をいわせた（いわれた）あの人（スタッフ）をちゃんとこう，認めさせて（見返して）やる」という翌シーズンのモチベーションに置き換えた．翌シーズンも女子ジュニアユースにコーチとして関わった加藤氏は，「（全国大会で）一応優勝はし

たんですけど」と控えめに振り返ったが，そこからはチームとしての目標を達成した加藤氏のコーチング実践に対する自負を読み取ることが可能である．加藤氏は，翌シーズンのコーチングについて「やり続けるとか．根気強く２年目の方がやれた」と語っており，全国大会において優勝したシーズンのコーチング実践がチームの躍進を支えた要因であることや，コーチとしての成長につながった転機として認識していることが推察される．

筆者との対話を進めていくなかで，加藤氏が女子ジュニアユースチームのコーチングを振り返り，語られたことは筆者にとって意外であった．なぜならインタビュー当時，加藤氏はＹクラブのジュニアユース，ユースチームのコーチを歴任しており，筆者はジュニアユースやユースチームにおける加藤氏のコーチング実践についての語りが展開されることを予想していたからである．また，加藤氏と筆者語りを展開していくなかで，加藤氏のコーチングがどのように変容していったかについて探っていく様子が見受けられる．また，筆者が女子ジュニアユースにおけるコーチング実践に関する加藤氏の語りを解釈していくなかで，普及からジュニアユース（男，女），ユース（男，女）と９年にわたるコーチング経験を有する加藤氏にとって「日本一」というチームとしての目標が達成された事実や，その過程においてチームを変化させることができた加藤氏のコーチングに対する取り組み，あるいはコーチング実践が特に印象の深い事例であったという関係性に気づきを得ていることが考えられる．

Ｒ高校卒業後，プロ選手を見据え，強豪Ｓ大学でプレーすることを選択した加藤氏であったが，「何かこうぼくも行き詰まってたというか．何かこう，煮え切らない」時間を過ごしたという．そのようななか，大学時代のサッカー部のコーチからかけられた「グラウンドをもう少しこう，上から見てみろ」という一言が，加藤氏の低迷期を乗り越える光明となったという．その後，加藤氏と同じく育成年代にコーチとして携わるという当時のコーチとは現在も交流があり，「今でも（コーチと）そういう話」を振り返ることがあるも

のの，「何気なかったのか，何か意図があったのか」については「ちょっとわからない」という．コーチからの一言に救われることとなった加藤氏は，コーチとなった今，「一言で伝わる言葉というか．一言で気づかせられる．簡潔に．何かそういうものはいつも模索しているような気はします」といい，コーチとして選手にかけてきた言葉について語った．

【語り３】コーチングの言葉

加藤「中学生（Y ジュニアユース）を見てたとき．男子を見てたときに．…全国大会のベスト８で負けて．その後にいわせてもらったときの言葉を，（当時の）選手が（から）『印象に残ってる』っていうふうに（後に）いわれたときは，何かそういう．（加藤氏の例と）同じようなことなのかなっていうのは．『いくら頑張ってても，自分の思い通りの結果には結びつくことがないことがある』（加藤）と．『ただ，その頑張ることを止めたら，何も残んないよ．だから，結果がこうであって負けたとしても，やり続けることが大事だ』（加藤）っていうような．『頑張り続けることがまた大事なんだぞ』（加藤）っていう話はしたんですけど」．

加藤氏は，コーチとして選手にかけてきた言葉について，「結構忘れちゃうんですよね．自分がかけた言葉って」としながら，男子ジュニアユース所属時にコーチとしてかけた言葉を，「今もまだ何か残ってる」（当時の選手）といった選手とのコミュニケーションの記憶を辿り，前述の大学時代のコーチからかけられた一言によって「『パッ』と光が見えた」経験と，コーチとしての，「何か一言で伝わる言葉というか．一言で気づかせられる．簡潔に．何かそういうものはいつも模索しているような気はします」という語りとが，「今の話だとそういうことかな」というように，語りを通じてつながったことを理解していると推察される．

＊「その，不意に出てきた，話のなかで出てきた，感じなんですか．それともこれは伝え

たいなと思って準備されていったんですか」

加藤「いや，準備をしてたというよりも，そのときの雰囲気と，直感というか．だからぼくら（コーチングスタッフ）としても，頑張ってるから，ここ（全国大会ベスト８）まで来れたし．頑張ってるから，頑張り続けたから，勝てたとか．そういういいことばかりじゃないなっていうのも．一生懸命やってても報われないことって，サッカー以外（においても），社会（に）出ていけば，誰にでもあることだし．そっち（報われないこと）の方がむしろ多いことっていうのは．サッカーを通して自分も感じてたことだし．自分も選手のときに，一生懸命やってたとしても，（プロ）選手として（の契約）は２年だし．出場時間と（に）しても，６分とか．それしか出れてない」．

筆者は，加藤氏が当時の選手たちにかけたコーチングの言葉がどういった背景から生じたものかとういう関心から，加藤氏との対話を展開していることが見受けられる．そのなかで加藤氏が「今の話だとそういうことかな」と，自身の経験と照らしたコーチングについての語りは興味深い．なぜなら，加藤氏が大学時代のコーチから受けた言葉はサッカーの戦術的指摘，加藤氏がジュニアユースの選手にかけた言葉はサッカーに取り組む姿勢に関する指摘と，その内実は異なっているにも関わらず，加藤氏はそのように語り，筆者も同じように理解していると考えられるからである．

### ３．藤井氏，加藤氏のプロ選手時代のライフストーリー

JFAは，日本サッカーが置かれる現在地の分析から今後の目標について「日本は，やっと世界の背中が見えてきたからこそ，一気に追い越したいのです．トップの国々が100年かけてやってきたことを，日本はその半分でやり切りたいのです」（日本サッカー協会技術委員会，2016，p. 6）と述べているが，自明のことながら容易でない．また，スポーツにおけるコーチやコーチングの特有かつ決定的に重要な課題として，「コーチが実現しようとするのは，コーチ自身が体験したことのないレベルのパフォーマンスなのですから，

自らの体験に頼ることができないのは自明です」（佐藤，2011，p. 70）といったことがあげられるが，この課題について，両氏のプロ選手時代の語りを考察することが有益であると考えられる．

### （1）藤井氏のプロ選手時代

藤井「自分も試合に出れないとかいうときもあって．選手によって伝え方とか接し方っていうのに差がやっぱりあると.特にやっぱり試合に出れないメンバーとかっていうのは(一般的に）当然扱い（コーチからの接し方）も粗末になるじゃないですか．それは逆に，チャンスの少なくなる選手に対して，見なきゃいけないっていうのは，感じたことありましたね．見てもらえないっていう．見てもらえないっていうか，そういうことも」

＊「実際に見られてなかったという経験をお持ち」

藤井「経験もあって」

＊「だからこそ，そういった指導はしたくないなってことは」

藤井「チャンスをもらってなかなか（活かせない）っていうのであれば，自分の責任なんで，あれですけど．チャンスがないとか．本当に『見てんのかな（見てもらえているのかな）』（藤井）っていうようなこともあって．それは自分のなかではありますね」

＊「そういったことは意識的に，意識的にというかチャンスは与えるし，いつでも」

藤井「見るっていうのは」

＊「特に試合に出ることが少ない選手っていうのは意識して見てあげているというようなことはされていると」

藤井「そうですね．（試合に）出てる選手なんかはやっぱりモチベーションも高いんで，ほっといても（放っておいても）（モチベーション高く）やれるじゃないですか．正直．だからっていうのもありますけどね」．

プロ選手時代に挫折を味わったという藤井氏は，「チャンスをもらって，…なかなか（活

かせない）っていうのであれば，自分の責任」であり納得できるという．しかしながら当時の藤井氏は，「チャンスがない」という状況に置かれ，監督やコーチに対して「本当にこう見てんのかな（見てもらえているのかな）」という不信感を抱くに至った．その経験をふまえ，「（試合に）出てる選手」は「モチベーションも高い」場合が多いため，特に気にかけることをあまり必要としないが，「試合に出れないメンバー」や「チャンスの少なくなる選手」に対しては，「見なきゃいけない」ということを意識しているという旨を語る藤井氏は，選手個々人のその時々の状況に適したコミュニケーションを図ることを重視していると考えられる．

また，これらの藤井氏の語りに対して，筆者は同意を示し，納得したうえで対話を展開していることが見受けられる．チームスポーツにおいて，監督，コーチをはじめとするチームスタッフから気にかけてもらえないといった事柄は育成年代からトップアスリートまでの多くの選手がいずれかの段階において経験する現実であると考えられる．このレギュラーとして試合に出場する機会が得にくいことは選手時代の筆者にも当てはまり，同意を表する語りの内容となった．そのなかでも特に，藤井氏がコーチとしてこれらの問題に留意し，コーチングに臨む姿勢に対して，筆者が感心させられていると推察される．

**（２）加藤氏のプロ選手時代**

加藤「プロになると，そういうの（シビアな現実）はありますね．何がよくて何が悪いかなんていうのは誰もいってくれないですし．試合に出れるメンバーに入る，入らないが評価になるんで．そういうのはプロになってから，感じましたよね」

＊「その辺りの経験も指導のなかで活きてますか」

加藤「そうですね．だから，いいすぎてもいけないし，いわなさすぎてもいけないっていうような．だからそこのバランスは，人それぞれなんで」．

プロ入り後の加藤氏は，コーチから「何もいわれないことのほうが，寂しいことだっていうふうなことも感じてたんで」というように，それまでにない苦悩を経験した．しかし，このような「誰もが経験できるものではない」感覚が，プロサッカー選手を目標とするYクラブアカデミー所属選手と関わる加藤氏にとって，コーチングの強みであることを自覚していると考えられる．

加藤「（プロとしての）経験をしてるからこそいえる，伝えられることっていうのが多分，あると思うので．そういう意味でその指導をするにあたって，（選手に）『まだ足りないよ』とか，『頑張ってるって思ってるかもしれないけど，まだまだだよ』（加藤）とか．『もっと他のやつ（選手）は頑張ってるよ』（加藤）とか．『プロになってからでも頑張り続けなきゃいけない』（加藤）とか．また逆に，悪い面というか，いいことばっかりじゃないんで．『プロの世界はある意味わがままじゃなきゃだめ』（加藤）とか．『もっと自分を出さなきゃだめだ』（加藤）とか．何かそういうのもないと（プロとして）やっていけないっていうのも感じたので．それを育成の立場から，どう伝えていけるかなっていうのを考えてはいますけれども」

＊「考え方や取り組む姿勢のところでいわれる，指導されることが多いですかね」

加藤「そうですね」

＊「実際のプレーがどう，指導がどうというよりも」

加藤「はい」

＊「気持ちの持ちようのところが，経験してきたことを伝えたいというような」

加藤「そうですね．はい．やっぱり，技術があるからプロになれるかっていったら，多分そういうことでもないと思います，思いましたし」．

育成年代サッカー選手にとって，非常に厳しいように感じられる加藤氏のコーチングも，「技術があるからプロになれるかっていったら，多分そういうことでもないと思います」

というように，選手としてプロの世界を経験した加藤氏の言葉は，育成年代の選手たちにとって重みがあり，また，実体験をベースとした説得力のあるコーチングであると考えられる．さらに加藤氏は，状況に応じて「いいすぎてもいけないし，いわなさすぎてもいけない」また，「だからそこ（コミュニケーション）のバランスは人（選手）それぞれなんで」と，その難しさを認識する．「今こいつ（この選手）にはいわないでおこう」や，「逆にメンタルがちょっと落ちてるやつ（選手）に対しては，一言いっとこう（いっておこう）」といった工夫を「育成の立場から，どう（どのように）伝えていけるかなっていうのを考えてはいますけれども」という観点においてコーチングを実践するという．

ここでの筆者の選手育成に関する考察から，問題意識の次元の低さが指摘される．筆者のそれまでのコーチングにおいてプロ選手を育成したことはなく，プロフェッショナルコーチである加藤氏の語りを肯定的に受け入れていることが見受けられる．またこのことは，「誰もが経験できるものではない」プロの厳しさを経験した加藤氏の体験知であり，対話によって紡ぎ出された語りは，筆者に限らず多くの育成年代コーチにとって有益な追体験の題材になると考えられる．

### ４．調査者の変化

本論は，日本の育成年代のプロフェッショナルサッカーコーチを対象としたライフストーリーによる論考を進めてきたが，本章ではその内の2名のコーチのライフストーリーを対象としている．また，選手としてもコーチとしてもプロの経験のない筆者が日本の育成年代サッカーのコーチング向上に対して何が可能かという問いの設定を出発点に実施したインタビューであった．そのなかで筆者は，両氏との対話から，プロフェッショナルコーチである両氏が自らのコーチングに対して真摯に向き合い，それらを受け入れる姿勢や冷静に整理しようとする態度を，肯定的に理解することに努めていることが推察される．また，両氏との対話を途切れさせることなく構築していくなかで，両氏のコーチング実践知

を紡ぎ出していこうとする筆者の構えの柔軟な変化が見受けられる．さらに，対話における語りのやりとりから，インタビュー調査における調査者と調査対象者の間には，年齢，属性，経験等によるコーチとしての序列が明確に存在し，単に「調査者-調査対象者」という枠組みの範囲を超えた関係性であったことが推察されるなか，調査者である筆者と調査対象者である両氏との対話は丁寧な語りのやりとりによって構築された「相互行為」としての「〈いま-ここ〉」（桜井，2005, pp. 38-39）であったと考えられる．

## 第３節　解釈と考察

本章では対話的構築主義の立場から描出された2名のコーチのライフストーリーの解釈を試みた．藤井氏，加藤氏の一連のコーチングに関するライフストーリーからプロフェッショナルコーチとしての実践知が見受けられる．これらのコーチらによるコーチングのリフレクションにおける姿勢や態度は心理学領域で用いられる批判的思考概念としてとらえることが可能である．批判的思考とは，古くは，古代ギリシア以来の西洋哲学にまでさかのぼる伝統を有する概念であるが，道田（2015, pp. 2-7）によれば，批判的思考概念は多様であり，特定の手順に従った思考法でないものの，合理性重視と反省性重視の二極があるという．また，批判的思考の批判については，「『批判』といっても，『非難』ということでは毛頭ない．『非難』というのは，『気に入らない』とか『良くない』とか『けしからん』とか，要するに感情的な次元での反発や反応であるが，『批判 critique』は，もともとギリシア語の『見分ける kritikos』ということからきており，対象をきちんと分析するといった知的なレベルでの操作を意味している」（佐藤，2000, p. 439）という説の理解が必要であると考えられる．さらに，実践における批判的思考概念の有効性が早くから提唱されている看護学領域において,批判的思考とコーチングは別個の概念,あるいは,「補完関係」（坪田，2013, pp. 482-485）としてとらえられてきた側面を有するが，コーチング現場におけるリフレクションの際，批判的思考をより強固な関係性として理解することが重要である．以下はこれまでに呈示した語りの他で，両氏のコーチングに対するリフレクションにおいて特に批判的思考を用いたことが表出されたと考えられる語りである．

### １．藤井氏にとってのサッカーとコーチング

藤井「これが最高の指導だとかそういうものは別にないと思うので．今自分がやってる指導も，もっともっと．人を相手にしているので．同じようなことはあるにしても同じことって（いう）のは多分ないでしょうし．そういう意味でいろんな対応力とか（というような）ことも含めて．常に勉強していかなきゃいけないでしょうからね．ただそこを絶やさ

ずにやるというか．そこは一つ大きな課題かな．一番は自分がもって（関わって），一緒にやってる選手が，育っていくためにどうするかっていうのを普段のトレーニングとか，それ以外のところから100%やるっていうのが一番だと思ってますね」．

藤井氏は，P東部ジュニアユースが「勝ったり負けたり」とさまざまな状況のなかで，「上手くいかなかったときに，まだまだ足りないな」と各々の課題を，「チームとして結果がでなかったり」「選手が力（を）発揮できなかった」などと整理した．また，「やってるのは（プレーしているのは）選手」であるものの，「自分が（監督として）一緒にやってる（取り組んでいる）」という立場である以上，「（結果がともなわない等の）原因とかいろいろあるとは思いますね」というように，自分自身に課題を設定する藤井氏の構えを読みとることができる．

**２．加藤氏にとってのサッカーとコーチング**

加藤「何かそういうことって自分からアクション起こさないと，得られないものなのかなっていう．選手たちに「自分からこうアクション起こしてボール受けろ」とか，「自分からまずやれ」（加藤）っていってるのに，おれはやってるのかなみたいな．何かそういうのも自分がいってることを，選手たちにいってることが，結構自分にいい聞かしたり（せたり）もしてる部分もあって．…何かそうやって，指導者としても人間としても，そういう選手，周りの人に育てられて，成長させてもらってるんだなって思いながら．サッカーってそうなんだなーって思いながら．そんなことを考えています」．

加藤氏は，今回の調査について，「インタビューも含めて，このZ市（インタビュー実施施設所在地）に来るっていうのも．滅多にないオフだったので．M市（Yクラブ所在地）にいればそこの地域にしかいない．そこの空気しか見れないときに，何かちょっと違うところに飛び込んで．直感的に行くことで何か生まれるかなっていうのが自分のなかでもあ

って」という発想から，「こういういい機会に恵まれて．こうやってお話もできるっていうことで.お話しさせてもらうことによって自分の考えも整理,何かできてきてるように．何かすっきりしてきてはいるので」というように，コーチとしての自分を振り返る機会となったインタビュー調査を肯定的にとらえ，コーチング実践に生かそうとする加藤氏の構えを読み取ることができる．

### ３．コーチングにおける批判的思考

JFAにおけるコーチ養成事業に携わる中山（2004）は，選手育成のためにJFAが提唱するコンセプトが科学的理論や実験結果に概ね適応するという報告のなかで，コーチからの問いかけが選手の「批判的思考」や「問題解決」を助長する役割となり得ることを述べている．しかしながら，この報告において，コーチが自分自身や自らのコーチングに対して批判的思考を用いることの必要性や有効性についての言及はなされていない．また，Knowles et al.（2005）は，コーチ養成プログラムにおいて，実際にコーチの批判的な技能の向上が稀であることを指摘している．これらのことからも，コーチの批判的思考や批判的態度の獲得はコーチング実践における課題の一つであると推察される．

このようなコーチング現場の課題に対して，本章における対話的構築主義に依拠したライフストーリーから導き出された考察から，コーチが自らのコーチング実践に対するリフレクションにおいて批判的思考を活用することにより，批判的思考態度は涵養，醸成される思考様式であると理解することが妥当である．つまり，コーチがコーチング実践を通じて批判的思考を会得し，批判的思考をコーチング実践に取り入れることが，選手育成ならびにコーチ育成において欠かすことのできない構えであると考えられる．また，そのことが自ずとコーチのコーチングの改善，発展につながり，コーチの成長を促すだけでなく，選手育成の根底を支える機能として作用することも期待される．

## ４．コーチングにおける批判的思考と批判的視点

コーチが自らのコーチングについて，ときとして立ち止まり，自らのコーチング実践を振り返ること（リフレクション）の重要性は，以前から指摘されてきた（Cassidy et al, 2004, pp. 15-29）．しかしながら，日本をはじめ，多くの国や地域において，コーチは未だ専門的職業としての地位を（一部のプロコーチを除いて）確立しておらず，日々，育成年代に関わる多くのコーチが各々の職務の合間を縫って現場に顔を出し，コーチングに従事するといったケースが多分にある（内山，2013, p. 678）．このことから，育成年代のスポーツ現場に関わるコーチがコーチングを省察する機会や時間の確保は容易でないことは周知の事実であり，コーチによる批判的思考を用いたリフレクションが普及，実践されているとはいい難い．また，批判的思考は熟慮性をともない，状況によっては発揮されにくい場面もある他，あらゆる状況に対応する万能な思考ではないという報告は，ここと が報告されている（田中・楠見，2011, pp. 87-108）．

本章の論考から，このようなコーチング現場における課題を解決し，より現場の実践に即した形として応用することが可能な理論へと接続させるため，批判的思考の「思考」を「視点」と置き換え，批判的視点として理解することも必要であると考えられる．

批判的視点とは，心理学領域の批判的思考概念の援用から本章の論考によってコーチング実践における応用を見据えて生成された視座であるが，この「視点」に関して，清水の概説は参考となる．清水によれば，「視点」とは経験を積むことで洗練される，あるいはベテランほど研ぎ澄まされるというものではなく，むしろワンパターン化してしまうことさえあるという（清水，2009, p. 87）．また，成功体験などによる過去の実績や経験に頼って視点が固定されてしまうケースもあり，経験や知識を融合させることが重要であることを指摘している（清水，2009, p. 88）．日本のエキスパートサッカー指導者のコーチング･メンタルモデルを提示した北村らが調査の対象に厳密な基準を設定したことによって，指導者の平均指導歴が22.7年，平均年齢が50.8歳であったことから推察されるように，清水による指摘はコーチングを取り扱う領域において抜け落ちやすい着眼点であることが考

えられる（北村ら，2005）．一方で，コーチの経験の重要性を看過することなく，批判的思考を批判的視点に置き換えて理解する整合性や，コーチがどのようなプロセスで批判的視点を構築し，コーチング実践に取り入れていくのかについては，今後の課題としてより詳細な議論が不可欠であると考えられる．

## 第４節　研究課題２のまとめ

育成年代サッカーコーチのコーチングを対象とした本章における一連の調査によって，コーチが自らのコーチングを批判的思考および批判的視点によってリフレクションすることは，コーチの成長ならびにコーチングの向上においてきわめて重要であるという視座が生成された．

昨今の日本におけるスポーツ界の課題として，体罰・暴力，セクハラ，金銭問題など重大な問題が後を絶えず，統括的立場にある文部科学省やスポーツ庁をはじめ，各種競技団体，スポーツクラブ，学校部活動等のコーチや教員への信頼感の低下によるコーチングの危機があげられる（図子，2015, p. 1）．この現状を打開していくため，本章から紡ぎ出されたコーチング実践知としての調査対象者であるコーチと筆者による対話や，生成された視座は，その解決策の一助となり得るだけでなく，携わる種別や年代，コーチとしての経験等に関わらず，多くのコーチにとって応用可能な知見であると考えられる．さらに，「ライフストーリー作品は，調査者である執筆者の解釈をはみだし，のりこえ，読者の新たな解釈にさえ開かれる，そうしたポリフォニー的作品化こそが求められるのではないだろうか」（桜井，2015, p. 47）という指摘にあるように，コーチング現場において，日々邁進するコーチによる活用，援用，応用が期待される．

# 第４章

## コーチのライフストーリー的リフレクションから解釈されるコーチング実践を研究する意義と今後の課題

## 第１節　本論から導き出された既存の理論的枠組みに対する見方

第２，３章では，研究課題１，２において設定された課題について人文・社会科学におけるライフストーリー法ならびに意味解釈法に立脚し，育成年代のサッカーコーチのコーチング実践について論考してきた．本章ではこれまでの論考をふまえ，教育学領域において近年注目度が高く，実践に取り入れることの重要性が提唱されてきた（金川，2006）という，Schön（1983）の「反省的実践家（省察的実践者）」を理論的枠組みの検討対象として設定し，本論における研究課題に対しての考察をまとめ，結論を述べる．

反省的実践家とは，ショーンによって提示された専門家像を示す概念で，専門家の専門性が「活動過程における知と省察それ自体」にあり，「思考と活動，理論と実践という二項対立を克服した」専門家のモデルである（秋田，2001, p. 215）．佐藤によれば，ショーンは「技術的合理性」を基礎原理とするメジャーな専門職として認知される医者や弁護士といった近代の専門家に対して，「看護婦や教師や福祉士のような複雑な実践」を有する現代の専門家は「技術的合理性」の原理の枠を越えたところで専門家としての実践を遂行していることを指摘したのであるという（佐藤，2001, pp. 1-11）．

この「反省的実践家」を理解するには，「省察（reflection）」が基盤の考え方として置かれ，「行為の中の知」「行為の中の省察」「実践の中の省察」といった概念の整理が重要となる（ショーン，2001）．これまでにも反省的実践家については，教育学をはじめとして，医師教育，法曹教育，建築家教育，カウンセラー教育，ビジネス・コンサルタントの教育等, 多様な領域において取り入れられ, 改革の基軸となり機能してきた（佐藤, 2015）. しかしながら，反省的実践家と，日本のスポーツにおけるコーチング現場との関係性について論じられた報告は少ない．これは，「反省的実践家」理論が，欧米の教育学を中心として近年注目を集め，論じられてきたことに起因すると考えられる．

コーチング学領域においても，Cassidy et al.（2004）の文献をもとに，陰田ほか（2014a, 2014b）によって反省的実践家が考究されてきたが，これらは，文献研究を軸とした範囲の枠に留まる．著者が「反省的実践家としてのスポーツコーチの在り方を問うことが急務

の課題である」（陰田ほか，2014b）と指摘するように，コーチング現場への応用といった点において課題が残ると考えられる．

一方で，日本においても，反省的実践家に類似する概念として，生田・北村（2011）による教育学，スポーツ，芸事をはじめとする各領域におけるエキスパートの熟達化で用いられる「わざ言語」の論考があげられる．生田はこのわざ言語について「特定の世界で用いられる『役に立つ』特殊な言語であるという認識を越えて，それを新たな『学び』観や新たな『教育』観を導出する」（生田，2011, pp. 29-30）ためにとらえなおすことの必要性を提起しており，今後のコーチング学領域における活発な議論の足がかりとしての役割が期待される．

これらの課題に対して，本論の研究課題１をもとに導き出された，コーチング実践思考モデルや，研究課題２をもとに導きだされたそれを支えるための批判的視点にもとづく批判的思考が重要であるといった視座は，その解決の糸口となり得る．また，本論で対象とした４名の育成年代プロフェッショナルコーチは，その背景，経歴等は異なるものの，育成年代サッカーの専門家として理解することが妥当である．本論では最終的に，コーチが各々のサッカーに関する経験についてリフレクションする（振り返る）過程を，インタビューという相互作用を通した語りからコーチング実践に関するライフストーリー的リフレクションの記述によって開示し，コーチング実践知として提示することができた．このことは反省的実践家概念をコーチングの実践現場レベルで理解するために有効であるだけでなく，本論の一連の調査に価値と意義を見出すことができると考えられる．

## 第２節　結論

### １．省察的思考による受容にもとづく有機的改善の継続によるコーチング

本論の研究課題１では，コーチが自らのコーチングについて，「省察的思考による受容」をもとに「有機的改善の継続」によってコーチとしての熟達に向けた取り組みを日々実践することの重要性が提示された．まず，コーチがコーチング実践を省察的思考によって受容することには「ネガティブな響き」が少ないことや，コーチング実践に対して「結果を正しく受け止めて正しく分析すること」が含まれる．また，コーチ自らの成長ならびにコーチング実践能力を高めていくための「次に動き出すためのエネルギーを生み出す」（畑村，2007）といったサイクルを形成していく実践知であると考えられる．次に，コーチが，コーチの有する選手としての経験，コーチが選手として受けたコーチからのコーチングに関する経験，そして，コーチとしてのコーチングに関する経験を「一つに組織され，その各部分が一定の目的の下に統一され」（新村，2008）多くの部分として集積していくことが重要となる．また，自らのコーチング実践について，変化を厭わない有機的な改善を継続していくことで形成されていく実践知であると考えられる．これらのことからコーチングは，現場におけるコーチのコーチングに関する経験および実践について，多様な要素が相互に支え合い磨かれていく「コーチ自身を成長させる営み」であると理解することが可能となる．

### ２．コーチングに関するリフレクションにおける批判的思考と批判的視点

本論の研究課題２では，コーチのリフレクションにおいて，合理性重視，反省性重視の二極に特徴を有する（道田，2015），批判的思考および批判的視点が有効であるという視座が生成された．また，研究課題１において示されたコーチング実践思考モデルを支える概念として「批判的思考」「批判的視点」を理解し，コーチング実践に取り入れていくことが重要であると考えられる．コーチが各々のコーチング実践に関するリフレクションにおいて，「批判的視点」にもとづく「批判的思考」という視座を活用し，コーチング実践

の向上に努めていくことで，コーチの有する批判的態度は研鑽され，コーチング実践能力向上の一助となり得ることが期待される．したがって，これらの視座をコーチがコーチング実践に継続的に取り入れることは，選手やチーム，クラブのレベルアップにつながり，コーチの資質向上とも関連すると考えられる．コーチには，個々のコーチの有する経験のみ頼ることや知識のみに偏重することを自ら意図的に回避するだけでなく，それら精査したうえで融合させる（清水，2009）という「不断の自己研鑽」（内山，2013, p. 690）が求められる．また，コーチとしての資質には，「批判的視点」にもとづく「批判的思考」という視座から導き出されるコーチングに関する知識，考え方等を含むコーチング実践知を，チーム，クラブのコーチ間や，その垣根を越えたコミュニティにおいて共有していくことが不可欠であると考えられる（Cushion and Denstone, 2011）．さらにこれらの事柄は，コーチング学領域のさらなる発展という観点からも重要であることをふまえ，批判的思考態度を養成していく機会や場を，日頃のコーチング現場に限らず，指導者養成やコーチ教育においてプログラムやカリキュラムに取り入れる等，積極的に設けていくことが必要であると考えられる．

## ３．結論

本論の結論として，以下の事柄が明らかとなった．まず，コーチがコーチ各々との適切な関係性や距離感において，コーチング実践に関する「リフレクション（振り返り）の場」を設定し，対話的構築主義にもとづくライフストーリーに倣い（桜井，2005）ライフストーリー的にコーチング実践を語る（リフレクションする）ことで，コーチのコーチング観を形成する「核心（core）」に迫ることが可能となる．このことに関連し，ライフストーリー的リフレクションには，各々のコーチのコーチングに対する考え方の「根幹（basis）」を探る機会としての役割が期待されるだけでなく，コーチのコーチング実践を整理することにつながり，そこからコーチング実践に関する課題が抽出されることでコーチング実践向上への示唆を得ることが可能となる．

以上をふまえ，本論で対象とした日本の育成年代サッカーにおける優秀なコーチは，個人や他のコーチの経験のみに頼り，踏襲するのではなく，それらの経験を「糧」とすることで，コーチング実践を，より高いレベルに向けて「前進（progress）」[17]させていくことの重要性について理解していることが明らかとなった．

この他では，コーチのライフストーリー的リフレクションによって構築された語りの再構成を記述，解釈，および考察していくことで，対象者であるコーチ自身も見過ごしていた新たな気づきを得ることが期待される．また，これらのプロセスを通じて生成および提示されたコーチング実践知が学術論文等として公開されることは，「ある人の経験は他の人にとってもあり得る経験であること，そして他の人の経験はその人自身にとってもあり得る経験である」（ヴァン＝マーネン，2011）というように，コーチ本人のみならず，他コーチに読まれることで「追体験」や「学び」を促進する実践的な資料としての価値を有する．さらにこれらの資料は，コーチング現場のコーチによって応用されていくことで，コーチング実践についての「新たな了解を完成（生成）していくためのたたき台」（小倉，2003, p, 79）として有効活用できることが明らかとなった．

## 第３節　本論の総括と今後の課題

### １．継続的な調査の必要性

今後の課題としては，コーチング現場へ密着したフィールドワークによるデータの収集等が不可欠であること考えられる．本論では，4 名のコーチのライフストーリーを対象に論考したが，コーチのコーチング実践により接近したアプローチが必要であると考えられる．本論で対象としたコーチはいずれも，インタビュー調査の実施から数年経過した現在もサッカーのコーチング現場というフィールドにおいてコーチング活動を続ける．対象の年代，クラブにおける立場の変位だけでなく，異なるクラブのコーチング現場で活動するコーチもおり，コーチのコーチングに対する考え方や，コーチング実践の変化について，継続的にライフストーリーを聞き取ることが重要となる．また，それらの語りについての解釈に修正を加えていくことが，ライフストーリー研究の特徴であることに留意しつつ，並行して筆者自身のコーチングに対する構えの変容についても記述していかなければならないと考えられる．さらに，筆者自身がコーチングの実践者として現場に入り，参与観察することや実践者側に寄り添うアクションリサーチを展開すること，エスノグラフィーとしてコーチング現場を詳細に記述していくこと等，さまざまな可能性を本論から見出すことができる．さらに，コーチング実践を取り扱う研究において，コーチ側からのみではなく，選手側に立脚した調査および論考も，現場に資する示唆をもたらすと考えられる．

この他，追加インタビューによる調査の継続によってコーチの語りを読み解き，解釈を積み重ねていくことが不可欠であり，方法論的な課題が本論に残ることも明らかである．また，これらに付随して，コーチング実践そのものを対象とした調査を実施し，現場に寄り添ったコーチの語りから対話を構築していくことも求められる．さらに，コーチの語りやコーチング実践の変容を，調査対象者や調査者の構えと並行して継続的に追うなど，より詳細な検討が必要であると考えられる．コーチの資質向上につながるための理論を構築し，コーチング現場で活かしていくため，今後もさまざまな方法論や理論的枠組みを駆使

した調査による研究データの蓄積ならびにその検討を継続していくことが，本論ならびにコーチング学発展のために課せられた責務であると考えられる．

## ２．コーチ本人がコーチング実践を対象化していくこと

本論では，日本サッカー育成年代のプロフェッショナルコーチを対象にインタビューを実施し，そこから得られたライフストーリーについて，筆者が解釈していくというプロセスで論考を進めた．対象のコーチはインタビューによってライフストーリーを語ることで，各々の有するコーチング実践について振り返るだけでなく，コーチングに関するさまざまな経験を整理することにつながり，その後のコーチング活動における改善，発展が期待される．また，図子（2014）は，コーチ自らが当事者としてコーチングの実践知を探り，それらを手掛かりにコーチング学の体系を確立していくことが重要であると指摘している．この指摘に対して本論は，調査対象者であるコーチと，調査者である筆者や共著者によって，コーチ各々の経験について解釈し，コーチング実践知を詳細に記述するという形で生成された知見の生成という形で応えており，コーチング学の体系確立に向けた，一つの成果を示すことができたと考えられる．

一方で，今後はコーチ本人によるコーチング実践についての事例研究の蓄積を求められる傾向が，より一層強くなると予測される．他の領域では，宇宙飛行士の宇宙空間滞在経験を論考した野口ほか（2016）が，「現代の宇宙研究は，宇宙飛行士が個人の『当事者性』を積極的に問い，自身の体験や記録と向き合うことで新たな局面を切り開いていくべきなのであろう」と，宇宙飛行士本人による一人称的な研究を展開するうえで，自己を対象化する水準を高めていくことの重要性を示した．また，この自己を対象化していくうえで，「対象者に向かい合っている自分を，他者の目で見直してみること」を，当事者である自己に向ける「リフレキシビティ（reflexivity）」（能智，2011, p. 120）が有効であることを指摘した．このような方法論観点は，コーチング学領域において積極的に取り入れ，他の研究領域をリードしていかなければならないと考えられるなか（佐藤，2016），本論に

おける一連の調査は，調査手続きや解釈，考察のプロセスを含めてその先行事例となり得る．

### ３．コーチング実践思考モデルの最適化

本論の第２章，研究課題１では，コーチング実践思考モデルを提示した．このモデルは，金川（2006）の先行研究を参考に生成され，研究課題１における論考を端的に表したモデルとして，コーチング現場において有益な示唆をもたらす知見であると考えられる．しかしながら，研究課題１の対象者2名のライフストーリーおよびコーチング実践知のみをもとにしており，他のコーチによる直接的な活用は限定的な範囲内であることも理解しておかなければならない．一方で，社会学を背景に，医療や死生学を専門領域とする山崎は，質的研究によるサンプル数についての限界や，その結果が有する一般化可能性を目指して「サンプルを無作為に抽出する（少なくともその努力をする）」ことに対する問題点を指摘する．「質的研究ではそもそも結果の統計的一般化を目指していない」（山崎，2012, pp. 31-32）ため，このような対症療法的な方法論の採用が，結果として質的研究の価値を貶めることにも留意しなければならない．今後は，本論から生成されたコーチング実践思考モデルをもとに，木下（2003）の提唱する人間行動に関するプロセスの説明や，その思考および理論モデルの生成に長けた方法論であるM-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）等，本論とは異なる角度からの検討を加えることで，モデルの最適化を図ることや類的普遍化を目指した理論を構築していくことが必要であると考えられる．

注

1）U-20W 杯

U-19 日本代表は，2016 年に開催された AFC（アジアサッカー連盟）U-19 選手権バーレーンにおいてグループステージ，ノックアウトステージを勝ち進み， 5 大会ぶりとなる FIFAU-20W 杯韓国 2017 への出場権を得た．

2）コーチ

本論では，「コーチ」「指導者」の表記が混在するが，本章では同義語として扱う．記述に関してはインタビューのやりとりを除いて「コーチ」に統一するが，引用，参考文献に関してはその限りでない．また「コーチング」「指導」に関しても同様の扱いとする．

3）コーチング

本論における「コーチング」については，一般的に用いられる辞書的な規定を参考とする（佐藤，1993）．したがって，『広辞苑』における「コーチング」の項にある，「①コーチすること．指導・助言すること．②本人が自ら考え行動する能力を，コーチが対話を通して引き出す指導術」を本論で取り扱う「コーチング」ならびに「コーチング実践（実践知）」を論考する基軸として設定する．

4）J リーグアカデミー

J リーグアカデミーについて J リーグ公式サイト（2014）では「J クラブにおける公益財団法人日本サッカー協会（JFA）の加盟チームに関する規定に定める登録種別の第 2 種，第 3 種および第 4 種に属するチームの総称を『アカデミー』としています．J リーグアカデミーは，J リーグの指定する指導者資格を有し選手育成を管理統括するアカデミーダイレクターを擁することを条件としています」と説明されている．

### 5）日本サッカーにおける学校部活動の取り組み

本論では，J リーグアカデミーに所属するコーチを対象としているが，サッカー選手育成における日本の学校部活動の取り組みは，多くの J リーガーや日本代表選手，海外リーグ所属選手を輩出する等，大きな成果をあげていることにも留意しなければならない．このことは,特にサッカー先進国の多いヨーロッパ諸国とは一線を画す独自のシステムであり，今後，学校部活動でコーチング活動に従事するコーチに焦点を当てた研究を蓄積していくことも求められる．

### 6）高円宮杯U-18リーグ

全国高等学校体育連盟（高体連）所属のサッカー部，日本クラブユースサッカー連盟所属のクラブを問わず，国内すべての2種登録チームによって運営されるリーグ戦．全国を東西（East, West）2地区，各10チームにわかれて実施されるプレミアリーグを最高位に，全国9地域にわかれて実施されるプリンスリーグ，都道府県リーグがあり，1シーズンを通して実施され，シーズンの成績によってリーグ間における昇降格もある．最終的に，プレミアリーグ東西優勝チームによってチャンピオンシップがおこなわれ，年間優勝チームを決定する．

### 7）指導実践

ここでの指導実践とは 1 回のトレーニング（約 60～90 分）や，1 セッション（約 10～30 分）を意味する．

### 8）呈示（ていじ）

本論では，「提示」と「呈示」を併用するが，基本的には一般的に用いられる「提示」を用いる．ただし，「二重奏形式」によるライフストーリーの「呈示」に限り，小林（2000）の先行研究に倣い「呈示」を用いる．

9）方法理性

今田は，科学的な方法論についての記述において，「方法理性」という一般的でない表現を用いいて説明していくなかで，同義の意味として「方法論」「方法的視座」（今田，1986, p. 13）を併用している．これに倣い，本論では「方法理性」という表現に依拠しつつ，広く一般的に使用される「方法論」として理解したうえで本文中に引用する．

10）オン・ザ・ピッチ（on the pitch）

サッカーのゲームやトレーニングにおける，ピッチ（グラウンド）内のプレー全般に関わること．

11）オフ・ザ・ピッチ（off the pitch）

サッカーのゲームやトレーニングにおける，プレー以外のこと．トレーニング前後の準備や後片付けに限らず，ピッチ（グラウンド）外の日常生活や社会生活の全般に関わること．

12）シンクロ（シンクロコーチング）

シンクロ：同時性（synchronize＝同時に起きる，同期させる）．トレーニングを行いながら，その最中にストップさせずにプレーを継続させ，その場で起きている現象についてコーチングすること．

13）フリーズ（ゲームフリーズ）

コーチングをしたい現象が起きた時点で状況をいったんフリーズさせ（止めて），問題の起こった状況を再現し，コーチングすること．

14）省察（せいさつ）

畑村は省察（せいさつ）について「反省と意味は同じですが，省察にはネガティブな響きがない」と説明する．また，省察の中身について「決断し，行動して，起こった結果を省みることです．結果の要素を抽出し，構造化して考える．それを文章や絵でまとめて知識化する．こうした行程を踏んだ省察だけが他者に正しく伝わり，次の機会に生かせるのです．そこに自己批判は必要ない．結果を正しく受け止めて正しく分析するだけのことです．省察は次に動くためのエネルギーを生み出すのです」（畑村，2007）とまとめている．本章で扱う「省察」はこの畑村の説に立脚する．

### 15）有機的

本論で用いる有機的とは，「有機体[18]のように，多くの部分が集まって1個の物を作り，その部分の間に緊密な統一があって，部分と全体とが必然関係を有しているさま」（新村，2008）という概説に依る．

### 16）コーチング実践思考モデル

研究課題１において生成されたコーチング実践思考モデルは，金川（2006）を参考に，知見を図説したものであるが，2名の対象コーチのライフストーリーのみをモデル生成のもととしており，実践現場における直接的な使用範囲は，きわめて限定的なレベルに留まると考えられる．今後の研究において「概念化（一般化）」を目指すうえでは，自然科学における一般化とは異なる「文化的・時代的背景や境遇，立場など，限定された範囲，特定領域での共通性」を前提とする「限定的一般性」（山竹，2015）による読者の了解を得るための継続的な調査が必要となる．

### 17）前進（progress）

ここでの「progress」は，前進している状態のことで，改善，改良（improvement）を包摂する（Levin, 1966; Pietschmann, 1987; Rodriguez, 2008）．

### 18）有機体

有機体とは，「多くの部分が一つに組織され，その各部分が一定の目的の下に統一され，部分と全体とが必然的関係を有するもの．自然的なものとの類推で，社会的なものにも用いる」（新村，2008）という概説に依る．

# 資料　インタビューデータ

## Ａ．大林氏のライフストーリー

＊「それでは，インタビューを開始させていただきます」

大林「はい，はい」

＊「よろしくお願いいたします．では，早速なんですけども大林さんが，指導者を志すきっかけとなったエピソードを教えてください」

大林「きっかけは，引退をして．プレイヤーとして引退をして．その後にクラブの方から，「指導者としてどうだ」っていう話をいただいて．そのまま指導者になったっていう」

＊「それまで，指導者のこと，「指導者に将来はなろう」と，そういうことを考えられていたことはありますか」

大林「完全に決めつけていたわけではない．まだサッカーには携わりたいなとは思ってはいたんだけれども，指導者で飯食っていく（生計を立てる）のかってのはまだ決めていなかったっていうか」

＊「そのあたりの決め手となったというようなことはありますか」

大林「やっぱその，ここ（X）に入って，小川豊（調査者＝筆者知人）と同期で入って．で，ずーっとプレイヤーで．選手としてもそうだし人間的にも成長させてもらって．また引退した後にね，こうやってクラブに残って仕事してくれっていわれるのはもうすごいありがたい話だったんで．で，このクラブのために恩返しができればなってのがスタートで．それは別に指導者って形でも，例えば強化部，フロントっていう形でも別になんでもよかったんだけれども．最初実際，1年目はスクールのコーチと，フロント業務をやってて．引退して1年目は．その2年目以降，そこから3年間は，もうスカウト専門だったの．トップチームのスカウトをやってて．4年間やった後に，ユースのコーチになっていくっていう流れ」

＊「実際指導をメインでされたのはここ（自由記述アンケート）にも書かれているんですが，4年ってことですか」

大林「4年．そうそうそう．4年目」

＊「それまで，何かこう準備されたりとか，指導の勉強をされたことは特にありましたか．現役時代のときに」

大林「ライセンスはね．取りに行ったり．指導者になる，漠然とね．その，引退したら指導者になるのかなっていう漠然としたイメージはあったんで．とりあえずライセンスは取っておこうかなっていうのはあって」

＊「そういったことを現役のときから考えられていて．で，その後，引退された後にクラブからの依頼によってというのが決め手となったということですかね」

大林「そうだね」

＊「例えば，ご自身が所属されたクラブ以外からの依頼であったら，また違ったことになった可能性もありますか」

大林「サッカーで（生活して）いく＝（イコール）フロント業務とか指導者とか．選択肢はそれぐらいかなって感じはしてたんでね．あとは，本当に指導者が自分に向いているのかどうかっていうちょっと疑問もあったんで．その辺も含めていろいろこう，見させてもらったってとこも逆にあって」

＊「フロントの業務と指導者を兼務するなかでという」

大林「そうそうそう．そうそう」

＊「実際に始められて，どのように感じられましたか」

大林「フロントの業務，スカウト業務だったりっていうのは．クラブの本当こう窓口というか，形で．すごく人脈も広がったし．いろんな意味で幅は広がったと思うんだけども．逆に指導者っていうところは，すごくこう現場に掘り下げて，突き詰めてやらないといけない場所であったりするんで．それがすごく，逆にそっちの方が自分に向いているのかなって気は，今はすごく感じています」

＊「年数でいうどちらの方が長い」

大林「今ちょうど私4年目なんで，一緒，同じ」

＊「同じ．チャレンジする，新しいことにチャレンジすることにあたって，指導者にしても，フロント業務にしても．何かそのあたりで，こう難しさとか，やりがいとか感じられたことはありますか」

大林「スカウトのところはね，本当にいろいろ知らない世界に引退してから入っていったんで．『あ，クラブってこういうふうに運営されてるんだな』とか，『どうやって選手が（クラブを）行き来してんのかな』とか，出し入れの部分だったりっていうのはすごく勉強

になったし．どうやってクラブを強くしてかなきゃいけないってところの，フロント業務っていうところをすごくこう見れたんで．それはすごくよかったかなってのは思うんだけども」
＊「そのあたり最終的に決定されたのはご自身が，大林さんご自身が決定されたんですかね」
大林「フロント業務やるにしても，指導者っていうところを経験していないっていうのは，何だろ．そこもちゃんと知っときたいなってのは自分のなかであって．それとクラブからの意見が，アカデミースタッフの方が，人数的にも，行ってほしいって話だったんで．そのタイミングで，（アカデミーに）移るタイミングで，S 級ライセンスも取りに行かしてもらって．っていう形で」
＊「いろいろなタイミングが重なって」
大林「いいタイミングが重なって」
＊「ご自身の意思もあってっていうような形ですね．はい，ありがとうございます．それでは，次の質問に移らせていただきます」
大林「はい」
＊「大林さんが指導で最も大切にしていることを教えてください」
大林「指導者として」
＊「はい」
大林「あの，よく書いて（情報発信して）いるんだけど，指導者として本当に情熱をもって，選手に接しないと，やはり選手も生き物だし．返ってこないですよね．こっちが本当に，100%本気でぶつかっていかないと．もちろん選手も 100%のパワー返してこないし，指導者がこれぐらいでいいかなって思っていると，やっぱ選手もそれぐらいになっちゃうしっていうのは，今すごく感じてますね」
＊「それは，もう始められた当初から思われていたことですか」
大林「いや．いや，やっぱり経験していくうえで，そう選手の反応だったりっていうのを見ていくと，こっちが本当に本気じゃないと，選手も本気に．いくらこっちがお前らがんばれ，やれっていったところで，やっぱり限界があるというか」
＊「そのあたりを，選手に伝えるための，具体的な工夫とか方策ということがあれば教えていただきたいんですけども」
大林「もちろんその．じゃあサッカーの，サッカーのま論理的にっていうか，理論的にも選手の知識を上回ってないといけないし．選手よりも，本当によりパワーをもってないといけないし．パワーっていうのはさっきいった情熱だったりっていう部分っていうのも，こっちが元気なくいっちゃたら選手も元気のないトレーニングになっちゃうと思うので．まその辺はすごくこう気を使うというか．絶対選手にも負けない．もう 2 時間トレーニングなんだけど，選手に負けないパワーでいつも臨まないとっていうふうにはいつも思っています」
＊「これまでの指導，されてきた経験のなかで，例えばそういう，パフォーマンスを，指導者としてのパフォーマンスを発揮できなかったというようなことはありますか」
大林「よくありますよ．それはもう．本当に日々反省したり．『今日のトレーニングは全然上手くいかなかった』とか．『選手がこう，やっぱ乗ってこなかった』とか．『メニューがおかしかったのかな』とか．『こっちのテンションがおかしかったのかな』とか．『人数構成とかいろんなことが何かあったんだろうな』っていうのは．ちゃんとその，トレーニングが終わったあとに，反省しながら，本当，日々改善するようにはしてますね」
＊「選手との関わりのなかで何を一番大切にされていますかね．『情熱』という部分をいわれたと思うんですけども．選手を引き出すっていうもう，引っ張って行くというようなイメージの方が強いという感じですかね」
大林「基本的には，ぼくのタイプは選手を誉めて伸ばしたい．上から『こうだ』って一方的に押さえつけてやるつもりは全くなくて，選手の持ってるいい部分を本当に 100%引き出してやらせたい．だからもう，本当にどっちかというと，叱るというか厳しくいうよりは，いいところを誉めて，どんどん伸ばして，引き出していきたいって思っています」
＊「そういったお考えの，背景にあるもの，こう，何か経験とか．例えばこういったことを学んできたとか，そういったことがありますか」
大林「自分自身がプレーヤーだったっていうこともあ

るし．やっぱり，もちろん，自分（選手）が今（手を）抜いたな，さぼってるなっていうことを上手く見抜かれて，指摘されるのは選手も納得いくんだけども，その，何でもないとき，ちゃんとやっているときに，叱られても選手って反応しないと思うし．その，本当にこう，ピンポイントで指摘されたり．逆にすごいこう自分で工夫して考えていいプレーをしたっていうときに，ピンポイントで誉められると選手としても，これは合ってるんだって手応えがすごく感じると思うんだよね．その辺のさじ加減というか，ちゃんと選手を観てあげて，そのタイミングで，いいタイミングで伸ばしてやるとか．いいタイミングでちゃんと指摘するとかっていうのは逃さないようにしてますね」

＊「選手の心理状況まで把握できるぐらいまで，しっかり観るということ」

大林「そうそうそうそう」

＊「かなりこう，難しいことでもあると思うんですけども」

大林「そこは逆にあの，ぼくは（トップの）選手だったっていう経験が，活きてるのかなっていう気は．選手目線だったりっていうのがあって」

＊「当時の，今はユース年代を指導されていると思うんですけども，当時の自分は振り返ったりしますか．頑張っている姿とか，手を抜いてるなとか，すごく考えてるなあっていう選手の姿を見るときに，自分の姿と，当時の自分の姿と重ねられたり」

大林「選手はこういうときにちょっと手を抜きたくなるんだよなとか．こういうことをいわれると，頑張れるんだよなとかっていうのは，経験上持っているので．そういうのはなるべく本当に見抜いて，見抜いてというか，ピンポイントで合わせていくような感じでしてます」

＊「何か具体的な事例があれば教えて欲しいんですけども．選手とのやりとりのなかで」

大林「だから，新しいこと．例えば，前のゲームでどうしてもシュートが入んない．全体的な課題かもしれないけども，本当にそのアタック（攻撃）の選手が，なかなか点を奪えないってなったときに．奪えないというか，奪おうとしてるんだけど，ゴールが．要は．外してしまうときに，そのじゃあ，『どうやったらもっと確実にシュートまで持ち込めるのか』っていうまず具体的なヒントを与えて，それを今度トレーニングのなかで実践しようとして，それがもし仮に失敗したとしても，やろうとしてることってすごく大事だと思うので，そこをちゃんと誉めてあげるとか．結果は失敗だった，シュートは入んなかったかもしれないけどっていうことで，ちょっと伸びた選手もやっぱり実際いたりとかするんで」

＊「やっぱり，トライせずに結果がついてきてしまう場合があるかと思うんですけど，練習のなかで．そういったこともしっかり見抜かれるようにされますか」

大林「そうですね．見た目は成功してるように見えても，それはじゃあディフェンスが本当は緩いから成功しているだけで，本当のトップレベルに行ったときに，成功しないといったことが絶対あると思うので．今のは，別に入ったけど，多分普通じゃあ，プロのレベルでは入らないとかっていうちゃんとジャッジをしてあげるようにはしていますね」

＊「ジャッジの部分，判断の部分は指導者として，大切にされているということですか」

大林「そうですね」

＊「やはり第一線で活躍されていた大林さんから，いわれる指導っていうのは選手としてもすごく説得力があるのかなというふうに感じますけども」

大林「そこは本当，指導者としての強みだと思うので．逆に，それは自分でもわかってるから．全面に押し出してっていうように」

＊「そこは使おうというように」

大林「使おうと」

＊「はい．ありがとうございます．それでは次の質問に移らせていただきます．大林さんが指導で最もしてはいけないと思っていることを教えてください」

大林「してはいけないこと．ここ（自由記述アンケート）に書いてあると思うけど，指導者が向上心を，これくらいでいいだろってさっきも話したけど．要は勉強，指導者の勉強怠ったり．サッカーが本当に 1 年 1 年また流れが変わってくるんで．常に新しいものを取り入れたり．たまには昔のいいものに戻ったりとか，そういう工夫を本当にしないと．そこがなくなっちゃったら，指導者としてはやっていけないと思うので」

＊「そういった事例を見られてきたとかがあるとかそういったことがありますか」

大林「事例，事例というのは」
＊「他の指導者を見てとか．自分が受けた指導者のなかでとか．そういった考えをお持ち背景というのはどういったことがありますか」
大林「実際自分がプレーしてたころと，全然サッカーが変わってきてるんで．そこからもかなり変わってる．今，X のアカデミーは強いとか評価され始めてるんだけども，これも，すぐまた廃っていっちゃうかもしれない．常にもう，新しいところ，その大事にしている軸はブレないんだけども，次々，次のこともちゃんと考えて，指導していかないと」
＊「常に最新のもの．その変化するサッカーについて行けるように，指導者もこう，勉強していかなければいけないなというような」
大林「そうそう．そうですね．特に向上心というか，常にこっちも勉強して．常に選手の上に，知識でもいないといけないというのは思ってるんで」
＊「実際にどのような準備をされていますか」
大林「だからもう，海外の映像を見たりとか．もちろんサッカー協会，日本サッカー協会でやっている，リフレッシュ講習だったりそういうのもそうだし．あと，誰々，どっかのクラブでいいトレーニングしてるとか，いいゲームやってるとかってなったら，一応気にはして見に行ったりとか．あとはここのクラブのなかで，アカデミーの指導者が，菊本（アカデミースタッフ，調査協力者）もね，含めて．もう何人もいて．優秀なスタッフがいるんで，そのなかで常に競争じゃないけど，話し合って．要はお互い刺激し合って向上し合える関係だと思うので」
＊「たくさんの，育成年代の指導者が同じ場所にいるということはかなり強みかなという」
大林「それは多分，そうですね．しかも，うちのスタッフは意外と．意外と，というか，本当に情熱家が多いので．そういう部分ではお互いに刺激を受ける感じですね」
＊「スタッフが置かれる環境も非常に大事というふうにお考えですか」
大林「大事だと思います．それは．本当に選手もそうなんだけど，やはりぬるい集団，ぬるいグループだと，そこからなかなかいい選手とか出てこないと思うし．指導者も本当にこうギラギラして．『いい指導，いつもしたい』とか，『サッカーの知識，もっと，もっと深めたい』とかって思ってる集団がやっぱいると，自然といい集団になってくると思う．その指導者の集団も」
＊「かなり相乗効果みたいなことも得られますかね」
大林「そうですね」
＊「そういった刺激し合えるコミュニティーを，よりよくしていこうというような努力もされていますか．実際に，大林さん自身」
大林「コミュニティーは逆にまた大事ですね．いつもこう突き詰めてやってても，何だろうな，あまりその，ギスギスしちゃってもっていうのもあるし．たまには飲み会やったりとか．そういうのも必要だと思うし．スタッフ間でグランドに出て，普通にサッカーやったりとかも必要だと思うし」
＊「オン・ザ・ピッチ，オフ・ザ・ピッチのところでのところもいろいろな工夫をされているということですかね．はい」
大林「要は一番の大きな幹は，そのクラブに，トップチームに，本当にいい，優秀な選手をあげたいっていうのが，一番の，みんな思っている．これは多分みんな，どのスタッフに聞いても，ブレないでちゃんと話すと思うんだけど．それが一番であるから．じゃあぼくが今見ているユースのところには，来年以降プロになる選手がいて．このときにはこれくらいやって，ここまで育ててプロにあげたい．だったらもうジュニアユースはもっと基礎的なところをやってほしいし，ジュニアに関してはもっとそうだし．だから自分たちが，ジュニアのコーチが，このジュニアの選手が何年後かにトップ（チーム）にあがるまで，一応想像して，やっているような感じ，ちょうど．なので，おれのところ（カテゴリー）だけ強ければいいや，おれのカテゴリーだけ別に頑張っていればいいやっていうことじゃなくて，ちゃんとみんなが 1 年，1 年育てていく過程で，みんなが関わって，最終的に本当にいい選手を上に送りたいっていうのをみんながイメージしてるから．そういうコンセンサスはとりやすい環境だと思う」
＊「カテゴリーの枠を超えた一つの，一本のラインというか」
大林「そうそうそう」
＊「アカデミーならでは，のというところは強みとし

てかなり」
大林「小学校，例えば 5 年生の選手を，こいつ何年後かにはプロに行けるかもしれないなって話をみんなでできたりとか．その数年後のことを見据えて，話がちゃんとできたりとかっていのは」
＊「かなり長い目で選手を育成されているというようなことは」
大林「そうですね」
＊「その辺りの情報共有なんかも，すごく緻密に」
大林「それはもう頻繁に」
＊「はい．ありがとうございます．それでは次の質問に移らせていただきます．これまでの指導で最も印象に残っている事例を教えてください」
大林「それは今年の夏の優勝ですね．はい．あの（自由記述アンケートに）『初タイトル』って書いてあるんだけど，ユース年代，U-18 のところが，今まで，『いい，いい』とはいわれてても（周囲から高い評価を受けていても），なかなか優勝したことがなくて．『いいサッカーするね』といわれても，なかなか結果が出なかったというところで．いい内容プラス結果も出たというところでクラブとしてすごく自信を持った．その優勝，タイトルだったと思うんだよね．一つの結果に出たっていうのは」
＊「その辺りはやはり先ほどもお話されたように，ジュニア年代からの積み上げ的なところも」
大林「そうそうそう．もともと，今の高 3 の代はいい代だっていわれてて．ここ結構，みんながモデル，モデルじゃないけども，ああいう，ああいう学年の集団だったり，グループだったりっていうのは，常にああいう集団を作らなければいけないねっていう話をしてて，その学年が優勝できたんで．それはもう，クラブとしては大きな出来事だったんですね」
＊「その，タイトルを取られたなかで，更に特に印象に残っている試合とか事例とか，日頃のトレーニングでもいいんですけども，こういったことが何か印象に残っているな，これがターニングポイントだったなというようなこととかはありますか」
大林「それは指導とはまた別なんだけど．予選で，予選，このグループの予選のときに，W（J クラブアカデミー）と，W も 2 連敗してて（予選リーグにおいて，X と同様，2 戦連続で勝ち点 3 を逃していて）．優勝候補で．1 勝 1 分け，同じ勝ち点 4 で．得失点差も全く一緒で，抽選になって．おれが抽選引いて勝ったという．Y が落ちた（予選リーグ敗退となった）」
＊「ああ，その 1 つしか上がれなかったと」
大林「1 位は E（J クラブアカデミー）が．E 強いから．E が 1 位で抜けて．2 位を決めるのに，同じ勝ち点で，得失点差も一緒で．それで，優勝候補をそこで破ったっていう．抽選で」
＊「プレッシャーはありましたか」
大林「そうとうあったよ，もう．お互い優勝候補といわれてて」
＊「何かこう，これまでの，いろんなものが浮かんだ感じですか．今までのジュニア年代からのこととか，みんなの思いを」
大林「そうそうそう．これで，今年の代は優勝できるんじゃないかっていう代だったから．予選でまさかそれが負ける，落ちるってわけにはいかなかったら．しかもね，（抽選の相手が優勝候補の）W だったし」
＊「当然だと思うんですけど，狙った優勝を狙い通りにできた，プランニング通り」
大林「そうそうそう」
＊「かなり手応え的なものも大会前からあったりというようなのはありましたか」
大林「そうだね．もともと X のサッカーはポゼッション [1] してくなかで，ただやっぱその，ボールを大事にしすぎるあまり，その，アタックの迫力が欠けたりとかっていう部分はずっとあったんで．そこは逆に，アタックのところはこだわって．プラスアルファで最後乗っけていったかなって感じが」
＊「その辺り，日頃の積み重ねがやはり大事ですかね」
大林「そうだね．こっちが，例えば，ボールは大事にしなさいってことはずーっとこの X はいわれている．年代，どのカテゴリーでも．ボールはしっかり」
＊「トップ（チーム）も含めてですか」
大林「トップ（チーム）はまだ」
＊「また別．アカデミーのところ」
大林「アカデミーのところでは，しっかり，ボールを大事につないでいきましょうっていうのはもうベースであって．そのなかでやっぱりボールをね，さっきもいったけど大事にする．すればするほど，なかなかゴールに進まなかったりも．ゴールへ進めば，ボールを

失うリスクも高くなるから．なかなか進めないってのもあるんだけども．じゃあいかにして（ボールを）失わずにもっともっとゴールに迫っていけるかっていうのを突き詰めて．それはねえ，日々こう，その意識をもうちょっと，前がかりに，前がかりにって常に植え込んで，やってってというのは」
＊「追求していくなかで，これまでなかなか結果が出なかったあたりのジレンマみたいなことはありましたか」
大林「そのときはまだ過渡期っていうか，成長段階だったと思うので．チームとしてとかクラブとして，ベースをちゃんと作っている段階だったので．やっとその，それがこう，少し花開いてきたかなっていう，感じ」
＊「ブレずにやってきたことが」
大林「ブレずにやってきたことが．そうそうそうそう」
＊「はい．ありがとうございます．逆にですね，印象に残っている事例のなかで，「あまり振り返りたくないな」とか，ネガティブなところの事例ということがあれば教えていただきたいんですけども」
大林「監督就任して 1 年目．だから 2010 年代初頭の同じ大会，夏のクラブユースの大会で．決勝までこれもいったの．相手はまた W だったんだけど．決勝で負けちゃって 2 位だったんだけど，結局．そんときに，前半 1–0 でリードしていて．ハーフタイムに戻ってロッカーに入ったときに，うちのコーチがすごく選手を，ある一人の選手に対して，すごく納得いかないプレーがあったみたいで，怒ってたの．おれがベンチ，ロッカールームに戻ってきたときに．すごい変な雰囲気だったんだよね．ロッカールームの中．選手も，何でおれらリードしてるのに怒られなきゃいけないんだみたいな雰囲気だったりとかで．何だかおかしかったの．要は，怒ったコーチっていうのは，ボールの持ち方がねえ，決勝だけど緊張してちゃんとできなかったりだとか，してたやつ（選手）に対してすごく怒ってたの．X のこだわって，（ボールを）持つ持ち方があるんだけど，そういうことができなかった．そういう決勝でもやって欲しいというコーチの思いと．おれはでも勝たしてやりたい．そこはもう，怒んなくていいし．逆にもっと後半乗せて，後半に行きたかったんだけどっていう．スタッフ間．それはね，選手じゃなくてスタッフ間の，何ていうのかな．マネージメント．スタッフのマネージメントが．選手だけじゃないんだなっていうのをすごく痛感して．結果，後半逆転されて負けちゃうんだけど．それが原因ってわけじゃないんだけど．あの後はすごく考えた．あ，スタッフも常にマネージメントしなきゃいけないんだなって．選手だけじゃなくて」
＊「そのことが原因かどうかはわからないとは思うんですけども，実際にその後半に向けたハーフタイムの，大林さん自身のミーティングとか，後半への入り方とか少し難しいところがありましたか」
大林「そのとき」
＊「はい」
大林「そのときはすごい難しかった．実際．選手も何だか，ちょっと何か腑に落ちない顔でピッチに出て行って」
＊「そのことについて，当時のそのコーチの方とは」
大林「話した．話したし」
＊「どういう思いがあったとかっていうのは．あったんですかね」
大林「だから，さっきもいったけど，どういう舞台でも，X らしくやってほしかった．X のスタイルを忘れてほしくない」
＊「選手としては，その無意識のうちにそうなってしまったとか，緊張したりとか」
大林「緊張とか目に見えないプレッシャーがあったりとかで」
＊「決して手を抜いてとか楽をしようとか，そういう訳ではなくてということですね．その辺りは非常に難しい」
大林「難しい」
＊「その後」
大林「そこはやっぱり X のこう信念があるから．例えば，ずっといつもポゼッションやったのに，最後決勝だけ放り込んで，（X の目指す方向性とは異なるスタイル）で，ゲーム勝って優勝したって，それは確かにおれ等の成果じゃないし．育成という感覚で考えたら，勝利だけが目的じゃないから．ちゃんと X のサッカーをして，勝たなきゃいけないっていうの．だから意味がないっていうのもわかっているから．そのコーチがいったのも一つ，合ってると思うし．ただおれとして

はゲームをちゃんとコントロールしたかったっていう気持ちもあったので．それは後でちゃんと話をして」
＊「その後，またそういった場面とか」
大林「あった．なりそうになった場面は事前におれが（コーチに）話して．『ここは，今日は我慢しておいて』とか．『伝え方も考えよう』とかっていう話は，もうできるようになったんで．すごいそれはおれが勉強になったっていうか，一つ大きな経験したかなって」
＊「1 年目に，まさかそういうことが決勝で，ということは，想像もしてなかったことが起きてしまったというような感じですか」
大林「ちょっとびっくりした．本当に．でもね，彼，そのコーチを責めるつもりももちろんないし」
＊「その，そういったことがしっかり，今のご指導には活かされているっていう，手応えみたいなことは」
大林「だから常にその選手もマネージメントするけど，スタッフも常にマネージメントして．要は一つのチームがね，大事だから．それをすごく感じましたね」
＊「はい．ありがとうございます．それでは次の質問に移らせていただきます．（自由記述アンケートによると）現在の大林さんの指導は選手時代に受けた指導経験の影響を受けていらっしゃらないということなんですけど，実際どうですか．当時受けた指導と，ご自身される指導を」
大林「もうトレーニングメニューから全て変わっちゃってるんで．今の流れ的には．要はそのサッカー哲学も変わっちゃってるんで．昔は逆にはっきりいえば，X の，ぼくがプロでやっていた頃の全盛のサッカーって，しっかり守備をしたなかで，素早いショートカウンターだったりというところで．どちらかというと主導権を相手にわざと（ボールを）渡しておいて，カウンター仕掛けるサッカーだったんで．今はもう，全く真逆になってくるんで．サッカースタイルが，哲学が変われば，指導は全く違うんですよね」
＊「その辺りで指導される内容が全く変わってきてるということが，やはり受けてきた指導とは全く違うなあと」
大林「そうですね．そういう意味ではこういうふうに（自由記述では）書いてますけど．ただね，本当，普段やらなきゃいけないフィジカル要素だったり，選手としての気持ちの部分とかっていうのは，もちろんね．そんなのは変わんない，変わんないと思うんで」
＊「例えば先ほどお話していただいた指導者の持つ情熱とか，姿勢とかそういったことに関しては，どのように考えられますか」
大林「そこも，だいぶちょっと，昔よりは意識はもう違いますね．当時いた指導者がどうのこうのじゃないんだけども．当時いた，指導者にいわれた言葉とか実際あんまなくて，覚えてる，印象に残ってる言葉とかもなくて．おれらサッカーやってればいいんでしょっていう．結果出せばいいんでしょっていうような感じだったんですけど．ぼくらが今，選手に伝えているのは，もちろん結果もそうだけど，内容．X として誇りを持って．で，X のプレーヤーとして，やると．ピッチ以外のところもね．ちゃんとプロになる選手としてはどういう選手じゃなきゃいけないとか．普通，ちゃんとね，世間に，一般の人に混じっても，逆に見られてるわけだし．その辺のところはもう．昔はねえ，J リーガーなんか茶髪でピアスして，外行ってね．ちょっと騒がれてっていうような雰囲気がよしと，よしとされてないって（されていた）わけじゃないんだけど，そういう時代もあった．実際ぼくらもそういう時代を経験してるし見てるし．そこに対して（コーチから）何かいわれたかっていうといわれてないし．でもそうじゃなくて，本当にプロっていうのはあの，みんなの見本にならないと，なれるような人じゃなかったら，なる資格はないって逆に教えてるから」
＊「時代の変化とか，社会的な立場の，周りからの見る目の違いとかもやはりそういった指導にはかなり影響を」
大林「そうそう．そこができないんだったら，もうサッカーをする資格はないというふうにいってるから．昔はね，サッカーしてればいいんでしょっていうような雰囲気が．その辺もね，やっぱ違う，違いになってくる」
＊「オン（・ザ・ピッチ）のところでもオフ（・ザ・ピッチ）のところでもやはり，かなり変化してきているってことがあるっていうことですね」
大林「そうそうそう」
＊「例えばこう，参考にしている指導者の姿勢とかそういったことはありますか．受けてきた指導のなかで」
大林「受けてきた指導のなかで尊敬しているのは森田

さん．森田勝さんは，自分が一番，選手，監督とした立場としては，ちょうど当時はおれもキャプテンやってたんで．いろいろな連絡を取ったり，コミュニケーション取ったりするなかで，一番尊敬している監督ではありますね」
＊「どのような部分が」
大林「カリスマ性．本当チームマネージメントのカリスマ性．戦術的なとこっていうのはさっきも話したけど，そのカウンターだったり，サッカーも今とは全然違うんで．あまりこう，そこを取り入れているかっていったら，そういうことはあんまないんだけども．要はああいう雰囲気で，チームをマネージメントするっていう，カリスマ性はすごいものがあったっていう」
＊「それは，森田さんなんかは意識されて出されているものなんですかね」
大林「多分それはもちろんあるでしょうね．監督とか指導者って，自分の色だったりカラーがあると思うんで．じゃあ，ああいうね，森田さんみたいなオーラをね，おれに出せっていわれてもおれはああいうふうには出さないかもしれないし．だったらおれは違う自分のカラーがあるし．またね，違う指導者には違う指導者のカラーがあるわけで．だからその，自分の一番合ってる色を出せる，逆に出さなきゃいけないっていうのはすごく大事なことで．誰かを真似するってことも別にしなくていいと思うし」
＊「指導者としてのコアな部分をブラさずにしっかり選手に出していくということを，は非常に大切であると」
大林「そうですね」
＊「実際，意識されていることっていうことはどういったことがありますか．大林さんご自身が」
大林「指導者として」
＊「はい．そのカリスマ性とかキャラクターのところで」
大林「キャラクターでいったら，基本あまり怒らないようにはしてる．さっきも話したけども，コーチってね，言葉があって．要はその，選手を，チームを引っ張って行く，グイグイ引っ張って行くタイプではないと思うので．どっちかっていうと，ナビゲーターじゃないけど，『こうするんだよ．チームとしてはこういうやり方でやるよ』っていう，ナビゲーションをして，で，それに対してチームが勝手に動き出すように持っていきたい．で，ちょっとズレてるやつがいたら，ちょっと修正してあげる．指摘してあげる．でも，引っ張れる，そのグループのなかでどんどん先頭を引っ張れるやつ（選手）は前にいると引っ張っていくしっていうような状態を作るような」
＊「指導者が目立つようなことになってはいけないというような」
大林「と，おれは思ってる」
＊「はい．ありがとうございます．それでは次の質問に移らせていただきます」
大林「ごめん，補足で．さっきの森田さんの話．森田さんはすごい先頭で行く感じがあったんで，選手としてはすごい楽だった部分はあるんだけど，伸びなかったかもしれない．森田さんが結局いなくなったことでXって『ガタ』って成績が落ちた．それじゃあ困るし」
＊「その辺り，プロの指導者，トップ（チーム）の指導者と育成年代を指導されてるってことでの違いもありますか」
大林「多少あるけど，でも，そんなにでも大きく変わりはないのかなって気はしてる」
＊「とういうと，大林さんがチームを離れられた後でも，そのチームが，ブレずに行けるというような」
大林「もちろん，もちろん．ちゃんと．というか，勝手にあとはその，ここに，今やってる子たちはね，トップ（チーム）行ったり（に昇格したり），大学に行ったり，次の進路に進むわけだから．ここから離れたから，何も，ねえ．『大（大林）さんから離れたから，何もぼくらできなくなった』（選手）じゃあ困る，本当困るし．X から離れたからできなくなるじゃあ困るんで．ある程度自分たちでもちゃんと進めるように，自立したところを作っておかないと．私生活も，サッカーに関しても」
＊「そういった面でいうと，3 年間だけではなくてもっと長い目を，（将来を）見据えた指導を実際にされていると」
大林「そうですね」
＊「ピッチ内でも，ピッチ外でも」
大林「だから本当．目的はね，そのトップチームにやっぱあげることだから．そこはやっぱり大きなところだと思う．トップ（チーム），プロになったから満足

してしまう選手だったらね，困るわけだし．プロにいって，レギュラーになって，代表に入って海外まで行くような選手をやっぱ育てなきゃいけないと思ってるんで」
＊「例えばプロに行って，トップ（チーム）で活躍してというような選手の方が少ないと思うんですけど．指導されてるなかで．そうではない選手たちに対する接し方とかケアとかは」
大林「でも一緒．全く一緒」
＊「一緒ですか」
大林「だいたいね，X（U-18）の子（選手）の場合は大学に行くと思うんだけど，大学 4 年後にちゃんと帰ってこいよ．次の目標はそこだから．4 年行って，ちゃんと一生懸命プレーして．また X に帰ってこれるように．そのためにやることしか別に．変えてないんで」
＊「その辺りはやはり一貫して．（大学等）卒業後も X でというのを目標にということを意識されているということですね」
大林「そうそうそうそう」
＊「はい．ありがとうございます．それでは次の質問に移らせていただきます．選手時代に受けた指導経験以外で，現在の大林さんの指導に影響を与えている（と考える），サッカーに関する経験について，それがどのような影響で，どのように反映されているかっていうことを教えてください」
大林「S 級（ライセンス講習会）のときに，バルサ（バルセロナ，スペイン）の短期留学行って．S 級のライセンスの」
＊「海外講習」
大林「そうそう．海外研修で．その前からもう，好きだったのもあるし．X のアカデミーが目指してるところもそれに近いものがあるんで．そこはもうかなり影響は受けていますね」
＊「具体的にどういったことが影響を受けられていますか．哲学の部分であるとか，指導の方策とか」
大林「だから．まず，クラブの哲学のところ．哲学の内容は（X と）多少ずれるかもしれないんだけども，ただ一つのクラブがそういうフィロソフィーをもってやれるかやれないかっていうので大きく変わってくると思うんだよね．何となく育成持ってる下部組織があって．でもいろんなコーチがいて．いろんな指導をしながらやっていくのも一つの手だと思うし．X はさっきもいいましたけど，本当に 1 本ね，芯を通して指導してて．それがもうクラブのフィロソフィーになってきてるので．それをブレずにやれるのは，やってたのは，もちろんバルサだと思うし．それはすごく参考にしたと思う」
＊「実際にその，練習場面とか，そのクラブで研修されたときに，それは確認作業のようなことでしたか．『やっぱりそうだな』とか，『あ，こうなんだ』とか．両方のような感じですか」
大林「やっぱりでも，両方．『あ，やっぱりそうだな』って思った部分と，『あ，こういうトレーニングやったり，こういうことやるんだ』って刺激を受けたのも半分あったし．育成のところを観たんだけども，例えば，6 対 6 対 4 フリーマンっていうのがあって．そういうトレーニングがあって．それをジュニアから，トップ（チーム）は観れなかったんで，あれは 18．U-18．ジュニアから，同じメニューを，トレーニングをちゃんとやってる．同じその 6 対 6 対 4（フリーマン）．おれ，朝から夕方から夜まで，ずっとみてたんだけども．同じ日に同じトレーニングをやってる．すごいことだなあって思って．メニューの強度とか，グリットの大きさとかってもちろんね，年代に合わせて変えたりはしてるんだけども．もちろん求めてるところも違うと思うけども，メニューは一緒．だったりとかね．そういうところはすごいなあっていう．本当に一貫してるんだなあって」
＊「そういったのはすごく衝撃を受けられたというような」
大林「向こうはトレーニングをマネージメントするというか，そのトレーニングをコーディネートする人がいる．専門の」
＊「トレーニングのコーティネーターみたいな人が」
大林「それで例えば，『U-18 はこういうトレーニング．今日は』っていう感じでメニューが出てくるらしいのね．そういうのもあるから，もちろん一貫してるんだと思うけど」
＊「指導者としての立ち位置なんかも実際に勉強になったということはありますか」
大林「立ち位置っていうのは」
＊「関わり方とか，選手に対するアプローチの仕方と

か」
大林「ああ．基本みんな情熱家だよね．本当にもう．おとなしく見てる人なんていないし．だからXもそうだけど．そこはすごく刺激を受けてるんだけど．ゲームになったら，ベンチに『ドカー』って，こうやってる（座っている）監督（コーチ）はうちにはいないし．基本的にはもうベンチでも立つか，もしくは常に選手と接することができるようなスタンスで指導はしてるし．指導というか，そのゲームに入ってるし」
＊「その部分はみんなで確認し合ってというよりも自然とそうなっているというような感じですか」
大林「そうだね．でも，どっちかっていうと，こうやって（コーチが椅子にのけぞりながら）見てるのもあんまり．あれじゃあ選手に伝わるよねっていうのはみんな（スタッフ）で話してる」
＊「選手にも伝わるっていうのはやはり，ご自身がされてもわかりますか．あ，これ伝わってるなとか，これは伝わってないなとか」
大林「いや，あると思うね．それは．それが仮に伝わる，伝わらないとしても．でもXのスタイルとしては監督は常に，こういう監督，コーチは常にそういう姿勢でゲームに臨んでるっていうね，ところはちゃんと表現しないと」
＊「先ほどから，何度もその，Xのスタイルはというのを教えていただいてるんですけども，それはいつくらいから．大林さんが（選手として）Xにいらっしゃったときにはもう，既にあったものですか」
大林「今の，強化ダイレクターの田辺俊夫っていうのがいるんだけど．おれの3つ下．（田辺）が，もともと育成を長くやってきて．彼がいろいろ勉強して，まずその，バルサとかそういうので勉強して，10何年前かな．まずは単独でやり始めた感じ．それに賛同するのが，これからやる（この後インタビュー実施予定の）柿田義人とか，何人も出てきて．段々と下地ができてきてっていう形．それがもともとの形」
＊「そこに対するネガティブな意見というのはなかったのかなという」
大林「超（ものすごく）あった」
＊「あったんですか」
大林「超あった．要は今までやってきた人たちもいるじゃん．おれよりも歳上ので，ずっとユースの監督やったり．そういう人がいて．最初はだから『何だ，あのサッカーは』みたいな．内部にね．いろいろあったから．ごちゃごちゃ（内輪もめ）．それをごちゃごちゃしながら，マックス（最も）ごちゃごちゃしてるとき，おれは強化部で．フロントでみてた．いつも育成のところは今何か，分裂してる．こっち派とこっち派じゃないけど，ある．とかね．いろいろこうごちゃごちゃしてて．どっちもでも．今までやってきた人も，正しいというか，（それも）サッカーだし．新しくいろいろこう，取り組んでやっているところも，別にありだし．みたいな」
＊「非常にデリケートな，難しいところが，あったというような」
大林「そうそうそうそう．でもクラブとしてはその，育成をちゃんともっと大事にしていこうってことで，少しそっちの．田辺俊夫がやってたところを大事にというか，していこうかなと．何となくそういう雰囲気．クラブの，要は上のフロントのほうが決めて．少しづつ，今までいた人たちを抜いて（替えて）いった．スタッフを．おれが最終的にそこ（ユース）に行くきっかけとなったのは，そういうような人たち（以前からのスタッフ）が抜けていく，新しくおれが，入る．おれはどっちかというと中立だったから．いつも．昔からいる人たちって，おれも，昔からいるから（付き合いも）長い．仲いいし．田辺俊夫とか柿田義人とかももちろん選手として一緒にやってるから，仲いいし．おれからしたら，フロントのおれからしたら，何で同じサッカー（を）Xでやってきた人たちで，サッカー観が違って人間関係まで壊れちゃうんだろうってのがすごくあったらから」
＊「人間関係が壊れるということが」
大林「若干ね．ハハハハハ（笑）．そうなるよ．そりゃ．もう，思いを持ってるから」
＊「それくらいみなさん，熱い思いを持っていると」
大林「そうそうそう．そういう時代があって．でもそれがでもほんのつい5年くらい前なんだよね．やり始めたのは10年くらい前かもしれないけど．5年くらい前までは，おれが，だから本当，入るくらいまでは，まだ，そういう．お互いにそういう人（スタッフ）たちがいて．やってたんですけど」
＊「変化の，変革の時期というのはやはりそういった」

大林「そうそうそう」
＊「衝突みたいなのが避けられないみたいな」
大林「そうそうそうそうそう」
＊「結果的にでもそういったものが，今年の夏に実を結んだということに繋がったということは」
大林「いや，完全になったと思う．あと，偶発的に例えば，優勝できたんじゃなくて，本当にこう積み上げてきて優勝だったから．それは大きいと思う．クラブとしての成果は」
＊「それはやはり目先のことではなく，目先の結果ではなく，長期的に，今回の優勝だけではなく，今後も見据えてというような強化のスタンス，育成のスタンスということが実を結んだという意味でもやはり，特に印象に残っている事例としてというのは，話としても結びついたかなというような印象を非常に」
大林「そうだよね．だから，本当 4，5 年前まではね，ここまで来れるってのは，あんまり想像してなかったし」
＊「スピード的にですか」
大林「スピード的にというか．スピードはその前にも実際にチャンスがあったりしたし．だけど，ここまで，（X に）いるスタッフが本当に同じ方向をちゃんと向いてるとおれは自負してるし．いい方向に向いてるというか，みんながそこに向かって進もうっていうパワーをすごいみんな持ってるから．誰一人もここからブレちゃいけないっていうふうにみんな思ってやってるから．それは大きいんじゃないかなあと思って」
＊「はい．ありがとうございます．それでは最後の質問に移らせていただきます．大林さんの指導についてこれからの課題等がありましたら教えてください」
大林「戦術の追求というのはその今後ね，サッカーのスタイルもまた変わっていくと思うし．その辺の常にそこのアップデートしていかないといけないっていう．サッカーの情報を．（アップデート）していかなくちゃいけないっていうのは思うし．あと（自由記述アンケートに）コーチングの向上って書いているのは，まだ説明もそんな上手くないしね．説明にすごく長く時間が長くかかったりもするんで．もっと的確に響く言葉．言葉探しじゃないけど，『ストン』って入るような，相応しい言葉って絶対あるから．それはやっぱ常に探して．こいつにはこういう言葉がいいんだろうなとかっていうのは常に見つけてというか，していかないといけないなって」
＊「実際にその，戦術の追求という部分では，先ほどからいわれているように海外サッカーをみたり，スタッフ同士でディスカッションしたりというようなことをやはり，それを忘れてはいけないなというような姿勢を持ち続けるということですか」
大林「そうそうそうそうそう」
＊「コーチングの向上．言葉選びとか，言葉探しとかっていうこともいわれたと思うんでうけど，実際の指導現場のなかで，これは『スッ』と入っていって選手に伝わったなという事例はありますか」
大林「あるあるあるある」
＊「例えば，こう具体的に教えていただきたいんですけども」
大林「例えばあの，プレッシャーかけろ．プレッシャーかけろってよくみんな指導者っていうと思うんだけど．でもじゃあ，アプローチ行きました．ねえ．本当にじゃあこれが，『パッ』って行ったけど，プレッシャーって何ってなったときに，形だけ行ってる．これはアプローチだし．本当にプレッシャーっていうのは，おれが，ボールが移動中に，触った瞬間に『バッ』ていくから，（相手が）『ヤベ（やばい）』ってなって．それがプレッシャーだったり．わざとそこは日本語にして，圧力って．(『プレッシャー』だと)圧力感じないんじゃない，って．『圧力』って言葉にわざと変えたりとか．そういう何かちょっとした，要は日本語に変えてみたりとかだけでも，圧力かけないといけないんだ．プレッシャーという言葉は何となく，プレッシャーとアプローチがごちゃ（混在）になってる感じもあるじゃない．（コーチから）いわれて．『プレッシャー行けー』って．『はーい．行きまーす』みたいな．だけど，じゃあそれじゃあプレッシャーはかかってない．圧力はかかっていない．圧力，圧力っていうと，みんなが想像して，圧力って本当に『ジュワー』ってかけるじゃない．そうすると 1 人じゃなくて，みんながこう，『ジャジャジャジャジャジャー』って．『ジワジワー』ってイメージに変わっていくとかっていう言葉一つで変わるんだなあとか」
＊「その，圧力という言葉を使われたのはたまたまなんですか」

大林「たまたま『ポン』って出てきて」
＊「伝わり方が違ったと」
大林「違った」
＊「たまたまといわれますけど，やはり先ほどいわれたように，言葉探しとか選びとかいうことは常に意識されているなかで出てきたということですか」
大林「そうだと思うんだけど」
＊「これは伝わってないな，というようなことはありますか．例えば，具体的な事例として．伝わらなかったな．プレッシャー（という言葉）以外のところで」
大林「自分が，あんまりちゃんと理解していないことっていうのは，いわない方がいいかなって．気がする」
＊「大林さんご自身が理解されていない」
大林「そうそうそう．例えばそれは，ちょっと戦術的な部分に入ってくると思うんだけど．自分で例えば守備のはめ方（陣形）だったり，ボールの動かし方だったりとか．あやふやなまま．シュミレーションして（トレーニングに）入るんだけど，ちゃんとシュミレーションしきれてない状態で，『ポン』ってトレーニングに入って．入ったときにスムーズにいかなかったりとか，予想外のことがやっぱり起きて．そこ上手く対処できなかったり，そこを流しちゃったりあるんで．そうですね」
＊「それは，積極的にトライされた結果，上手くいかなかったということですか」
大林「いや」
＊「準備不足だったとかそういうこともあったりしますか」
大林「結局おれは何をやらしたかったのかっていうところがね，ブレちゃったりすることもあるから．だから，例えば守備の練習をしてました．違う．例えば攻撃の練習．ポゼッションの練習をしています．ボールをしっかり保持しましょうと．だけど，今日はそれを徹底的にやるぞっていって（トレーニングに）入ったんだけど．ボールは勝手に回っちゃいました．で，原因は何って．守備が緩かった．守備のトレーニングを，守備をもっと強化させないといけない．守備をいい強化して．おれの持論はもう，守備がいいトレーニングしないと，攻撃のいいトレーニングにならない（である）から．守備は常に行ってくれと．（そう）いってる間に守備の練習になっちゃったりね．あれ，ちょっと待て．攻撃の練習したいんだよなとか．で，時間がきちゃって，攻撃の練習できずに守備で終わっちゃったとかね．そういうことがあったりとか」
＊「やっぱり，トライしたら失敗もつきものですか」
大林「つきものだろうね．もう，日々，日々そう．もう何，3，4年目やったけど，会心のトレーニングってまだ，そんなにないと思う」
＊「4年間振り返られても．これは，っていうのも」
大林「ないない．ない」
＊「例えば，S 級（ライセンス講習会）の，その受講のときなんかはありましたか」
大林「いや，ないない．S 級のときもないし，完璧なトレーニングは絶対ないから，っていうふうにおれは思うようにしてるっていうか．あの，ああ，今日はすげー（すごく）いいトレーニングだったなあっていうのはないと思っているから．万能なトレーニングって絶対ないから」
＊「しっかり振り返りを大切にされているということですか」
大林「うん」
＊「はい．言葉にこだわられる理由ということはありますか」
大林「その，さっきの人によってその入り方がその違ったり，いい方変えるだけで本当に『スッ』って入るやつ（言葉）があるから．その辺はすごく．そういういい回しだったり，例え方だったりというのはすごい考えてます」
＊「ユースの選手一人一人によって入り方も違う」
大林「例えばすごく，サイドアタッカーでうちにも速いやつ（選手）がいて．いい選手なんだけど．いっつも（いつも）こう行きっぱなしで．例えばクロスあげて，そのまま，切り替えも遅かったりとか．あとは，要はスピードが全面にあるばっかりに，何だろうな．仕掛ける，仕掛けるになっちゃって．『スッ』て止まって，状況判断よくするとかっていうのができない選手がいて．そういう選手に逆に，フェラーリとかっていう車知ってるか，って．何か聞いたことあります（選手）．すごい高級車なんだよ．すげー（すごい）スピード出るんだ．でも何で，いい車，そういう高級車は，いい車といわれてる車はいいかっていったら，すごいスピードも出るけど，すごいハンドリングがいいし『ピ

タッ』と止まる．それはおれ車（業界）の人から 1 回聞いた話で，フェラーリって速いけど止まれるんですよって（車業界の人）．ちゃんと，止まれるんだよねっていわれたことがあって．なるほどねって．『いい選手は，スピードも出せるけど，ちゃんと止まれるし，ハンドリングもすごくいいし．お前は多分フェラーリじゃないな』って．っていう話をしたりとかね．そういうこう，例え話じゃないけど．してみたりとか」
＊「刺激したり，緩くいったり，誉めたり．先ほどあまり怒る，叱るということはあまりされないといわれていたと思うんですけども，言葉がけのところで非常に工夫されていることはやはり，コアな部分としてお持ちということですかね」
大林「うん」
＊「はい．ありがとうございます．インタビューは以上になります」
大林「はい」
＊「ご協力ありがとうございました」

## B．柿田氏のライフストーリー

＊「それでは宜しくお願いいたします」
柿田「お願いします」
＊「それではまず初めに柿田さんが指導者を志すきっかけとなったエピソードを教えてください」
柿田「現役生活で．その現役，サッカー選手っていうのは，30 歳に向かえる，30 歳に近くなれば，終盤に差し掛かるなかで勉強しながら，セカンドキャリアを考えていかなければいけないようなときに差し掛かった．ちょうどそのときくらいに，コーチライセンス．サッカー選手っていうのはライセンスを，受けやすい．コーチライセンスの講習会を受けやすい環境にあるので．ライセンスをちょっと取得しようということで．興味本位っていうか．そういう興味本位っていうのが，指導者に対しての興味本位っていう訳ではなくて．サッカーの現役生活のオフ中に，ちょうど講習会を受けれるということだったので．せっかくのオフなので有効に，ってことで講習会を受けたっていう感じなんですけど．そのなかでいろんな人と話をしたり．逆に指導しながら，今度は指導に興味が湧いてきて．ああ，絶対現役終わったときは，こういう形で，上手くお世話になったから，今度は指導，子どもの指導でちょっとこう還元できるというか．自分のこう微力ながら，そういう力を貸せるんじゃないかというような形で，漠然と思ってた．で，そのエピソードっていうと，コーチライセンスの講習会でのやっぱりその，仲間とのコミュニケーションだったり．初めてそういう，子どもに，大人に指導するっていう，難しさというか．深さというか．何かそういうのを．指導の深さっていうのを知ったことが本当に，今に，そこから今に至るというか．そういう感じで．エピソードっていうとそういうところですかね」
＊「その，現役の選手が参加される講習会っていうのは，だいたい，ほとんどの選手が参加されるようなものなんですか」
柿田「いえいえ．もう，本当に，コーチライセンスを，もうあらかじめ．セカンドキャリアを考えて，現役が終わってから動くよりも．本当に，そうやって取っておいたことで，次のセカンドキャリアにスムーズに，こう移行できるというところで．例えばその，J リーグとか協会が現役選手に優先で講習会を受けれるというような枠を決めてて．で，その枠があるので，当然枠いっぱいになれば，受けれない．そのタイミングでは受けれないけど．順番待ちになるかもしれない．ぼくのときには，現役の選手ですぐに受講する，したい人がいなかった．そんな感じで．割とスムーズに．そのタイミングで，取りたいなって思ったところで行けたっていう．多分，ほかの選手もみんなそうで．今も多分そうだと思うんだよね．現役選手をしながら，一番その下のランク．下じゃないな．C 級．C 級だからもう B 級くらいまでスムーズに取れると思うんですよ．ただ，現役の選手というのは，体が資本で．オフの間，ストレスを抱えたくないし，なるだけ（なるべく）サッカーから離れたいしって考える人がいるから．そういう人は当然，多分こういったところでの，無駄なエネルギーを使わずにって考えると思うんですけど．でも．やっぱりその，30 代に近いっていうか，30 超えているようなセカンドキャリアを考えているような人は選手をやりながら，積極的にこういうのに参加するような人が，割と多いとおもいます．今でも」
＊「若い頃，その 30 より以前の年代の頃はそういった

ことはあんまり考えたことがなかったということですか」
柿田「あ，でも辞めた（引退した）のが 29 歳の年なので，結局，自分はその前十字靭帯切って，リハビリして．で，確かね，また，膝をやっちゃった，同じ場所をやっちゃって，復帰してやっちゃって（負傷して）．ちょうどそのやった年，月が， 11 月だったんだけど，ほんとに J リーグの一番，最終節に近い．最終節じゃないな．残り，ほんとに 3 試合くらい前にまたやっちゃって．全治 2 ヶ月くらいの怪我をちょうど J リーグの終盤にしちゃって．で，その 2 ヶ月プラス，オフを考えたら．もう全くサッカーできないのが分かっていたから，そのタイミングで（コーチライセンス講習会に）行っておこうと思って．ちょうどそのタイミングでもう引退しちゃったんだけど」
＊「そういう制度があったことはご存知だったということですか」
柿田「もう，それはもう．ずっと昔から，J リーグができてほんとに，何年かしたらすぐにもう，そういう制度ができてたんで．自分の上（先輩）のね，大林さんもそうだけど，現役選手をしながらライセンスを取りに行っている人も見てたんで．（J リーガーのライセンス取得優遇制度）は知ってました」
＊「その講習会のなかでのコミュニケーションとか，指導の難しさとか興味が湧かれたということだったと思うんですけども．その一番の決め手となったことがあれば，教えていただきたいんですけども」
柿田「サッカーを知っているといっても自分が知っている範囲なんていうのは，本当に微々たるもので．本当にこう，自分の感覚で主観でやっていたものだけでは，全く，子ども，大人．子どもに特に教えるっていうのは，本当にできなかったっていう．言葉がけだったりとか，年齢によって，こっちが気を使わなきゃいけない．特に男子，女子によってまた違うし．で，逆に大人だと，逆に自分より歳上の人に気を使いながら教えてっていうのも，もなかなか難しいしっていう．人と．人が人を扱っていく難しさっていうか．サッカーだけではないんだけど．いくらこの，机上の空論っていうか，自分のこの頭のなかも含めて，原則がわかっていようが指導は全く別物というか．（選手は）生き物で．20 人いたら 20 人違ったあの，特徴があったりとか性格があるので．そういう人に対して，個々に対して，どうアプローチするのかっていう難しさというか．それが逆に興味になったというか．ああ，こんなに面白いんだっていう」
＊「想像以上のものでしたか．その難しさとかっていうのは」
柿田「全くもう．全くだめ．緊張も当然，人前で指導するとか話すとか．当然，人前で，何か作ったり書いたりっていう経験が，なかったので．当然，サッカー選手なんで，サッカーをするだけだったので．だから，本当にそのサッカー選手っていうものは一回外（社会）にでると，本当に無力というか．その何を一つとっても．そうじゃないですか．電話をとる，対応する．パソコン開いてみる．何か字を書く．全て人と．目上の人と話す話し方とか．何か全てにおいて，自分を一回こう，見つめ直す．自分に自信があった自分から，本当にこう，一気に，真っ逆さまにどん底に落とされるような気持ちになって．あ，これは何か，ひょっとしたら，指導者を志すのはもう決めてたんだけど，それを志すうえで，人として，もう一回勉強し直せっていうのを，唯一教えてくれた時間だったのかなっていう．その，全く無力な自分っていうのを，そこで，こう肌で感じて．もう痛感してか．痛感して．ある意味，指導の難しさというよりは，自分自身の力というのを痛感させられて，やり直さなきゃいけないというか．勉強し直さなけきゃいけないっていうのを痛感したから．逆にサッカー選手をやっていくのもまた一つ方法は．選択肢はあったけど．それよりも，早く，人よりも早く，引退して，指導者を目指すなかで，自分自身をこう，磨いていかないと世の中で通用しないなっていうのをわかってしまったというか．そんな感じですよね」
＊「当時のそういった経験は非常に現在の柿田さんにとって，ポジティブな働きとなっているというような感じですね」
柿田「そうですね」
＊「はい．ありがとうございます．それでは，次の質問に移らさせていただきます．柿田さんが指導で最も大切にしていることを教えてください」
柿田「選手のその集中力．当然，練習をしている選手の集中力ってことなんですけど．当然，練習に入り込んでいる．もうこっちが与えた目的だったり，与えた

イメージっていうのを，細部にわたっていっている訳じゃないんだけど，選手がプレーしながら，一生懸命理解しようとしているというか．だから，理解しようとして，発揮しようとしている，その集中力．ただ，漠然とただ，何となくやっているんじゃなくて．全員がその目的とか，イメージしているものに向かってやろうとしている集中力っていうのがすごい大事で．そういう時間を作り出すことがぼくは一番大事かな．選手が研ぎ澄ましているというか．いういいものを見せてやろう．仲間にもコーチにもっていうような，本当にもう，そういう．やりたくて，やりたくて，見せたくて『ウズウズ』しているような，そういう研ぎ澄ました集団というか．すごく一番大事だと思ってて．じゃあそれにはやはり，練習の何ていうの．その，強度．ただ，ゆっくり，弱くやってても，そのなかで目的というか，そのイメージしているものを出すのは簡単なんだけど．やはりその試合に活きるためには，結局その，しっかりハイプレッシャーであったりとか，一人一人が発揮するパワー．その強度，強いプレッシャーのなかで，目的にしているそのイメージが発揮できるっていうのは，試合に一番直結するので．練習を試合のようにっていうのが．試合を練習のようにやるというのが，自分の大事にしているところですかね」

＊「その，大事にされていることの背景にあることっていうのはどういったことがありますか」

柿田「背景」

＊「はい．なぜそこを大切にされているのかなという」

柿田「なぜ」

＊「はい」

柿田「結局，その試合でやることっていうのは，ゲームで行なっていることっていうのは，ゲーム．練習でやってないことをゲームで要求しても絶対発揮できないじゃないですか．選手は．なので．だからいかにその練習がいつもゲームのように，練習をしていて．ゲームのようにポゼッションして．で，ゲームのようにパスをしていて，パストレーニングしていてっていう，常にゲームと同じような強度，集中力でトレーニングしていないと，やはりその，ゲーム，実際その強度で行なっているゲームのなかで，こっちが要求したものっていうのは，すぐに発揮できないからこそ，ゲームと同じような，雰囲気で練習をする必要があって．で，逆にゲームっていうのは，意外と楽なもので．実際ゲームになってしまえば，指導者も何かいうっていうよりは，いつもどおりやればいいんだっていうふうに要求したいし．だからこそ，ゲームは練習と同じようにやればいいんだよっていう．だから要はゲームも練習も同じ強度と集中力でやっていれば，あとは，日頃の練習でぼくら（コーチ）はエネルギーを使うだけで．ゲームではそんなに，必要以上にエネルギーを使う必要はなくなる．逆にゲームで，ああだこうだって『バンバンバンバン』いってたら，萎縮しちゃって．全く選手もできなくなっちゃって，トライもそういうチャレンジもできなくなっちゃうので．いかにして練習でゲームと同じような雰囲気とか，ゲームと同じような感覚で選手を（トレーニングに）入り込ませることが大事かっていうのは，大切にしていること」

＊「具体的にその，取り組みとかアプローチの，選手に対するアプローチのなかでも，ゲームとトレーニングを上手く使い分けをされているというようなことですかね」

柿田「使い分ける」

＊「働きかけというか．例えば，ゲームのような強度を持ったようなオーガナイズをされることか．声かけの部分とか．ゲームのときは萎縮しないような声がけをされたりというようなことも，意識はされてますか．実際に」

柿田「そうね．基本的には練習のときもゲームのときも同じような，こっちは働きかけはするんだけど．やっぱりトレーニングっていうのは，11 対 11 のゲームのトレーニングをするべきだし．かといって，11 対 11 をやるわけじゃなくて，もっと細部のところのトレーニング．例えば守備のオーガナイズの練習だったら，もうちょっと少人数にして，選手がわかりやすく，本当に切り取った練習にもなるかもしれないし．その，3 対 3 のトレーニングになったとしたら，例えばじゃあ，その，細かいんだけど，このエリアのこういうシーンのイメージっていうのを，練習では本当に噛み砕いて，噛み砕いて，選手にイメージさせて．『ああなるほどね．このときは，おれたちは強く行くんだな』っていうのを分からせるようなトレーニングをずっと繰り返して，繰り返して．人数増やして，人数増やしてっていうようなトレーニングをしていくんですけど．だか

らその，何ていうのかな．ゲーム，ゲームでこう，ゲームのその，ずっと．何ていったらいいのかな．ちょっとごめん．話がまとまんなくなっちゃった．ゲームもトレーニングも基本的には，繋がっているというか．何か別々にして考えないっていうか．いや，ここの．おれたちこのエリアでは，こういうふうにするよね．こういうコンセプトだったよねっていうようなのが，選手がもう明らかに分かるようなのをトレーニングでは提示をして」

＊「全て一つ，繋がっているということを常に意識させるような，トレーニングの内容であったり，働きがけっていうのを．気を使われているというようなことですかね」

柿田「そうそう．そうですね」

＊「はい．ありがとうございます．それでは，逆に，最もしてはいけないと思っていることを教えてください」

柿田「多分，今と真逆なことだけど．単純に集中力とか強度っていったけど，集中力の欠如したトレーニングだったり．その，強度が全くないというか．その，試合と同じような，雰囲気じゃないとか．試合と同じようなテンションとか．ではない状況で，指導しちゃってる．その時間は本当に無駄だし，試合には全く活きないし．だからそういう，選手の雰囲気というか，やっちゃいけない雰囲気っていうのは意識しているので．しちゃいけないって思っているっていえば，多分そういう雰囲気を作っちゃってるってところですかね」

＊「指導者のアプローチの仕方がそういった姿勢を見せてはいけないというようなことですか」

柿田「アプローチ．そう．そうともいうし．あとは，アプローチもそうだけど，オーガナイズもそうだし，もうリアリティのないというか．ゲームでこれないじゃんみたいな．こんな，有り得ないじゃんって選手が思うようなトレーニングをしちゃってるときって今でもあるんだけど．そういうのってもう，阿吽でこっちはわかっちゃうんだけど．『あ，選手がちょっとしらけてるな』とか，『あ，選手が入り込んでないな』．そういうトレーニングはしないようにしています．あくまでも，選手がゲームで，『あ，このエリアのこういうイメージね』って．で，全員が理解したなかで納得したなかで，強度を強く保って，テンション高く保って，トレーニングして，そのイメージをやろうとしていることが一番大事だから．その真逆．選手が，ああこれもう，この指導者のやっていることないなって察知して，やっているようなトレーニングっていうのは，極力避けるようにしてます」

＊「選手自身が納得してゲームと繋がっているんだなということを，と．やっぱり，指導者が指導のなかでしっかり作っていこうかなというようないうことですかね」

柿田「そうだね」

＊「過去にこう，そういった，意識のなかで，これはちょっと失敗だったな．みたいなことはありますか」

柿田「過去に」

＊「実際のトレーニングのなかで，そういう場面を作ってしまったこととか」

柿田「それはもうしょっちゅうあるよね．選手も本当に今，進歩してて．ちゃんと考えるというか．考えながらやったりとか．しようとするんですね．だから，割と選手の，こう，X のコンセプトにあったイメージっていうのが当然あるなかで．こういう（動き方の）イメージで『おれはこう』って思って，選手に対して，全くちょっと異なるような，動きをこっちが強制的に要求しちゃったりとかすると．（選手が）『いや，それはちょっと違うのになあ．おかしいなあ』っていう．本当にそれこそ，（選手が）『おれそんなふうには思わねえけどなあ』っていうのをいってくれればいいんだけど．当然子どもはコーチに対してはいえない．で，そういった，変なもやもやした感のなかで，選手が納得してない状態でやっていくのも一番よくないので，やっぱそういうのはしょっちゅう．多分どのコーチもあると思うんですけど．自分もしょっちゅうそういうのはあるので」

＊「ずっとこれまで X でプレーされてきて．X で指導されてきて，X の哲学みたいなものが，身に染み込んでいる柿田さんぐらいの指導歴の長い方でも間違いがあったりってのは」

柿田「いやいやもうそんなの．多分誰でもあるんじゃないんですか．トップチームの人でもそうだし．完璧な人はいないし，やっぱりそこは本当に，みんなあると思うんですけど」

＊「そういったところをやはり振り返ることも大切にされていますか」
柿田「ちょっとずつ，ちょっとずつこう，自分も前進しなきゃいけないので．この一つの言葉だったりとか．その言葉の持つ意味なんかは常に考えて．もっと的確な言葉があったかもしれないとか．そういうのは当然，自分で工夫して，振り返って勉強して調べたりとかしながらやってますけどね」
＊「情報収集なんかも」
柿田「そうだね．そういうのはもう，選手も当然行なってることだし．今，ね，あんだけテレビでもサッカーやるし．海外の．で，自分自身ももちろん書籍も含めた．X のスタッフみんな勉強熱心なんで．そう．調べながら，お互いが持っている情報をこう共有したりとか．映像見て，いろいろ，ああだこうだいったりとか．そのなかで新しく気づいたこととか，勉強になったことっていうのは多いですよね」
＊「はい．ありがとうございます．それでは次の質問に移らせていただきます．柿田さんの指導で今までに最も印象に残っている事例を教えてください」
柿田「ああこれ多分，大きい，漠然とこういう．いろんな答え方あると思うんだけど，自分が唯一，やっぱり残っているっていうと．指導経験というよりは，実績というか．ジュニアユースを 8 年みてきて，丸 8 年になるんだけど．1 年だけ，ジュニアの U-12 の監督をやったことがあって．そのときに，その，N カップっていう 9 人制の大会があって．世界大会が．それの日本ラウンドで優勝して．優勝したチームは，ヨーロッパの L（伝統的クラブ）のホームスタジアムで，世界大会（に出場）ができるっていう権利を得られるんだけど．そこのスタジアムっていう．そこにたどり着くのも結構レベルが高い，結構厳しいものになるんだけど．そこでなんとか日本で優勝して．世界大会が決まって．で，自分がこうよく，選手の頃も含めてこう，見ていたその L．（L が）国内のチャンピオンチームだった当時は，超（すごく）強かったけど，そこの L のスタジアムで試合ができて．その地に立てたっていう，その思い出がすごい深くて．で，その指導経験というよりは，その，印象に残っているっていうところでいったら，そういう大きな舞台で，大きなスタジアムで X のサッカーを世界にみせる，披露することができたってところですかね」
＊「実際にどういったことが特に，その大会のなかでいうと」
柿田「大会のなかでいうと．何だろ．各国のね，その，代表が来てる．そのレベルの高い大会なんだけど．一桁の順位だったんだけど．その，何ていうのかな．やっぱり子どもたちに植えつけてきたものっていうのが，揺るがずその緊張感とかね，そういった舞台とかで楽しんで出してくれてるっていう子どもたちをみたときに，自分がやってきてよかったなっていう．あの，逆に生きがいを，もっとやりたいなっていう，生きがいを感じたことが，やっぱり強かったんで．具体的にいうと何かね，あんまりでてこないんだけど．その，日頃の積み重ねをね，ちゃんとアウトプットできるというか．あ，そんなもう，あの，レベルまで達してきてたんだっていうのを実感したというか．その選手を見て．何かそんなその，自分自身にこう，励みになったというかね．そんな印象」
＊「特にどういった日頃の指導がよかったかなというふうにお考えでしょうか」
柿田「特に．X のコンセプトっていうのはハッキリしてて．ボールを大事にするとか．ボールを大事にするために，しっかり全員で 1 つのボールに関わって．で，ボールを動かして．動かして相手の隙をみて突破してって．っていう．あの漠然と今大きなその，イメージを伝え，いったんですけど．やっぱりそこ．そういったところのトレーニングっていうのは，毎日デイリーでやってるんで．やっぱりそういう緊張感のなかでも出せるような，レベルまで到達してきてる．何もなかった子たち（選手）がそこまで到達してきたんだっていうところでいったら，やっぱりね．そこがやっぱり指導者の励みになるようなところでもあるし．その，コンセプトありき，コンセプトとコンセプトがしっかり徹底されて，あの，世界の人々に知ってもらえたっていう．X のサッカーってこんな感じなんだ．そのときは X じゃなくて，日本代表として出たんで，X の名前は全然出てないんだけど．ちょっとでも日本のイメージっていうか，日本のイメージっていうのはおかしいな．そういうのは出せた」
＊「チームとしてのコンセプトを．そういったものの背景にある日頃の積み重ねを表現できた選手たちを見

れたことが非常によかったというような印象ですかね」
柿田「やっぱりさっきもいったけど．その，試合はトレーニングのようにやるし．試合はトレーニング，トレーニングは試合のようにといった．そういう徹底したね．その，当然ね，いつもそういうわけにはいかないんだけど，子どもたちも．でもそういうところでいったら，舞台が違えど，緊張があるにせよ，そういった積み重ねが，そういうときに結びつくっていうのは．多分何もないトレーニングでいきなりそこ出て，そこ（世界大会でいつも通りにプレーするレベル）に行くことはないんだと思うんだけど．やっぱりそのねえ，意識の徹底がなければ，そんな大きな舞台で，自信持って，楽しんで披露することはできないし．だからそこでちょっと，実感が湧くというか，やってきたものの．そういう印象は残っているっていう．かな」
＊「ポジティブな印象と，そうではない印象で最も印象に残っている事例というのはどういったことがありますか」
柿田「ポジティブな印象」
＊「今お話しいただいたのは，すごいポジティブな印象だと思うんですけども．それとはまた違ったネガティブな他の事例で，印象に残っている事例があれば，教えていただきたいんですけれども」
柿田「ネガティブ．ちょっと，ネガティブなんていったらね．いろんなことがあるかもしれないけども．事例でしょ．ネガティブな印象．ネガティブ，ネガティブなっていうのは，裏を返せば，こっちがね，働きかけちゃえば，そういうのをポジティブに持っていくような，考え方を選手に働きかけるから．何だろう，ネガティブなって．サッカーだから当然勝ち負けあって，負けることもあるし．上手くいかないこともあるし，そのなかで辞めちゃう選手なんかもいるし．結局，何だろうね．その，X でやっている以上，X のスタイルがあって．そこに合わなくて，辞めてく選手なんかもいるし．自分が，担当でやってる以上は X のっていってたって，直接働きかけて，指導しているのは自分だから．その選手にとって．だから，あの，ねえ．自分の，『（柿田の）指導は好かない』っていって辞めていくような印象，イメージで辞めていく選手もなかにはいるんで．そのね．そういう答え方でもいいのかな」
＊「はい．サッカーと離れ，サッカーから離れていくというよりも，X を出ていく選手がいるというのは」
柿田「そうそう．そこは，植えつけれない．その，そういう選手を上手く，消極的に思っているようなところからこう，上手くポジティブにこう働きかけることができなくて．そこの，結論に至ってしまったということだと思うんで．その指導者としては，そういう選手を救えなかったというか．逆に働きかける能力がちょっとない，力不足だなって感じたときもあったから．ネガティブっていうとそういう感じですかね．結局のところ」
＊「当時と現在の柿田さんを比較したときに，また今の柿田さんであると当時は違った働きかけをした可能性というのはありますか」
柿田「若いっていっても 30 超えてたら若いかどうか分からないけど，でも指導者としてはまだ未熟なときっていうのは，感情だけで働きかけちゃうことが多くて．自分の．その感情．気に入らなければ怒るし，その，イライラしてれば，当たっちゃうし．っていう．逆にそういう，ああ，イライラしてるなって思っているからこそ，それで本当に萎縮している選手に対して，だからこそ，感情じゃなくてもっと人間味のある言葉があったりとか．人と人との対話なので．選手の立場に立って考えてあげることで，もっと違ったアプローチができるんじゃないかなって，今は思う．当時は本当にもう血気盛んな．選手も自分も，同じテンションでやっちゃってるから解決しなかったっていうのはあったかもしれない」
＊「はい．ありがとうございます．それでは次の質問に移らさせていただきます．（自由記述アンケートによると）現在の柿田さんの指導が選手時代に受けた指導経験の影響を受けていらっしゃるということなんですけれども．それはどのような影響でどのように反映されているか教えてください」
柿田「（自由記述アンケートを確認しながら）どこだ．もう当然，プロサッカー選手で勝負して行くっていうと，ねえよくいわれるのが複数年とか 1 年契約とかいわれるんだけど．その職業を持って 1 年契約っていう．はっきりいってしまえば，その 1 年契約だから何か，職を失うっていう危機感を持って多分やってないんだけど．でも実際，年齢を重ねるにつれて，結局その，

プロでやっていく，プロで食べてく，サッカーで食べていくっていうものの，厳しさっていうか．当然浮き沈みがあって．沈んだ時期を経験していれば，外出されちゃったり（移籍）とかね，クビ（契約満了）になったりとかすることがあって．あのそういう挫折で，厳しさを知る．要はメンタリティというか，弱いやつじゃはい上がれない．もっと細かい話でいうと，試合で外されちゃったりとか．もしも，この前半で良くなくて，そこでちょっとした挫折じゃないけど，そういうあの，自分のその，弱み，弱いところからハーフタイムを経由して，後半に挽回していくとかいうか．まそういうのも含めて結局その，自分のこの意識，メンタリティの強さがないと，本当のバイタリティがないと，勝負していけない世界なんですね．プロってやっぱり．そんなのが 1 ヶ月続いちゃったら，クビになるし，弱いやつ（選手）は．でも強いやつ（選手）はどこかで努力したりとか，どこかで自分をコントロールしたりとか．自分のその，コントロールする力っていうのを蓄えていて，備えてて．成功する人っていうか．自分がそれで成功したかどうかっていうのは別として．そういうね．その，そういうところで，結局その，プロに対する意識というか，プロ意識っていうのは，すごい備わってきて．それが確立されてくると，ちょっと若い頃は食事に気を使ってなかったことでも，やっぱり自分が体を作るためにちゃんとした食事を取ったりとか．お酒を飲まないとか．あの，自分にとってマイナスになるようなことをしないようになったりとか．あと，寝ることに対しても，やっぱり睡眠で体を休めるってことに対しても当然自分でちゃんとコントロールする．なぜなら自分が成功するため．あの，失敗しないためにそういったコントロールをするようになるわけで．本当にその，本当に，その来週の次の試合のその 1 日のなかの 1 時間，2 時間の試合のために全力で自分を，しっかりとコントロールしていくプロ意識っていうのは，今のアカデミーの教える子の現場に立っても．アカデミーなんていったら今ね，もう J リーグの下部組織っていったら，プロの集団の下部組織だから．ね，そこで，プロになれるやつ（選手）が多いっていう環境でもあるから，そういうのをちゃんとしっかり植えつけていく．だからそういうことを知っている自分にとって，やっぱりちゃんとそのプロ意識の大切さというか，自分をしっかりとコントロールしていく．アカデミーの選手に伝えられることで．もっと具体的にいったら，本当にその，プロじゃないけど，やっぱりそのプロを目指す集団，選手にとって，本当に今まで，アプローチされなかった，その食事の部分だったりとか，睡眠．あと練習に対する情熱とかサッカーに対する情熱とかそういうのを習慣化させることがすごくぼくら（コーチ）にとっては大切で．そういう経験をしてきたからこそ，そういう，情熱を伝えれるのかなとは思っているんですけど」

＊「実際にその柿田さんがユースとかプロのときにそういった指導を受けられたということがありますか」

柿田「ユースのとき」

＊「はい」

柿田「ぼくがユースの頃は（クラブも）プロ化してなかったんで．そこまで，そういうプロ意識の部分とかっていう，プロの指導者の人がぼくのコーチだったわけでもないので，まだアマチュアの方だったので．多分そこは，まだ，確立されていないときだったと思うんですよね．今はそういうプロを経験した人で，多かれ少なかれ，プロでやっていく以上，いつかは辞めなきゃいけないときがあって．移籍するときがあるような，あの，方が多くて．そういうときに大体挫折を味わっているというか．プロのその厳しさとかっていうのを味わった方々が指導者になっていることもあるので．そういうところでみんな共通して持っているんじゃないですかね」

＊「やはりオフ部分（サッカー以外の生活面）での，いかに，自分を律する，コントロールという言葉があったと思うんですけども，そういったところは非常に大切にされて，指導されているということですか」

柿田「オフ」

＊「あの，オフ・ザ・ピッチの部分」

柿田「オフ・ザ・ピッチね．そうだね．今は特に．もう，世の中に認知されてきている J リーグの存在自体というか，その，例えば X であれば．アカデミーの選手はみんな，このクラブが支給しているものを着て練習しているし．自宅から来るときも帰るときもそういうウエアを着ているから．当然そういうのを植えつけていかないと．ちょっとぼくらは普通じゃないっていうところを．みられているっていうところを植えつけ

ておかないと．やっぱりコントロールすることはできないですよね．選手はがちょっとしたときにゴミを拾ったりとかっていう余裕も出ないだろうし．みられているっていうようなところでいえば，この，それこそ服装とか身だしなみとか．いろんなところで注意深くする必要があったりとかするんで．そういったところも確かに大事になってきますよね」

＊「今，お話していただいたことと別に，受けてきた指導で，サッカーの指導，サッカー以外でもサッカーに関わる指導で，何かこう，自分のご自身の指導に影響を与えているとか，反映されていることということは何かございますか」

柿田「受けてきた指導で」

＊「はい」

柿田「プロのときってこと」

＊「あの特に印象に残っている，プロのときでもいいですし，ユース時代でも構わないですけども」

柿田「プロでやってたときに，自分は割と早い段階でデビューをして（出場機会を得て）．X に 8 年いて，N（J クラブ）に 2 年いたけど，あの，プロの 1 年目のときに，直接その，ブラジル人の監督だったんだけど．結局そのブラジル人の監督とブラジル人選手が助っ人で来てて．アンドレっていうみんな知っている，ぼくの世代の人はみんな知っているんだけど．そのアンドレがいったことで．指導者じゃないんだけど，でももうその当時はもう超ベテランで，もう指導者並みの．本当に，グラウンド上の監督みたいな方なんだけど，その人にいわれたのは．結局，指導で，っていわれたらあれだけど．あの，『サッカー選手っていうのはあの，試合に出ることが成功でもないし，簡単ではないんだ．出ることじゃなくて，出続けること．いることじゃなくて，い続けることが，今の自分が変わらず，有り続けることがその，成功なんだ』（アンドレ）っていうようなことを．自分がちょうどすぐに出て，あっという間に『ダダダダ』って，レギュラー確保して，経済的にも何ていうんだろうな．もう，本当にマスコミにも取り上げられて，ちょっと天狗になっちゃってたときに，そういうこといわれたのが常に，ちょっと自分が見失いそうになったときでも，その言葉で，ちょっとこう思い留まるような．言葉っていうのをかけてくれたっていうのはすごく自分では，影響与えたっていう．指導．具体的な指導じゃないけど，でも言葉がけってところでは指導に近いのかな」

＊「言葉の重みなんかは，非常に感じられましたか」

柿田「あれだけ世界的な人がいった言葉だし．そういう人たちの一言一言っていうのは，他のね，その，いろんな人がいたけど，ぼくにはいろんなことをいってくれる人が多くて．そうですね．言葉の重みっていうのは意外と．指導者じゃなかったにしても，結構．今自分が指導者になってみて，やっぱり言葉っていうのは大事だなっていう．その，本当に経験してきた人がいう一言っていうのが，本当にマッチしていると，その意味が．本当にこんなにも響くんだなっていうのは感じてますけどね」

＊「それはそのまま置き換えさせていただくと柿田さんの指導される言葉とか，実際にトップ選手として活躍されてきた柿田さんが指導される中学生年代の選手には非常に響いているんじゃないかなという印象を受けたりしますが」

柿田「響いてくれてばいいですけどね．ただみんな，ぼくが現役の頃は，まだ赤ちゃんですからね．だから全く知らないんで．そういうところではもう全然，時代がマッチしていないから．逆に，もっともっと，ちゃんと勉強してとか，もっともっと．自分ももっと彼らに納得してやってもらえるような説得力あるような言葉を勉強しなきゃいけないし．逆にプレーで見せなきゃいけないしっていう．この人がいうからだよなっていうところっていうのは，やっぱ大事になってくると思いますけどね．全く今はそれができているっていう自信はないです．実際」

＊「そのために，でも，普段，別のところで，指導とは別のところで何か努力されたり，準備，準備をされたりっていうことは，常に心がけはされているっていうことですかね」

柿田「そうですね」

＊「はい．指導，またその経験でも構わないんですけども．こういったことは反映したくないな，影響を絶対受けちゃいけないなっていうふうにお考えのことっていうのはございますか．指導に対して．ご自身の，指導するうえで，ご自身の受けた指導とか，かけられた言葉で，経験されてきたことで，選手にはこういった指導はしたくないなってことはございますか」

柿田「あの，現象，そのミスの現象とかって，結局，起きちゃった過去になるから．その，起きちゃったことに対して指摘すると，当然自分だって納得いかないし．おれはこうしようとしてて，こういうふうにしようとしててっていういい分が選手にもあって．でも，それが単純に技術的なミスなのか，戦術的なミスなのかわからないけど．でもやっぱり選手のいい分があって．だから起きちゃったことに対して，いや，お前こうだっただろうっていうのは．現象に対していうのは，後出しじゃんけんというか．あんまりこういいもんじゃない．気分がいいもんじゃない．自分が選手のときだって，『何でお前はここ行かないんだって』（コーチが）いったって，おれはこういうふうなイメージがあって．（コーチから）『だめだ．そんなもん』っていわれると，やっぱりそれはプロであったら，うるせえなってなっちゃうし，逆に受け入れたくなくなっちゃう．そういう指導者に（なりたくない）というのがやっぱりあるので．そのバランスっていうのは考えてますね．その現象に対してばっかりいっている（指摘している）人っていうのは説得力がない．逆に，自分のね，一応この，サッカー哲学というか，哲学ではないな．サッカーとはね．本当にサッカーは予測だと思ってるの．単純に．その，ボールが次にどうなるかっていう，予測．味方が次，こう動くんじゃないかって，あいつだったらこう動くんじゃないかっていう予測だったり，相手がこういうふうに，こう仕掛けてくるんじゃないかっていう予測だったり．こういうことをしてくるんじゃないかっていう，その予測が高いやつ（選手）が結局，生き残ると思ってて．サッカー＝（イコール）予測だと思ってる．もっと細かくいってしまえば，テクニックとインテリジェンスっていう，大事にしたいものはあるだけど．でもサッカーは要は予測だなって思ってて．で，結局その予測に対してやっぱりアプローチしたいから，事前にこれから起きそうなことをちゃんと準備しとけとか，こういうこと準備しろよ．お前意識しとけよっていうのを，ボールに関与してないときにコーチングするように心がけてます．起きちゃってから，何かこういうんじゃなくて．起きちゃってからいうのは試合の後でもいいとおもうし，映像みせてからでもいいとおもうし．でもいっちゃうんですけどね．現象に対して．そこぐらいですかね」

＊「そういったところは普段から，やはり心がけはされていると」

柿田「というのも，すごく難しいですよ．あんまりにもちょっと（レベルの）低い，その，狭間の（比較的力の劣る）世代を教えちゃうときなんかは．ミスが連続するし，自分がこういう目的を持って，こういうテーマでトレーニングしようと思っても，それ以外の細かなミスが多すぎちゃって，そこにじゃあ一回一回現象に対していっちゃうと（指摘してしまうと），じゃあ，この人は何をいいたかったんだって最終的にはなってしまうんで．全くトレーニングの効果はなくなっちゃうんで．かといって，ミス，ちっちゃな（小さな）ミスを許しすぎてもよくないし．多分そこって，指導者にとって永遠の課題だと思うけど，そのバランス．全くじゃあ現象に対していってないかっていったら，いってるし．意外と．ほとんどの人がいうけど．自分がそう思ってても いっちゃうし．いい過ぎちゃうとどうなのかなっていうところまで，ちゃんと自分ではそこはこだわっているところかな」

＊「柿田さん自身がお持ちの予測のバラエティーというか，数と，指導されている選手の持つ予測の数はかなりの差があるのかなと」

柿田「差がある」

＊「その辺でジレンマなんかは」

柿田「当然．何でこんなこと，何でこんなことの連続なんじゃないんですか．何でこんなことできねえんだ，わかんねえんだよっていう．だから子どもたちはもう純粋に．その，思った通りにというか．感じた通りに動いちゃうんで．お前そんなことしたらお前，あの指導者は怒るよっていう．そんなこといったら嫌な気分になるだろとか．でもいっちゃったり，やっちゃたりする訳で．多分そうやって大人になっていくんだろうけど．だから，あらかじめ，そういうのが起きてからいう（指摘する）んじゃなくてっていうところで，教えていくのが結構大事だったりするし，難しいところなのかなっていう．でもミスしないと学ばないしっていう．ここもバランスを考えて．指導していく，教育していくというか．というのが大事なんじゃないですかね」

＊「例えば，他の指導者が指導する現場，同じアカデミー内でも，例えば他のチームの指導者の方の試合中

のコーチングとかでも，何か思われることとかもありますか」
柿田「思いますけど．思うくらいで．自分にとっちゃ逆に，ああ，そういうふうにいっていると，ああ，そういうふうに感じちゃうなって．自分が感じたら，やっぱり自分は気をつけたりとか．いいなとおもったら自分のものにすればいいし．あ，逆に聞いて勉強してますけどね」
＊「ポジティブにとらえて．自分に」
柿田「いろんな人のを聞いて．ああ，こういう効果を生むんだなとか」
＊「何かそのいいなとおもったことで実際に使われた指導とかっていうこと，具体的な事例があれば教えていただき，いただきたいんですけども」
柿田「あの，スペイン行って，その，2 年連続スペイン，今年はイタリアだけど．スペイン行ったときに，アトレチコ・マドリードのその監督さん，U-15 の監督さんは基本的には，あの，こんだけ大きい組織のクラブの選手だから，教育っていうところは，その練習においてのその，規律っていうのはちゃんとしてるから．あえて，そこに対してエネルギーは使わなくて済むんだけど．トレーニングのとき，トレーニングのときに，全くあんまりいわないの．コーチングを．あの，シンクロで．止めたりしないの，フリーズを．『フリーズっていうのは，あんまりないね』っていう話をしたら，『いや，フリーズなんかはする必要はなくて』（アトレチコ・マドリード U-15 監督）．要は，やらないやつはもうクビになっていっちゃう環境なんだけど，みんなやる．それはもう最低限．集中してやるし，トレーニング，試合のようにトレーニングしてるし．ただ，その選手の発想だったり，選手のいい分だったり，選手の気持ちだったりっていうのは当然リスペクトしてて．それが全て．だからそんな，一人一人にそんな．その人を戦犯扱いして，『バサッ』て止めて，いちいちそうやって正したりとかするんじゃなくて，『そういうときはシンクロで，ある程度やんわりと，その人のプレーっていうのを尊重しながら，選択肢を植えつけていけばいいだけのことなんだ』（アトレチコ・マドリード U-15 監督）みたいな．だからトレーニングが，しっかりとこうオーガナイズされてて，いい習慣があれば，何もいちいちこう，ね．『ピッ』（ホイッスル）って止めて，『お前のプレーな』（コーチ）っていうところでその人が戦犯扱いにならないというか．する必要ないっていうか．何かね，そういうもう，そういういいトレーニングのサイクルができあがってる．ビッグクラブのアカデミーは．そういったのをみたときに，ちょっと自分にも影響受けたというか．ああ．そういうふうな，そういうね，自前なそういうそのいい習慣，いいグループ，いい教育があれば，そんないちいち．サッカーの，サッカーのね．スペインの，そのスペインのサッカーの歴史とか，サッカー先進国であるから，ちっちゃい（小さい）頃からそういうサッカーみてれば，当たり前のように，スペイン代表のように子どもたちもプレーする，プレーするし，しようとするし，バロセロナみたいに．その差，違いはあるにせよ．そういうね．しっかりと当たり前のことをさせられる習慣とか．いい教育，いいその習慣があれば，結局のところ，そんなにいちいちいちいちそのプレーに対して止めたりとかする必要とかはあんまりなくなるものなんだなっていう．本気でやってるとか，本気で戦ってるとか，本気で監督に認められようとしているような，そういう，傾向が，あの，風潮があれば，結構意外となんでもスムーズに．コーチがいちいち『ピーピーアーアー』いわなくても，本当にちょっとした言葉がけで済んじゃうっていう．本当それが理想だなっておもったときもあって．日本人はみんな真面目だから，何かコーチも何かいいたがるし，いわないと自分のその，何ていうのかな．威厳が保てないし，何かちょっと履き違えているところもあるけど．要はいいグループで，いい習慣があれば，何かこう意外とあんまり言葉って．重い一言，二言がこう『ポン』ってあれば子どもたちは洗脳（意識づけ）されていくし，やろうとするから．意外とこう，そういうあれですよね．ちょっとしたこう，何ていうのかな．気づきはありますけどね．自分はでも，そういうレベルに立ってないっていう」
＊「少しそういった場面を実際に見られて，カルチャーショックというか，『あ，こんなにも違うんだ』っていうようなことはやはり感じられましたか」
柿田「感じますよ．選手のポテンシャルがまず違うっていうところで．でも日本の方が，子の方が上手いんです．確かに．上手いんだけどっていう．ちょっと違

う．やっぱりちっちゃい（小さい）頃からね．あの，バロセロナみたいなサッカー見てたりとか．そういうね．アトレチコ・マドリード，レアル・マドリード（スペイン）のサッカーちっちゃい頃から見てて．それを思い，夢に思い描いてこう，大きくなってきて．じゃあ実際自分がそのアカデミーに入って．でも明日，明後日にはクビ切られるかもしれないっていう環境のなかで毎日 100%でトレーニングして」

＊「アカデミーの選手でもクビを切られるということがあるんですか」

柿田「クビを切られるというかね．レンタルで出されちゃう．『来週からあなた来なくていいよ』．『明日から来なくていいよ』．『明日から，あの，提携チームのどこどこに行ってください』っていわれちゃうっていってた．だからその本当に，人生かかってやってるっていうところでいえば，もうその時点で違うんだけど．X の子たちは，4 年生に入れば，6 年生までプレーできるし，中学のときに入れば中 3 までできるし．だから塾みたいになっちゃってる．そういう感覚がもう違うっていうのはあるんだけど．しょうがない」

＊「はい．ありがとうございます．それでは次の質問に移らさせていただきます．先ほどお話いただいたこと，正にそのままかなという印象もあるんですけども，選手時代に受けた指導経験以外で現在の柿田さんの指導に影響を与えているサッカーに関する経験っていうのは，やはりそういった海外での勉強みたいなことは，大きいものが占められてますかね」

柿田「そうですね．その，X（アカデミー）入って，ずっと海外の遠征に自分の担当してる学年で行ったり，あとアシストで行ったり，毎年行ってるんで．その際に必ずその，ビッグクラブのアカデミーの練習風景みたりとか．指導者．海外の指導者とコミュニケーション取ったりとか．で，全く，異なった感覚に気づかされることが多いから．そういったところで，ちょっと自分自身の指導に対する視野も広がるというか．全く頭でっかちになって，今の環境とか自分の現状が 100%じゃないって．やっぱりその，知るっていうことがすごい大事だと思うんだけど．で，自分自身のまだ小ささに気づくことが多くて．そういう新しいものをどんどんどんどん吸収するっていうところでは，海外にそういうね，留学なり研修なり，遠征なりで．影響は多いっていうのはあります」

＊「今後もやはり，そういったことは継続的に」

柿田「自分がこのクラブにいれば．クラブの費用で行ってるんで．別に実費で行ってもいいんですけど．本当に大事なのはちょっとでもサッカーの先進国，ヨーロッパに．ヨーロッパが中心になると思うんだけど．そういったところにはやっぱり視野を傾けていかないと，ついて行けなくなっちゃうのかな．真似をするっていうことじゃなくて．その指導観というか．自分の今の自分が，100%合っているとは全く以て思ってないし．むしろ足んなさすぎて，困ってるぐらいなんだけど．その指導観をちょっと勉強する意味でも．全く違った国行って，サッカーを知るっていうのも大事かもしれないです」

＊「そういった海外に行って，刺激を受けられるなかで，自信になる部分っていうのはあったりしますか．『あ，これは，間違ってなかったな』とか．『これはもしかすると自分も負けてないんじゃないかな』とか」

柿田「自分というか X が負けてないなっていうのは感じますけど．その X がスペインの大会行って，やっぱり X のサッカーで全然通用したし，勝つし．全然相手を圧倒するしっていうのをみたときは，あ，間違ってなかったなっていうのは．やってきたことは間違ってないっていうのは感じてます」

＊「実際に，海外の指導者の方からも評価していただくというような場面もありますか」

柿田「そうだね．それで結局，また来年も招待しますっていうオファーが届いたりとか，違った国からオファーが来たりとか．結局，その，サッカーを評価されたってことがすごい結構多いので．そうですね．向こうから評価されてきてるっていうのはありますけどね」

＊「X に．X で育って，柿田さんご自身が．X で，実際トップでプレーされて，X のアカデミーに戻って，そういったものがまた海外で評価されてるっていうことは，非常に，また愛着を深める，高いモチベーションになったりも，つながったりも」

柿田「X で育って，X のトップチームを経由してっていうのは，あんまりそこは．逆にそんなに．そのときのサッカーと今のサッカーは全く違って．今のアカデミー，X アカデミーのサッカー全く違って．あの，あ

んまりこの自分が育ったっていうよりは，本当に自分が現役を退いてから，X のアカデミーのサッカーが確立されてきたようなところもあるから．でも，それを継続して継続して，勝てないような時期というか，評価されないような時期から，その今に至るんですけど．でもそれが結局海外の方々に評価されるので．自信になった部分はありますけどね」

＊「評価されない時期があったといわれるその時期は，いろいろ苦しい期間もありましたか」

柿田「評価されない時期っていうのはあんまり気にしなかったんですけどね，結局．おれらはおれらみたいな．おれらがおれらで納得して，選手が納得して，試合で発揮してそれが勝ちに結びついて成長していけば，いいくらいにしか思っていなかったんだけど．でも，そういう考えのなかでもやっぱりいろんなものを吸収して．いいものは，見て吸収して．気づいて変えて，マイナーチェンジしてマイナーチェンジしてってきてるから．そうですね．その，あんまりそのね．外は気にしないようにしようとしてた部分もあったけど，そんな気にならなかったんですよね」

＊「長い目でみて選手を育成していこうというような，X の哲学を確立していこうっていうような」

柿田「そうだね．どっちかといったらそこにこだわりを持っていくというか．ものが強かったかもしれない」

＊「ここ近年の実績（全国大会での好成績やアカデミー出身選手のトップチーム昇格）でいうとそういったことがこう，徐々に徐々に表現されていっているかなっていうような印象を受けたりするんですけれど，その辺はどのようにお考えですか」

柿田「ああやってね，本村（X アカデミー出身）が最近も（国際試合に A 代表として）出てたけど．トップチームだと西田（X アカデミー出身）が得点王ランキング入ってたりとか．またその下の世代もまたね続々とこれから続いていくし．そういう現状ですよね．結局のところ．今までにないスピードでアカデミーの選手がトップ上がってる（トップチームに昇格している）から．しかもみんな同じ一貫した指導のなかで，一貫したサッカーで上がってて．トップチームのそういう原動力に力になってるから．そういうところをみると上手くいってる」

＊「指導者としての喜びとか，やりがい，実感みたいなことも」

柿田「そこにありますよね．ただその，これで全然満足してはいないんですけど．まだまだもっといい指導しないと継続しないんで．やっぱりその今の現状でここ何年かで，本当にここ 2，3 年でこれだけプロのやつ（選手）が出てて，活躍してるけど．これをキープしていくのも難しいっていう」

＊「先ほどのアンドレの話とリンクするようなところも」

柿田「本当にそれが成功している指導者だしっておもうんで．選手なんかもね．その，今はいいけど，来年どうなるか分かんないっておもってやってるやつ（選手）は（期待が）大きいけど，何も感じてないやつ（選手）はおれみたいにクビ（契約満了）になっちゃうし．やっぱそういうのをちょっとでも植えつけていかないと，世の中そんなに甘くないっていうことですよね」

＊「はい．ありがとうございます．それでは最後の質問に移らさせていただきます．柿田さんの指導についてこれからの課題等がありましたら．先ほどからいろいろとお話はしていただいているんですけども．特に今後の課題等ありましたら，教えてください」

柿田「今後の課題というと，全く違った，今ずっと話してきてないところでいったら．その，映像の編集のテクニックだったりっていう．その映像を使った指導アプローチっていうのは．パソコンを通してとか．プレゼンとか．そういうテクニックですよね．作る，物を作る．本当自分，機械オンチで．自分が苦手だからあんまり手を出してない部分で．ここはもう明らかにアカデミーのなかで，X の．遅れをとってるところなんで．そこをちょっとずつレベルアップしていかないとなあ．と思ってますけど．本当苦手」

＊「そのために日々やはりパソコンを勉強されたりっていうこともされてますか」

柿田「勉強まで至らないんですよね．今本当に，自分のその，心の余裕がいっぱいいっぱいで．余裕がなくて，中々そういうところに目を向けれない，余力がないみたいなところがありますけどね．本当はもっとやらなきゃいけないんですけど．アナログですよ．まだ未だにぼくは．ビデオつけて，撮って，何分何秒ってところを覚えといて，そこに『ダー』って早送りして，『はい．みろ』っていって．編集で『パッパッパ』っ

てこう，切って，切って，切って，切ってで，矢印つけたりとか．そういうことができないんでまだ．なかなかそういったところでは，遅れをとってます」
＊「そういったとことは，技術的なところだと思うんですけども．大切だと思われるようになったきっかけとかっていうのはありますか」
柿田「やっぱ時代がそうなってきてるのを感じてるんで．他のコーチもそういうのは，よく勉強して頑張ってるし．でもねえ．そういうのもどのクラブに行ってもそういうふうになってるし．別にね．ないよりは絶対あった方がいいっていう．もう間違いないんで．いろんなね．何ていうの，いろんなその角度から教えれる，角度っていわない．いろんなそういうところで，その映像だったり言葉だったり，さっきいった言葉だったり，何でもそうだけど．要は選手に影響力を与えるという意味では，やっぱり選手が実際に自分のプレーを見て，『おれがいってたことこうだったんだけど，これでわかるだろ』っていうその，何ていうんですか．映像っていうのは本当にそういう効果があるから．一番わかりやすい部分ではありますよね．自分のその足りないものをこう，身に付けさせるには．映像で見せちゃうのが一番早いっていうところがあるんで．やっぱそこの，もっとわかりやすくするテクニックっていうのは身につけないと．指導者としてはちょっと不足なのかなっていうのは，ちょっと感じます．時代です」
＊「時代の流れに順応して」
柿田「時代です」
＊「はい．ありがとうございます．インタビューは以上になります．ご協力ありがとうございました」
柿田「ありがとうございます」

## C．藤井氏のライフストーリー

＊「では早速なんですけども，藤井さんが，指導者を志すきっかけとなったエピソードを教えてください」
藤井「はい．あのプロ選手としてやってて，契約延長できなかったっていうときに，他のチームに移ってサッカーを続けるか，指導者になるかっていうところで，サッカーに関わって仕事をしていきたかったので．っていう．いろんな人に相談してたところ，そのときのコーチから，自分がその指導者になったときに，選手と接したりとか，いろんななかで，もっと早く指導者になって，いろんな，勉強とかできればよかったなっていうことを話されてたので．それを聞いたときに，自分も指導者として，将来的には指導者をやりたいという意志はあったので．今すぐにでも，指導者になっていろいろ勉強もしたいなっていう気持ちになって．で，大学時代の先生に連絡したところ．高橋先生（筆者と共通の知人の）なんですけども．ちょうどS大学の方（会場）で，今のB級になるんですかね．前（以前）はC級．の，ライセンスを取るの（講習会）があるっていうことで．実はそのとき締め切りが結構ぎりぎりで，もう終わってたのかな．まだ間に合うかなっていうことで．『今すぐ来い』（高橋先生）みたいな感じで．そういうタイミングもあって，とんとんと話が進んで．で，またI市に戻って，指導の方に，道に，進んでいったというそういう流れですね」
＊「はい．あの，意志があったというふうに答えていただいたんですけども．その意志というのはいつぐらいからお持ちだったんですかね」
藤井「そうですね．実はあの，中学，高校位から，本当は先生になりたいなっていう気持ちがあって．で，自分の時代っていうのはまだJリーグが，その，高校生時代はなかったので，大学の途中からJリーグができて．将来的にサッカーをずっと続けていくっていうと，実業団でやるか，もしくは先生やりながら，このサッカーに関わっていくかとかっていうのしかなかったので．もちろん，その海外に出てプロになるとかそういうのはあったんですけど．で，選手として何かそこまで志は持ってなくて．で，（サッカーに）長く関われるのはやっぱり指導者かなってのは，何となく頭のなかにはあって」
＊「何となくあったと」
藤井「ええ．それで，そうですね．プロ選手にはなりたいという気持ちはやっぱりあったので．それが，大学からプロ選手になれて．その後また選手を続けていくということもできたんでしょうけど，さっきいったようにそういうタイミングで」
＊「はい．一番の決め手となったのはタイミングとそのコーチの働きかけというようなことが」
藤井「そう，そうですね．はい．そうですね．はい．

先ほどの質問の答えとしては，ちょっと話がずれちゃいましたけど．あの，そういう．サッカーに関わっていきたいっていうのは，もう小学校，あ，中学，高校くらいから思い始めてて．で，あの，将来的には，指導者になりたいなっていうのは何となく」
＊「漠然としたものは」
藤井「ありました」
＊「中学，高校時代の時からあったと．はい．ありがとうございます．それでは次の質問に移らせていただきます．藤井さんが指導で最も大切にしていることを教えてください」
藤井「一言でいうと，パッションですかね．情熱ですかね．やっぱり，サッカーで，今自分見てるチームは，あの，プロ選手になりたいっていう選手ばっかりなので．自分もその，選手がプロになりたいのであれば，それを，助けるというか，そういう立場として選手にプラスになることを，常に伝えると．そこから，伝え方とかいろいろあると思うんですけど，そこは絶対にブレないっていうのは一番大切にしているところです」
＊「はい．その，情熱の伝え方で，実際にされているようなことっていうのがあると思うんですけれども，それにつて教えてください」
藤井「はい．よく観るといことと．選手の精神的な状態とかを見ながら．あとチーム全体として動かないといけないところもあるので．よく観て，その状況によって，叱ったらいいのか，理解させるように伝えたらいいのかとかっていう，その伝え方ですよね．その部分を．あの．何でも熱けりゃ情熱があるっていうわけでもないと思うので．こっちが冷静になって伝えなきゃいけないこともあるでしょうし．ただあくまでその選手をプロにするためにという，熱い気持ちを持って接するという部分で，はい．情熱というのはそういう意味ですね」
＊「熱い気持ちを伝えるときと，冷静に伝えるときがあるというふうにいわれましたが」
藤井「はい」
＊「その，例えば実際にされている，現場で，こう．思い出されるというようなことがあれば教えていただきたいんですけども」
藤井「例えば一つのミスがあったとしても，一生懸命やろうとしてのミスなのか．100%でやってないうえでのミスなのかっていうところでの見極めで．やってなければそれは当然，『やれよ』（藤井）っていうふうに伝えるべきでしょうし．ただ，（一生懸命）やってるうえで質が足りないとか，いうことであれば，『じゃあ，こういうふうにすればいいんだよ』（藤井）って，冷静に伝えてやることも大事でしょうし」
＊「観るというふうにいわれたのは，プレー中，プレー．オン（・ザ・ピッチ）のところ，オフ（・ザ・ピッチ）のところ両方」
藤井「両方ですね．はい」
＊「観る工夫みたいなことはありますか．常に観ていくっていうことですかね」
藤井「そうですね．なるべくこう．でも観方．ちょっと遠目から観たりとか．ちょっと寄って観たりとか．以前よりもやっぱり，近すぎず遠すぎずというか．近づいていろいろこう，話をして聞き出すっていうことも大事だし．でも，逆に，あんまり近づきすぎると，緊張感がなくなったりっていうのもあるので．ある一線を置きながら，コミュニケーションをとるっていうところで」
＊「その辺りは藤井さんが意識的に，選手との距離感を調節されているということですか」
藤井「そうですね．はい」
＊「以前はというふうにいわれたんですけど，以前はそういったことも，だんだん変わってきたということですかね」
藤井「そうですね．はい．自分はあんまり，話するっていうのが得意じゃないので．逆に，離れすぎてるというか．壁があるというと変な話ですけど．自分からあまり，入り込まないで，『選手の気持ちが本当にわかってるのかなあ』（藤井）っていうふうに思った瞬間，瞬間というか，ちょっと時期もあって．もうちょっと，選手一人ひとりに話することで，はい．掴むっていうことも大事かなと思ったことも．あったので．それは観るというよりも聞くということでしょうけど．聞くなかで見えることもあるっていうか．それは自分のなかでありましたね」
＊「（指導）スタイルに変化がでてきたということですか」
藤井「はい」

＊「はい．ありがとうございます．それでは次の質問に移らせていただきます．藤井さんが指導で最もしてはいけないと思っていることを教えてください」
藤井「自分も，指導者も人間なんで．気分があんま乗らなかったりだとか，正直そういうときもあると思うんですけど．でも，そういうのってやっぱり絶対選手に伝わるなっていうのはあって．特にその自分はまだ若いね，世代を観てるんで．なので，どんな状態でも，やっぱり選手は，上手くなりたくて，日々の練習に来ているので，それ（気分の乗らない状態）を，ピッチの上に持ち込んではいけないなっていうのは，はい．注意してることですね．はい」
＊「実際にそういったことをしてしまった経験とかもありますか」
藤井「あります．あります．ありますよ．何となくこう，乗らないなみたいなときに．だから，練習が上手くいかないなって思ったときに，そうですね．はい．逆に練習が上手くいかなかったとか，何となく雰囲気が，ときに，振り返ってみると，『ああ，自分もじゃあ，こういう気持ち（高いモチベーション）でやれてたのかな』（藤井）っていう．ときがやっぱりありまして」
＊「はい．それは選手にも気づきがあったということですか．選手が藤井さんを見て気づかれたというようなことを感じられたましたか」
藤井「いや，多分それは，あの，一応指導歴も長いので，あまり気づかれないようにというか，はい．っていう．でもどうですかね．何となくこう，（選手も）肌で感じてる部分はあったのかもしれないですけど．そういうときは．でも，ずるいいい方かもしれないですけど，指導者がサッカーするわけではないので，本当は，そんな，周りに左右されずに，自分たちで作りあげていって欲しいっていうのは．いうところもあるんですけども．その辺はでも，指導者ですから．上手くコントロールしなければいけないっていうのも，あるでしょうし．はい．そうですね」
＊「選手に，そういうふうに自立というんですかね．してほしいがためにあえてそのような態度をとられているというようなこともあったりするんですかね」
藤井「あの，態度っていうよりも，やり方として，もう完全に任せちゃうとか．そういうことは，ありますね．はい．わざとちょっと離れてっていうことだったり．例えば試合の，試合とか練習とか，最初のアップの段階で，『ああ，今日こいつらあんまり乗ってないな』（藤井）って思うときに，その試合が練習試合とかそんなんだったら，あえていわずにそのままやらせて．『ほら，お前らこうだろ』（藤井）みたいな．だいたいそういうときってやっぱり試合もそうなっちゃうよね．そういうので気づかせるとか．いうこともありますよね」
＊「その辺りは，選手は敏感に感じ取っているようなことはありますか．『監督の様子，今日ちょっと違うな』（選手）とか」
藤井「いや，でもそこまで考えてないんじゃないですかね．はい．でも，それを感じるんだったら，逆にそれでこう『ピッ』と締まるでしょうし．そうですね」
＊「はい」
藤井「でも，基本やっぱり，自分としては選手がそうである以上，自分もそういうスイッチを入れて，『ハイ』ってやるのも気をつけていることですし，逆にそうでないといけないと思うんですけど．でも，理想，理想というか，一番はやっぱり選手たちが作りあげるものなので．先ほどおっしゃった通り自立というところで，周りがどうであれ，自分たちが作りあげていくものっていうのを持ってほしいなっていうふうには思ってますけど」
＊「その辺りの藤井さんが実際にされているというと，やっぱり気持ちの入れ替え，スイッチのオンオフというようなところですかね．ピッチに出たときはしっかり」
藤井「そうですね．あとはやっぱり，プレーの面でも，何ですかね．与えられるだけじゃなくて．自分からということだったり．例えば練習一つとっても，いわれることだけやるんじゃなくて．自分からやっていくとか．今何が足りなくてっていう部分を，チーム練習だけじゃなくて，『あ，こいつ残ってこういう練習やってるな』とか，いう部分で，『こういう練習しろよ』（藤井）っていうふうにいうときもあるし．逆に，『お前この前の試合こういうとこよくなかったね』とか，で，逆に『ここよかったけど，もっと精度上げなきゃねー』（藤井）みたいないい方をして．で，それをまた自分でやってたりとか．で，やってるんだったら，

その方法論も，『まだこういういい方法があるよって』（藤井）伝えてあげたりだとか．それはこっちの方が経験もありますんで．そんな感じですかね．はい」
＊「はい．ありがとうございます．それでは次の質問に移らせていただきます．藤井さんの指導で今までに最も印象に残っている事例を教えてください」
藤井「はい．それ，さっき（の話）と被る部分ありますね．その，自分の，その気持ちってのが選手たちに伝わるのだなーっていうのは．はい．これなんか難しいですよね．いろいろ指導現場を思い起こしたときに．何かこう．一つ一つのトレーニングを作りあげていくうえで．何かそういう感じが頭にあったので．ここ（自由記述アンケート）に書いたのは一応そういうことなんですけど」
＊「はい．何か具体的なこれまでの経験のなかで，『あ，これは．印象に残ってるな』みたいな」
藤井「そうですねー，何かいろんな選手を見て来たんですけど，やっぱりこう，自分が向上したい向上心っていうんですかね．一言で向上心っていっていいのかわかんないですけど，それが強い子っていうのは，やっぱりこう，自分でもやろうとするし，伸びてくんだなあって．やっぱり自分が見てたその期間だけじゃなくて，その後の成長とかも含めて．変わっていったりとか．っていうことは多々あるんで．例えばあの，国際大会に出た三宅選手とか．彼は自分がここ（P 東部）じゃなくてその P の西部っていうところに（在籍して）いたときにいた（関わった）選手なんですけど．これはどこまで話していいのかわかんないですけども．ずーっとこう，小学校時代からいろんな（チームの）セレクションとかを受けて，あまり通らずにきて．で，うち（P）でひっかかって一緒にやったんですけど．で，P のユースにもちょっとあがれなくて（昇格できなくて）．で，高校に進んで．そこからプロになったんで．はい．もちろんそのよさもあって．（スタッフから）認められてた部分は多かったんですけど．逆に足りない部分もあって．でもそれをやっぱり．今もゴールではないと思うんですけども．ああいう形で（日本）代表になってっていうくらいになってる．で，彼を思い出したときに，やっぱりその，さっきの自分のパッション（情熱）っていうこともそうですけど，彼のサッカーに対するその気持ちっていうのはすごかったので．それは自分の選手を見る目というか，一つの基準になってるというか．ところはありますね」
＊「藤井さんの情熱が，彼（三宅選手）にも伝わったっていう」
藤井「いや，そういうことではないですね．別にあの，自分どうこうじゃなくて．それはあの，変な話，他の人でも，例えば（自分と関わっていない）他の場でも，そうであったでしょうし．サッカー大好きで．自分っていうものをやっぱりしっかり持っていて．その，どういう環境であっても，もう好きだからやるっていう．だからそのなかで例えば，おれ自身が伝えたいろんなことも，自分で納得した部分はやっぱ入ってるし．『ちょっとこうじゃないかな』（三宅選手）って部分は入って（受け入れて）ないかもしれないし．だから私だけじゃなくていろんな方々からの影響を受けたとは思うんですけど．でもそれもこう，自分のものにしていったりとか，やってく，その，サッカーに対する熱さっていうか．それはやっぱり常に持ってましたからね．サッカーの虫っていうか．本当に好きで．だから，彼自身が持ち得ていたものだと思います．だから今も，どこに行ってもおんなじでしょうし．日本でやっていようと海外でやっていようと」
＊「そういったものを持っている選手と関われたということは非常に印象に残っていると」
藤井「はい．そうですね」
＊「逆にこう，失敗っていうこと，いい方をすると適切ではないかもしれないですけども，そういったことでの印象に残っている事例っていうことがあれば教えていただきたいんですけども」
藤井「そうですね．上手くいかなかったってことですか」
＊「はい」
藤井「それはでもいっぱいありますけどね．上手くいかないっていうか．例えばその，（周囲から）『サッカーすごい上手だな』っていわれてても，結局教えられてるだけのことしかやってなくて．やっぱり伸び悩んでる選手がいたりだとか．そのときはいいかもしれないけども，結局，上（トップ）まではいけなかったりとかっていうのもあるし．例えばその，ピッチ外の部分が，やっぱりしっかりできてなくて，サッカー選手っていう以前に人としてっていうところですよね．

その辺がやっぱりちゃんとできてなくてっていうとやっぱりピッチ上も乱れてきて．結局サッカーから離れちゃったりとか．そういう選手もしますし」
＊「そういった選手に対して，藤井さんから何かアプローチできたことがあるのかな，というようなことを振り返られたりすることもありますかね」
藤井「そうですね．現在抱えてる選手もいますけど．はい．それはもう，できないからじゃあ（チームに）いらないってこととかじゃなくて．やっぱり自分が接している以上は変えてやりたいってのはあるので．そこはもう厳しく伝えて．サッカーに対する情熱だとか，人間としてしっかりできてなければもうサッカーやらせないとか．はい．『ここが変えるまで（サッカーを）やらせねえよ』（藤井）とか．（という）のもあったり」
＊「ピッチ内でもピッチ外のところでも，やはり厳しく」
藤井「はい．そんなんで，あの，（求める水準のプレーを）やってなくて，もうピッチの外追い出したこともありますし．はい．そうですね」
＊「そういった」
藤井「そうですね．（急に思い出したように）逆に，それを，こう，何ていうんですか．今（求める水準のプレーが）できてないなあと思っても．こう，（それを）許してたら，やっぱり，チーム全体もそういう（ネガティブな）雰囲気になってしまうので．それで，あー，失敗したなと思うことありあますね」
＊「そのようなことを許してしまった経験をお持ちということですか」
藤井「はい」
＊「それはどういったことですかね」
藤井「例えば，練習たらたら（だらしなく）やってたりとかっていう部分で．例えばチームの核となる選手なんかが，そういう感じに．『今日何かいまいち気分乗らないのかなあ』（藤井）とか．でもちょっと週末に大事な試合もあるしみたいな．あんまりこう，このタイミングでいっちゃあ（指摘したら）どうかなっていうので，ちょっとこう，流してやった（流した）ときに，結局やっぱり核となるやつがそうだと，チーム全体もそんな雰囲気になったりして．やっぱり，そこはこう，『ビシッ』とやっといた方がよかったなっていうようなことだったり」
＊「例えば，そういった経験を経て，今現在同じような状況があるとすれば，週末の試合云々ではなく，厳しくやっていこうという」
藤井「そうですね」
＊「長い目でみていくというような」
藤井「そうですね．週末のゲームとかも，それも，どんだけ大事なゲームだっていっても結局ね，長い目で見たら，本当の目的っていったらやっぱり選手を育てるっていうことなので．それはやっぱり正すっていうことの方が，当然選手たちにとっては大事なことなので．だからさっきの話とね，そこはちょっとあの，目先のところにこだわってブレちゃったなっていうところでしょうね」
＊「それも経験のなかで，変化されて来たというようなことですかね」
藤井「はい」
＊「ありがとうございます．それでは次の質問に移らせていただきます．藤井さんの指導はこれまでの選手時代に受けた指導経験の経験，あ，影響を受けていらっしゃるということなんですけども．それはどのような影響で，どのように反映されているかっていうものを項目別に教えていただきたいんですけども，まず『トレーニング計画』ということが，言葉がでてきているんですけども，それについて教えてください」
藤井「選手時代の経験で，試合とトレーニングやって，また改善して試合臨んでっていうのはそういう流れがあるので．試合に持っていくために，じゃあトレーニングでこういうところを修正して，っていう部分もあるし．コンディション的な持って行き方もあるし．それはやっぱり，自分の選手としてやってきた経験のなかで，『ああ，このタイミングでちょっとフィジカルあげておいた方がいいな』とか．そういう部分ですね．はい」
＊「その，計画のスパンでいうとどれくらいのスパンですか」
藤井「それはもう全て」
＊「全てですか」
藤井「年間的なものもそうだし」
＊「年間，月，時期，一週間．それのなかで，紙（自由記述アンケート）にはこう，一つには決められない

といことが，書いていただいてるんですけども．特に印象に残っているトレーニング，感銘を受けたじゃないですけど．『こういう計画はすばらしかったなあ』（藤井）みたいなことがあったりするんですかね」
藤井「そうですね．何か，こう．（現在関わる年代が）中学生だっていうのはあると思うんですけど．トップ，トップのプロは当然週末の試合がかなりハードなんで．中学生もハードなんですけどね．（トップのプロはより）ハードなんで，それ（試合）にもっていくために．例えばその前日なんかちょっと軽く調整してっていうふうな．で，試合終わったところはフィジカルやって．徐々に軽くしていってっていう．シーズン始まるとほとんどもうコンディション調整で，間にその，次やる対戦相手のそのとこ（特徴や戦術等）に合わせて，ちょっとこう戦術確認したりっていう流れが多いんですけど．でも，中学生は，逆にこう，あんまりこう軽い（トレーニング）っていうのは必要ないのかなとか．それは自分の経験のなかでと，あと選手達の状態とか観てて思ったことで．前日でも，普通に，ガンガン（ハードな内容を）やることも結構ありますし．でもそれが続いてきて，『ああちょっと疲れたまってきてるな』（藤井）って思ってたら，軽くしたりってこともあるんですけど．その辺はこう．あ，何ておっしゃいましたっけ．質問」
＊「あの」
藤井「あ，そうそうそう．あの，いろんな影響」
＊「はい．とくにどの年代で（受けられましたか）」
藤井「というのが難しいですよね．何かあの，自分たち．自分が選手でやってきたときを踏まえたうえで，でいろんな年代があって（を経験してきて）．で，逆にそれと今違うなっていうふうな意味で，その経験となってる影響っていうのもあるし」
＊「いいもの悪いものを取り入れて」
藤井「そうですね」
＊「今の現場に最大限，活かせるものを」
藤井「だから，そういう括りで，この年代が，この年代がということではない．トータルとした経験が，こう，今の指導になってきていると思うんで．そういう意味で，（どの年代というふうに）ちょっとわけられないですよね」
＊「はい．では次の『戦術』ということについても教えていただきたいんですけども．こう，どのような戦術があって，それを今の指導に活かされているようなことがあったりしますかね」
藤井「それは，大学時代だったり，もそうだし，（コーチとして）各年代でいろいろな戦い方をやってきて．で，今のその，チームを見てるなかで，『こういうふうに戦おう』（藤井）っていうことだったり．システムなんかもいろいろあったりするので．だから昔やってた，今の自分たちとは違うシステムの相手は『こういうふうにやってくるな』（藤井）っていう，ものだったり．そういうものが経験として持っているので．その今のサッカーを考えるうえでの参考にはなってるかなっていう」
＊「特にこの指導者から受けた戦術に対する考え方っていうのが藤井さんの戦術指導に活かされているとか，反映されているということはあったりしますか」
藤井「それはあんまりないですかね．そうですね．何かあの，自分の時代っていうのは選手の時代っていうのはすごくサッカー自体が変わっていったときで．おれ，小学生のときはまだスイーパー（スウィーパー）[2]システムとかあって．で，ちょうど高校生くらいのときに，ああいうラインコントロールして，コンパクトにしてっていうようなサッカーが日本に入ってきたみたいな感じで．エドワルドっていう．あの，T（実業団）に来たんですけど，多分．とか，あと，加茂周（本名）さんっていう（元）代表の監督．全日空（実業団）かな．そのときは．フリューゲルス（後の J クラブ）．（そこで監督を）やってた方がそれを日本に影響を与えた多分最初だと思うんですよね．で，ちょうどその，おれ地元の門井さんという方が，T でプレーされてた方が，ちょうど，自分が高校生のときに地元に戻ってきて，指導をなさる感じになって．で，それが自分のあの，一番こう，そういった戦術に接する最初の．今までスイーパーでやってたのが，４バックのラインになって．『ああ，こういう方法もあるんだな』（藤井）みたいなところで．で，自分の高校もそのライン（戦術）にしたっていうのは多分その地域では，田舎だったんですけど，初めてで．そのときはこうやたらライン浅くて，オフサイドトラップとかも対応するような感じだったんですけど．それは一つ，今となってはその，スイーパーなんてないじゃないですか．コンパク

トにしてなんて当たり前にいってるんで．それがこう，また大学に進むにつれて，ちょうどイタリアで AC ミランってチームが」
＊「はい」
藤井「強くなってた時期がちょうどバレージ（本名）っていうセンターバックがいて，そのラインコントロールをやっていてみたいな．影響を受けたっていったらそういうところですかね」
＊「常に新しいというか，変化していくものを取り入れようみたいなことが」
藤井「取り入れるかどうかっていうのはまた別なんですけども．『ああ，こういうのがあるんだな』（藤井）っていうところで．いいところは．でも自分は，何ていうんですかね．自分のチームっていうか．今は（携わっているチームが）P なので，そんな，何ていうんですかね．そんな基本 4-4-2（フォーメーション）で，トップチームがやってっていうのは（トップチームのフォーメーションを採用するというのはクラブの方針として）決まってるので．例えば，バルサみたいな感じ（4-3-3）とか．ああいうのはあまりやらないですから．ただ戦術っていってもシステムだけじゃないじゃないですか．その．例えば，そういう，守備の部分でいうと，システムのところだけじゃなくて．その，縦横にコンパクトにしていく部分っていうことであったり．攻撃のところでも，その，スペースを作ってそこ使って攻めるためにどうしてるかっていうようなことは，あるので．そういったものの影響っていうのは，そうですね．何か，『これが』っていうのはあんまりないですけど」
＊「はい．その戦術をしっかり指導されるっていうことは，先ほどいわれた高校時代に受けた指導みたいなのを」
藤井「今あの，何かこう，（質問で）『これは』（調査者）みたいな，印象的なのっておっしゃったので．っていうと，その自分たちがスイーパーシステムやっててそれがライン（ディフェンス）に変わったときっていうのが」
＊「印象に残っているなっていうような」
藤井「そこは多分（当時の）サッカー界的にも全然違うあれ（考え方）なんで（だったので）」
＊「ちょうど変わってきた時期だったというような」
藤井「はい．と思いますよ」
＊「なるほど．はい．ありがとうございます」
＊「それでは次に『指導のありかた』という言葉があるんですけど，それについて教えてください」
藤井「これ，何でしたっけ．何か話したらわかんなくなってきちゃった．ハッハッハ（笑）」
＊「選手時代に受けた」
藤井「自分のあれですよね」
＊「指導経験がどういうふうにご自身の，藤井さんの指導に影響を」
藤井「ああ，自分が受けた指導ということですよね」
＊「はい」
藤井「そうですね．あの，高校時代の先生がサッカーはもちろん経験されてたんですけど．そのあまり，あれこれいわない人で．もう極端にいえば練習出てこないときもあって．出てきても，見てるだけとか．それはあの，何ですかね．情熱がないわけではなくて，『お前たちがやれよ』（高校時代の先生）っていう．主義，主義の人で．ただその，人間としてどうあるべきかっていうのは非常にうるさい人だったので．それも，何ていうのかな．上からこう，叱りつけるのではなくて．もちろん間違ったことをしたときに，怒られたことって多々あったんですけど．人間としてどうしなきゃいけないっていう，道徳的に話をされる人で．その人，その先生からはすごい，そういう部分が，そのサッカー選手としても，大事なんだなっていうのは，影響を受けましたね」
＊「どのようなことを指導されたということが思い出されますかね」
藤井「そうですね．例えば，結局はこう，いろんな行動っていうのは自分が起こしてるもので．例えば一つのことやるにも，周りに人がいて．多分その雰囲気が『やりたくないなあ』（周囲の人間）とか，マイナスな雰囲気だったら，自分もそれに染まってしまうかもしれないけど，結局そのじゃあ，染まってしまった行動っていうのは，最終的には自分がこう，考えてやってる行動だから．でも，そこで，『いや，ダメだぞ』（藤井）っていうような気持ちが自分のなかにあって，自分はやろうと思えばできるわけで，結局その，自分の行動は自分の頭で決めてるっていう．だから『もう疲れてんなあ』とか，『もう，もう嫌だな』とかって

いうのも，それは自分の頭で，『いや．ここはやる』（藤井）っていうように切り替えればできることだし」
＊「はい」
藤井「だから『だりい（だるい）』とかいってそういう中学生，高校生ってそういうの（発言等）多いじゃないですか」
＊「はい．はい」
藤井「『そういうのは，結局お前の頭が決めてることだから，自分の頭でしっかり行動しろ』（高校時代の先生）みたいな，そういうことだったり」
＊「そのような指導を受けて，藤井さん自身もそのようなお話をされることもありますか」
藤井「あります．あります．はい．ありますよ」
＊「ネガティブな働きかけ，働きかけというか，『ネガティブな行動に対してそれを決めているのは自分だよと』『自分の意志次第なんだよ』というようなことを指導されると」
藤井「はい」
＊「実際そういった指導を高校時代に受けられて，自分自身，『変わらないといけないな』と思った瞬間とかっていうのがあったりするんですかね」
藤井「それ聞いたときももちろんあの，『ああなるほどな』（藤井）っていうふうに思いましたしね」
＊「それは個人的に指導を受けられた．（それとも）チームに対して」
藤井「みんなにそういう話をされてて，ですね」
＊「そういった，サッカーと，サッカー以外のところで受けた指導っていうのが特に印象に残っていると」
藤井「そうですね．サッカーの面でも，ありましたね．何かあの，合宿のときに，朝から坂道走るのとかがあって．そんな朝起きて，すぐに．よくあるじゃないですか．山，走りにいってとか．でも自分は，その『まだ朝起きて，ちゃんと血液もちゃんと循環もしてないし．っていうようなときに，そんなの走っても，体，その，有酸素的なものとか，鍛えるとかって，そういう意味ではあんまり意味がないじゃないですか』（藤井）って先生に」
＊「はい．高校時代にそういう（笑）」
藤井「はい．いいます．いいます．そういう先生だったんで．練習も自分たちで．ぼくも休み時間とか，授業中に，今日の練習メニューこうしようって考えたり．（基本的に先生から）練習メニューはいわないので」
＊「はい．自分たちで」
藤井「自分たちでっていう．この前の試合こういうところがあれだったから．多分でも，自分のなかでそういうの（経験）もあって指導者なりたいっていうのは，多分自分のなかでそういうのもあったんでしょうけども．そういう先生だったんで．自分のこう，考えてることとかを，その，押さえてまで，嫌なことを別にやる必要ないし．『いいたいことあれば別にいえばいい』（高校時代の先生）っていう．『そのうえで答えを出していけばいい』（高校時代の先生）みたいな，感じの先生でもあったんで．で，その合宿のときに，『そんなん走っても意味ないじゃないですか』（藤井）っていって」
＊「その合宿の，朝起きて走るっていうのは先生が決められた」
藤井「はい．それは先生が決めて．そこはスケジュール的にそういうふうに組まれてたんで．『意味ないじゃないですか』（藤井）っていったんですけど．『それはお前が走りたくないだけだろ』（高校時代の先生）っていって．でも，そういわれても，自分のなかでは，確かにその，そこに走るっていうこと自体で，その，体力的な効果とかっていうものは，『ないだろうな』（藤井）って．ちょっと不服に思いながらも，決められて，ことだったのでやってはいたんですけども．でも，後で，その，そこの効果として，『嫌だけども，嫌だけど，やらなきゃいけない』っていうその，精神的な面での，その，強さってのを，『求めてたんだ』（高校時代の先生）ってのを，後でわかったんで．『ああ，そういうことだったんだな』（藤井）っていう．それは指導者っていう立場になってからですかね」
＊「当時は不服だけれども，決められたからやるというような」
藤井「ええ．それこそ『だりいな』（藤井）じゃないですけども，そんな気持ちで，一応やってはいましたけども」
＊「でも，そういった知識を高校時代にお持ちだったっていうことはそれなりに，（というより）かなり勉強されていたということですか．その，朝起きて走っても（効果は低い）っていう」
藤井「はい．それはそうですね．はい．選抜チームな

んかに行って（参加して），やった（プレーした）ときに．そういう話も聞いて．そんな朝，走っても，意味はないから」
＊「はい」
藤井「ちゃんと，散歩とかして，食事摂って．体起こしてから，そこからきついフィジカルやるとかっていう」
＊「そのトレーニングは，先生は，当時の先生っていうのは意識的にされてたんですかね．その，『気持ちの部分を鍛えるんだ』（高校時代の先生）っていう（意味で）」
藤井「あ，そうそう．それは後で（先生から）聞きました」
＊「はあ」
藤井「『あのときは，お前はただそれから逃げたかっただけ』（高校時代の先生）そういう理由はあったにしろ」
＊「理由はあったにしろ」
藤井「でもそれを，『嫌だな』（藤井）と思うことを，やるっていうこと自体に，その，それ以上の，その精神的な効果があるだろうっていうことで．それ自分が気づいてから，話したときに，そういうことだったというのはわかりました」
＊「藤井さんが気づかれて，先生に尋ねてみたところ『そういうことだよ』（高校時代の先生）というのを」
藤井「何かのときに，そういう，『昔，お前くってかかったことあったよな』（高校時代の先生）っていう話で（笑）」
＊「そのときは少し衝撃的な感じはありましたか．その話を聞かれたときは」
藤井「そうですね．未だに何か．それだけじゃなくて，自分では覚えてないんですけども，よく反論をしてたらしくて．『お前はいつも，あの，ああでもないこうでもない』（高校時代の先生）っていってきてたみたいな」
＊「はい．ありがとうございます．今のはすごくポジティブな，トータルするとポジティブな影響を反映されているようなことだったと思うんですけど．逆に，こういったことは絶対したくないなあみたいな．受けてきた指導のなかでそういったことはありますかね」
藤井「ああ，そうですね．自分も試合に出れないとかいうときもあって．何かこう，選手によっての，伝え方とか接し方っていうのに，差がやっぱりあると．特にやっぱり試合に出れないメンバーとかっていうのは（一般的に）当然（コーチからの）扱いも祖末になるじゃないですか．それはやっぱり，逆に，その，チャンスの少なくなる選手に対して，『見なきゃいけない』（藤井）っていうのは，感じたことありましたね．見てもらえないっていう．見てもらえないっていうか，そういうことも」
＊「実際に見られてなかったという経験をお持ち」
藤井「経験もあって」
＊「だからこそ，そういった指導はしたくないなってことは」
藤井「やっぱり，チャンスをもらって，それでこう，なかなか（活かせない）っていうのであれば，自分の責任なんで，あれですけど．チャンスがないとか．本当にこう，『見てんのかな（見てもらえているのかな）』（藤井）っていうような．こともあって．それは自分のなかではありますね」
＊「そういったことは意識的に？意識的にというかチャンスは与えるし，いつでも」
藤井「見るっていうのは」
＊「特に試合に出ることが少ない選手っていうのは意識して見てあげているというようなことはされていると」
藤井「そうですね．はい．（試合に）出てる選手なんかはやっぱりモチベーションも高いんで，ほっといても（モチベーション高く）やれるじゃないですか．正直．だからっていうのもありますけどね」
＊「はい．ありがとうございます．それでは次の質問に移らせていただきます．選手時代に受けた指導経験以外で，藤井さんの指導に影響を与えている，サッカーに関する経験について教えていただきたいんですけども．『他の指導者の指導現場』ということが（自由記述アンケートに）あげられているんですけども．それから，まず教えてください」
藤井「それは，いろんなところで，（他チームのトレーニングを）見かけたときに指導されてるところを見たりとか．同じ自分のチームでも，他の人の指導を見て，選手たちへの（言葉の）投げかけだったり．トレーニングそのものだったり．そのオーガナイズも，『あ

あ，こういうところを目的にしてやってんだろうなとか』逆に，『何目的にやってんだ．これ』（藤井）みたいなこともあるし．そう．悪い面も，その，『あ，自分はこういうふうにしちゃいけないな』（藤井）っていう．プラスにしたりとか．っていうことですよね」
＊「学ぶことはあると」
藤井「あります．あります」
＊「それは，現場，今もたれている現場で，そういったことが日常的にある以外にも，実際に他の指導現場を見にいかれたりすることがありますか」
藤井「あります．あります．はい」
＊「それはどういった縁で見に行かれるんですかね．（藤井さん）ご自身から」
藤井「はい．そうですね」
＊「見に行かせてくださいというような形で」
藤井「いや，もう，あの，『プラッ』と．例えば，あの，他のチームが練習しているところを，外から『パッ』て観たりとか．はい．あの，プロの H（J リーグ他クラブ）とかも近くですし．そういうのを『プラッ』と見にいったりとかすることもありますし．はい」
＊「それは同じ指導されている年代以外の指導も参考に」
藤井「はい．そうです．そうです」
＊「それはもう幅広く」
藤井「はい」
＊「例えば小学生年代からプロまで」
藤井「はい．何か，通りかかったときに少年団がやってたりすると，ちょっと観て（など）．あります．あります」
＊「いろんな指導を観て学ぶことが多いということですか」
藤井「はい．そうですね」
＊「何か印象に残っている指導現場とかっていうのがあったりしますか」
藤井「そうですね．あんまりサッカーをやってない子が多いっていう．あの特に少年団とかって．多いですけど．こう，『ズラッ』とこう人が並んでいて．何か，やってる選手はやってて，多分指導者もそこで『ああでもない．こうでもない』ってやって（る）んですけど，待ってる選手もすごい多いとか．それは，あの，よくないかなっていう．結局，その，選手のことを考えてやれてないってことですからね」
＊「そういったことはご自身の指導の，には出したくないなっていうような」
藤井「はい．あります．あります」
＊「ぜひこれは，自分の指導でも，使いたいなというようなことは，例えばありますか」
藤井「そうですね．何か，『パッ』と想い浮かぶようなことがあんまりないですけどね」
＊「先ほどいわれた，たまたま通りかかっても，つい観てしまうといわれたようなことは，もう，指導者になられてからはずっと続けられてきたこと」
藤井「そうですね」
＊「それはやはり，ご自身の指導のためということですか」
藤井「そうですね．はい．時間作ってわざわざ見に行くっていうのは，そんなに頻繁にはやっぱ行けないですけど．はい．たまにやっぱり，こう観ると，新鮮に．どうしてもこう，いつも自分が指導する場だけになると，観えて，観えなくなっちゃう部分もあるので．はい．そうですね．何か，『これ』っていうのはあれですけど．ただ，こう，選手に上手くこう，『パッ』っとこう，伝えてやっているような，トレーニングを見たときに，何ていえばいいのかな．声かけとかかな．的確にやっているなあっていうので．『ああ，すごいいい指導だな』（藤井）とか思ったこともありますしね．そういうのはどれだけ自分に活かしていけるかっていうのはなかなかわからないですけど．なかなか自己評価もできない．そういうのは難しいと思うんで．結局は自分の指導がどうっていうより，選手が育ってるかどうかっていうのなんで．すぐには答えが見えない部分もあるじゃないですか」
＊「はい．長い目で見ると」
藤井「ええ」
＊「ということですよね」
藤井「はい」
＊「でも，そういった姿勢っていうものはやはり常に」
藤井「はい」
＊「持ち続けていたいっていうことは」
藤井「そうですね」
＊「はい．ありがとうございます．それでは，次にですね．『試合観戦』という言葉が（自由記述アンケー

トに）」
藤井「これはでも，テレビで観るにしても，スタジアムとかに観に行くにしても．今サッカーを教えてるんで．それが，いいも悪いも答えですから．サッカーが．そこはやっぱり学ぶべきもの．教材ですよね．一番の」
＊「一番の教材」
藤井「はい」
＊「やはりプロの試合とか．トップチームの試合が多いですか」
藤井「はい．そうですね」
＊「P（トップチーム）の試合というのが」
藤井「そうですね．あと，海外の試合も含めてですけど」
＊「はい．具体的な反映とか，影響．具体的に受けている影響や，指導に反映されていることっていうのはありますか．どういったことがありますかね．試合観戦の中から，指導にっていうのが，というところで」
藤井「そうですね．全般的にはその，まず，（試合の）流れのなかで，どういうふうに，その，流れを作ったり，逆に相手の流れを取り戻したりっていうところで．何が原因で，そういうふうにこう，変わってるのかなっていうものだったり．逆にその，結果となってる，そのゴールにつながってるのと，逆に失点とかって，その展開のところで，その大きな原因は何だったのかなっていう．そういうところですね．だから，それが指導，普段のトレーニングとかではなかなかあれ（再現されにくい）ですけど．実際の試合のときの采配とか，そういう部分が多いですかね．あとはその細かい．ボール（を）取られない上手い選手っていうのはどこにやっぱ（り）ボール置いてるのとか．そういうところは．技術的な指導にもやっぱり，活かされてるし．ですね」
＊「はい．特にこう，『これはヒントとなったなあ』（藤井）みたいなことはあったりしますか．多々あるとは思うんですけれども．これまでの経験のなかで」
藤井「そうですね．あの，ジュニオールが，このまだ，P にいたときに，彼のプレーを実際選手たちにもよくビデオとか編集して見せましたし．やっぱり攻守において，その，守備でいうと，フォワードだけど，そういう切り替えの動きとか．（相手からボールを）『奪うぞ』っていったときには本当自分の，自陣ゴール前まで帰ってきて奪ったりとか．そういうハードワークとかっていう部分もそうですし．（守備時に）チームとして（ボールを）奪うために自分はサイドを切って他のやつ（選手）にこう，縦で取らしたりだとか．彼のプレーっていうのは本当に，参考になるところが多かったですね．攻撃でも点が取れるっていう．このタイミングで動き出してるとか．はい」
＊「その．ポジション問わず，指導されている選手にはぜひ，ジュニオール選手の」
藤井「そうですね」
＊「プレーの質の部分をしっかり勉強してほしいというような」
藤井「はい」
＊「そういった指導をされて，選手が変わったなとかいうようなことは」
藤井「単純にこう，映像を見せて比べると，そういう影響はあったりとか，はい．ありますね．はい．それを継続的なものにしていけるかどうかっていうのは，その自分が，その基準として，持ってて，トレーニングのなかで，ちょっとゆるいって思ったら，『お前，取りにいけ』（藤井）っていうようなことを伝えたりとか．その辺はコントロールしてあげなければいけないと思うんですけど」
＊「一つそういった下部組織（アカデミー）の選手はトップ選手の姿勢を見て影響を受けやすいっていうようなことはありますかね」
藤井「ありますね．やっぱり．はい」
＊「トップの選手があれだけ（ハードワークを）やってるんだから，自分たちは（も）やらなきゃいけないだろうみたいなことは」
藤井「はい」
＊「同じユニフォームを着て」
藤井「ありますよ．はい．中学生とかになると，いろんな知恵も働くんで．その，自分のトップ以外の選手でも，なんか海外とかも含めて，『こういう選手になりたいな』（選手）とかいっぱいでてきますけど．小学生とかもう単純なんで．あの P でやってたら，もう P の選手ばっかり．多いですよね．でも，自分も，自己評価表みたいなのを（選手に）書かせるときに，その，毎月のところで，自分の目標となる選手っていうか，こういう選手像になりたいっていうようなものは

必ずやっぱり持つようにはさし（させ）てて．それが具体的に『誰々選手』（選手）とかでもいいし．『何となくこういう感じの選手になりたい』（選手）とかでもいいし．で，そこにこう，到達するために，今何をすべきかっていう，チームでの課題と．その，自分個人．で，その選手になるためにじゃあ，例えばメッシだったらドリブル．じゃあドリブルをどういう風にとかで，個人のトレーニングのところであったりというのがあって．だから，目標とする選手像っていうのは常に持ってないと．どこに向かうのかっていう．何となくサッカーをしちゃうところもあると思うので．そうですね」

＊「そこはやはり，試合を見て気づかれたことっていうのを指導されている選手にも，知ってほしいなっていうようなこと」

藤井「はい．あります．あります．それは多々ありますね．この前の，あの，リーグ戦で．この前っていってもだいぶ前になるけど，U（J クラブ）に負けたときに，ドミンゲス選手をフリーにしてて．で，やられた（失点した）っていうのがあって．それも単純なポジショニングが悪かったりっていう．じゃあちょうどうち（P 東部ジュニアユース）もそういう課題があったり．そうやってるとき（トレーニング時）に『前あっただろ』（藤井）みたいに」

＊「いい面だけでなく，失敗例も見て」

藤井「そうですね」

＊「気をつけような，みたいな働きかけもされるということですか．はい．はい．ありがとうございます」

＊「それでは次の（自由記述アンケートの）「書籍」っていうことについて教えていただきたいんですけども」

藤井「これは単純に，その，サッカーの本でもそうだし．それ以外のところでも．これ，指導者っていうよりも自分のこう，人としてっていうか．部分のこう，勉強のためにというか」

＊「特に印象に残っている書籍っていうものが，指導に影響を与えている書籍っていうのがあれば教えていただきたいんですけども」

藤井「そうですね．そうですね．印象に残っている本ですか．っていうほど本読んでねえのかな．ってそんなわけじゃないですよ．そんなわけじゃないですけど」

＊「具体的な本でなくても，こういう考え方は（といったものがあれば）」

藤井「最近，あの．最近というかあれですね．昔見てた Number（スポーツ専門誌）とか．で，何かこう，を見返してってっていうのはありますね．何か．結構いい言葉があったりとか．何だっけな．ちょっと，あの具体的に思いだせないですけど」

＊「そういった言葉を読み直してみたときに」

藤井「してみて」

＊「そういったことを指導に」

藤井「ええ」

＊「活かされるときっていうのはどういうふうに活かされるんですかね」

藤井「あの．『ああ，いいな』（藤井）って思ったことはノートに書いてるんですけど．で，何かちょっと，例えば指導のところで，チームとして，例えば，例えばですよ．例えば，大事な試合のときに選手にどういう言葉をかけようとか．いうときにそういうのをこう『パー』っと見て，『アッ』ていうのだったり」

＊「書き溜めたノートみたいなのをお持ちというこうと」

藤井「はい．たまにこう見てて．ただ，逆にその，別に何かあるってときじゃなくても，そういうノートを見返したときに，『ああこういうこともあったな』（藤井）みたいな．だったり．そうですね．本ですか．何かこう，これが影響あったっていうのはなかなか思い浮かばないですけどね」

＊「サッカーに限らずさまざまな書籍っていうのはやはり，藤井さんの，人間的なところにかなり関係してるようなこともあったりしますか」

藤井「そうですね．でも，どうしてもやっぱり，サッカーに関係したものを読むことが多いですけどね」

＊「はい．それは指導に活かそうとかそういうことではなくサッカーに（関連のある書籍を）」

藤井「ああでも，結局自分のあの，その人生そのものが指導者っていうか．もう生活そのものも，やっぱりそこから離れられないので．結局は指導に活かすっていうことになりますね．はい」

＊「はい．特に何がっていうのが言葉にできることではないけども，活かされているのは間違いないと」

藤井「もう，間違いないですね．はい」

＊「はい．ありがとうございます．それでは最後の質問に移らせていただきます」
藤井「はい」
＊「藤井さんの指導について，これからの課題等がありましたら教えてください」
藤井「そうですね．これが最高の指導だとかそういうものは別にないと思うので．今自分がやってる指導も，もっともっとこう，人を相手にしているので．同じようなことはあるにしても同じことってのは多分ないでしょうし．そういう意味でこう，いろんな対応力とか，（というような）ことも含めて，常にやっぱり，勉強していかなきゃいけないでしょうからね．ただそこを絶やさずに，もうやるというか．そこは一つ大きな課題かな」
＊「そのように感じられたのは何かエピソードがあったりしますか」
藤井「いや，でも，そうですね．単純にその自分の持ってる（携わっている）チームが勝ったり負けたり．いろいろありますけども．当然こう，上手くいかなかったときに，「ああ，まだまだやっぱり足りないなあ」（藤井）と思ったり」
＊「上手くいかないというのはどういったことですかね」
藤井「単純にチームとして結果がでなかったり．こう，思ってるより選手が力（を）発揮できなかったりっていうところですかね」
＊「そういったところは，選手に力がなかったっていうよりも，指導に力が」
藤井「そうですね」
＊「なかったっていうふうに考えられる」
藤井「そうですね．もちろんそのやる（プレーする）のは，やってるのは選手なので，選手の状態とかいろいろありますけど．でもそれを含めて，やっぱり自分が一緒にやってるっていうのがあるので．何かしらやっぱり自分の方にも原因とかいろいろあるとは思いますね．はい」
＊「そういった課題に対して，改善策とか日頃取り組まれているようなことがあれば教えていただきたいんですけども」
藤井「まずはやっぱり，一番は自分が持って（関わって），一緒にやってる選手が育っていくためにどうするかっていうのを普段のトレーニングとか，それ以外のところから，100%やるっていうのが一番だと思ってますね．はい．で，それプラス，その，いったように，本を読むとか，サッカーの試合を観るっていうのを，具体的に何ていうか数字で，例えば1週間に何，1日1試合観るとかそういうふうに決めてはいないんですけど．そこはこう，幅があって．何か出会いがあったときに，量が多くなるときもあるし．でもそれはトータルで見て，そういった時間っていうのはこう，作るようにはしてます．はい」
＊「こう，意識的にそういった時間を」
藤井「はい」
＊「はい．ありがとうございます．その他に何かございますか．取り組まれていること」
藤井「課題，課題ですか」
＊「はい」
藤井「そうですね．具体的にはやっぱり，今持って（関わって）いるチームを，あの，その選手1人1人を，上（トップチーム）につなげられるような，選手を育てるっていうことと，チームを強くするっていう」
＊「上にというのはユース（U-18）チームに昇格すると」
藤井「だけじゃないです．まずは選手たちもそこを希望しているんで，そこが第一ですけども．みんながみんが上がれるわけではないので，そうじゃなくても，さっきいった三宅みたいに，どこいってもやっていけるような選手を育てていくっていう」
＊「そういった意味ではそういう三宅選手のような特殊な事例といったらあれですけれど．いろいろな選手の目標に」
藤井「そうですね．はい」
＊「いい意味で，非常にポジティブなことに繋がるのかなというような印象は，今お話を聞いていて非常に受けました」
藤井「そうですね．いろいろな可能性はあると思うので．別にユース上がったからって（に昇格したからといって）それがゴールっていうわけでもないですし」
＊「はい．ありがとうございます．質問は以上になります．ご協力ありがとうございました」

## D．加藤氏のライフストーリー

＊「では，よろしくお願いいたします」

加藤「お願いします」

＊「それでは，早速なんですけれども，加藤さんが指導者を志すきっかけとなったエピソードを教えてください」

加藤「エピソード」

＊「はい」

加藤「そうですね．一番はそのサッカーの素晴らしさ，よさっていうのを伝えたいっていうことがありました．その選手をやってるときに，感じたっていうか，ここまでサッカーに夢中になれる，なれたっていうことに，のよさっていうものをより多くの人に知ってもらいたいですし．プロを経験したっていうことで，逆にプロ，目指す選手たちに，その『プロっていうものはこういうもんだよ』（加藤）とか，サッカーでこういうことをやっていったらいいんじゃないとかっていうことを，伝えていけたらなっていうところで，指導者を志したいと」

＊「それは，いつぐらいのときに考えられましたか」

加藤「それはもうプロで，チームでクビになったときに，次のステップというか．ぼくの場合は，もうそのクラブで（選手生活を）終わるっていう決意で入っていったので．で，もうそこの，そこでもう，プロの選手として（先）はないっていうことになった時点で，別の人生を歩もうと思ったっていうこと」

＊「それまで，プレーをしながら『ゆくゆくは指導者に』というようなことではなく，その次の方向性を決めるときに，『指導者かな』（加藤）というようなことですか」

加藤「そうですね．でも，やってるときも，引退したらっていうのは考えていたとは思いますね．その高校の先生とか，教員っていう選択肢も含めて，そういう指導者っていうのは考えてた，は考えてましたね」

＊「それを考えるきっかけみたいなことは，どういったことがありますか」

加藤「んー，指導者になろう（という）」

＊「はい．その指導者，引退したら教員とか指導者とかっていうのをいつぐらいから．サッカーを始めたときから考えられたとかいうことですか」

加藤「そうですね．サッカーやってるときは，サッカーを教えるとかそういうことは．何ていったらいいんすかね．何か特別考えてはいなかったですけど．ただ段々こう，あまり普通経験ができないところのステージまで行けるようになったので．何かそれは『伝えていきたいな』（加藤）っていうのは，芽生えてきたっていうんですかね」

＊「それは選手として現役で活躍されているときから，「こういったことは伝えたいな」（加藤）ということがあったということですか」

加藤「そうですね．はい」

＊「最初に素晴らしさやよさっていうことをいわれたと思うんですけど，それは具体的にはどういったところがあるとお考えですか」

加藤「そうですね．ぼくは一番はその仲間だとは思うんですけど．そのサッカーに関わる，今もこうやって関係してるのはサッカーが結びづけてくれた縁ですし．そういう人との関わりっていうものが，やっぱりサッカーを通して，すごく感じたし．そのいろんな指導者の方とも，そういうものを感じた，感じたっていうものもありますし．だからサッカーってすごいなっていうそういう意味で今，特に，その人間関係とか，いろんなものが希薄になってたりとか．繋がりみたいなものいわれてるなかで，特にその技術，自分は上手い選手でもないし，特に身体的に特徴があるとかそういうことでもない，小柄ななんでもない選手だったんで．だからよりそういうものを感じて，サッカーに，何かすごい感謝してるというか，そういう何か質問の答えとかなってないですけど」

＊「いいえ」

加藤「何かそういうものを，伝えていけたらなっていうのが．はい」

＊「その辺りは，指導者になってこう積み上げられてきてそういうふうに考えられてきたという意味ですか」

加藤「いや，サッカー，選手としてやってるときですよね．何か，選手としてやってるときにとりあえずプロまで行けたっていうのもあるんで．それも自分の力では成し得なかったことですし．いろんな人に応援されたりとか，支えられてやれてきたっていうのが，実感してたんで，だからそういったもの．で，プロになれば，プロになれば，っていうことでもないですけど，

より多くのサポーターの人がいたりとか，運営に関わったりとか．チームにそういう方も，の存在とかも感じられるようになって．何かそういう人との繋がりっていうのを，しっかりと伝えていきたいな，っていう感じですかね」
＊「はい．ありがとうございます．それでは次の質問に移らせていただきます．加藤さんが，指導で最も大切にしていることを教えてください」
加藤「心が体を動かしてるとぼくは思ってるので．それも大学時代に学んだことなんですけど．だからさっきの話じゃないですけど，やっぱ人との関わりっていうものが，サッカーにおいて大事になってくるので．そういうなかでやっぱりその，『選手の心，気持ち，内面から出てくるものっていうのを常にこう刺激できる指導をしたいな』（加藤）っていう，やらされてるとかではなくて，自分から何かこう行動を起こせるような，気づけるような指導を一番大切にしていることですかね」
＊「具体的にとられてる方策とかということはありますか．こういうアプローチをしているとか」
加藤「そうですね．何気ない会話を交わすようにするとか．1日何にも会話をしない日はあまりないようにはしてるんですけど．そうやって選手を観察していくっていうんですかね．だからその，『観てるよ』（加藤）っていう，ものを感じてもらうっていうんですかね．何か，だから常に．そっかな．関わるようにしていますね．関わるっていうんですかね，何か」
＊「コミュニケーションをとるようにされてる」
加藤「そうですね．挨拶，一言何かこういじってみるとか．何かそうやってちょっと何か反応を見て，おかしいなっていうときは，話したりずっと様子を見たりとか」
＊「ピッチの中でも外でも，ということですか」
加藤「そうですね．はい．特にピッチの外で，のことが多いですかね．はい」
＊「そのようにされる，そのような方策をとられている理由みたいなことは何か」
加藤「やっぱり，ここ（自由記述アンケート）にも書いたんですけど，選手の立場に立ってみると．そのやっぱ声かけられる，『自分がそうだったらいいな，嬉しいだろうな』（加藤）って，それに対して，何か心が満たされるじゃないですけど．何か落ち込んでるときに何気ない一言で『パッ』と何か自分の考えてることが，ちょっと小さいことだったなとか，思ったこともあったんで．何かそういう何かのきっかけとか選手たちが前向きになってもらえるきっかけとかになればいいかなっていうような」
＊「そういった選手からのサインを見逃さないように日ごろから心がけられているということですか」
加藤「そうですね．そこはもうできるだけ見落とさないように．ただ，あえてこっちは気づいてるけど，声かけないときとか，それはその，何ていうんですかね．そこのやり取りはありますけど，あえて（声を）かけないとか．でも，要は彼らがどういう姿勢でサッカーと向き合ってるかっていうのを常にこう観てるっていう感じですかね」
＊「はい．ありがとうございます．では，逆にですね，加藤さんが指導で最もしてはいけないと思っていることを教えてください」
加藤「してはいけないことは，やっぱりそのサッカー自体を嫌いにさせるっていうか．『もうやりたくない』（選手）っていうふうに思わせてはいけないなっていうのは感じてます．だから，こっちがいろんなことを注意するいろんなことをいうっていうことにも，愛情，愛情をもってというか，『お前がよくなるためにあえていうよ』（加藤）とか，何かそういう気持ちで接するようにはしてます．頭ごなしにっていうことではなくて．『君たちの可能性を引き出すためにいってるぞ』（加藤）っていうようなこととか．はい」
＊「嫌いにさせてはいけないっていうのは，こう何か今までの経験のなかで加藤さんが嫌いになったとか，選手に嫌いにさせてしまったような経験があるとかそういったことはありますか」
加藤「ぼくではないですけど，ぼくの周りで，そういう選手であったり．を見てきたっていうか．そういう何ていうんですかね．そういう嫌い，『もういいや』（周囲の選手）っていうような，状況を見てきたからかもしれないですね．自分がっていうことよりも，でもそれに対して，逆になんでそういうふうに嫌いになっちゃうのかなっていうことも思ってはいましたけど」
＊「はい」

加藤「何か『それを見返してやるくらい頑張れよ』（加藤）みたいなのもありましたけどね．でも」
＊「指導される選手に対してはそういうふうにいうのではなくて，嫌いにならないように何かコーディネートしたりというような，そういったことですか」
加藤「そうですね．『特別これを』（加藤）っていうことはないですけど，さっきもいったように常にこう，観て，変化を感じる．『お前こうだったな』とか，『今こうだな』とか．『もっとこうすればこうなんじゃねえか』（加藤）とか．そういうことは気をつけてますね」
＊「（選手がサッカーを）嫌いになりそうだな，とかそういうようなタイミングがあったりするんですか．選手を指導されてるなかで『何か満足してないな』（加藤）とか」
加藤「そうですね．サッカーやってれば，誰でもそういうのは多分あるとは思うんですけど．でもそういう気持ちで，思ってサッカーをやってもらいたくないっていうのもあるんで．もともと好きだからやってるとは思うんで．そのサッカーを長く続けてもらいたい．そしてまたよさを伝えてもらいたいっていうのもあるんで」
＊「指導してる選手にもサッカーのよさを，下の世代に，伝えて．そのなかでやはり最もしてはいけないっていうのは，（サッカーを）嫌いにさせることかなというような」
加藤「そうですね．サッカーから離れていくというか．はい」
＊「はい．ありがとうございます．それでは次の質問に移らせていただきます．加藤さんの指導で今までにもっとも印象に残っている事例を教えてください」
加藤「これは最も印象に残っていることで，『パッ』と思い浮かんだことなんですけど，女子をやってる（指導している）ときに．原因はお母さんの病気のことだったんですけども．それで『サッカーをやってる場合じゃない』っていう自分の判断のもと，1年間ぐらい来なかった選手がいて．もう周りの仲間とかもいろいろ心配して，『何で来ないのか』（周囲の選手）みたいな．で，連絡は取り，取りつつも．電話にも出なかったり．出たり出なかったりみたいな．ただ，やっぱりサッカーは続けて欲しいと思うし．その子がサッカーとか何かで活き活きしている姿が，またお母さんに勇気づけるじゃないですけど，元気づける．『お母さんも喜ぶのかな」（スタッフ）っていうのもあって．で，その子の，仲間というか友だち伝いに『ちょっと連絡してやれ』（加藤）とかっていう話もしながら．で，やっと1年後に来るようになって．やっぱり1年間やってないんで，体力的なものとか，いろんなものがあるけど，来たときには，何か，『続ける覚悟はあるか』（加藤）みたいな話もして．で，戻ってきて，1年間やったんですけど．やって戻ってきて，最後に，お母さんも卒業するときには来てくれて．いや，ほんとにこうやって，戻って．娘さんが，戻ってくれて，『娘が戻ったのも，何か戻ってくれてよかったです』（選手の母）っていう話もしてくれたのが，何かすごい印象的で．そのお母さんの病気は治るものではないんですけど，お母さんも何か，そういう悪くなっていく病気がちょっとこう進度が遅くなってたりとか．やっぱりそういったものか．何か，今すごい印象に残ってたというか．何をしたということではないんですけど．だから，何ていっていいかわかんないですけど．その子が，活き活きと生きがいをもってというか．活き活きする一つの材料というか．サッカーっていうのが．だからそこまで，そういう，『サッカーってそういう力もあるんだな』（加藤）っていうのも思ってたし．それをほんとに実感できたこと．で，こっちも，『辞めちゃったか』（スタッフ）っていう．諦めちゃうんじゃなく．やっぱ諦めずに何かこう，思い続けるとそういういい結果になっていくのかな．っていう．はい．ぼく自身もすごい『そういう経験はさせてもらって勉強になったかな．勉強になったな』（加藤）っていう」
＊「どういうアプローチが仕方がそういう結果につながったとお考えですか」
加藤「そうですね．他のスタッフというか，は，もう『別にそこまで』（スタッフ）っていうか，な感じだったんで．でもそれは何かこう，ぼくは納得ができなかったんで．やり続けて．『よかったかな』（加藤）っていう感じかな」
＊「はい．ありがとうございます．今はすごくこういいお話というような印象だったんですけど．印象に残っていることで．こうあまり，お話しにくいかと思うんですけど，あんまり振り返りたくないようなもので

印象に残っている事例っていうものがあれば教えていただきたいんですけども」
加藤「あー，それも女子か．女子のときですけど．その指導者，指導歴っていっても．普及のところも，一応（事前アンケートの）指導歴みたいなのに入れてしまったんですけど，それが 4 年ぐらいあって．その後に育成というかそういう競技的な指導がやれたのが，女子．最初が女子だったので．最も残っている，1 年目のときに．その，全国大会に行けなかったっていうのは，すごいぼくのなかでは指導者，育成の指導者として，よくない，印象に残っている事例ですかね」
＊「具体的にどういった話がありましたか」
加藤「要は関東大会で負けて，全国大会に U-15 の全国大会に行けなかった（出場権を逃した）っていうことがあって．で，その戦ってるときに，自分自身も自分自身が，何か選手を信じきれなかったっていうのが，自分のなかであって．『これじゃ勝てねーだろう』（加藤）っていうような．何かそういうチーム状態のまま，大会に臨んだみたいな」
＊「それは，他のチームと比較して戦力がというようなことですか．それとも，（自）チームの」
加藤「もうチームの，何ていうんですかね．そのサッカーを．『よくそんなんでサッカーできるね』（加藤）みたいな．何か一つになってないっていうのが．一つにさせられなかったっていうのもあるんですけど」
＊「具体的にどういうチーム状態だったんですかね」
加藤「何ていうんだろうな．『バラバラ』女の子だからっていうわけではないんですけど」
＊「仲が悪いとかそういうことですか．それも含めて」
加藤「いや，表面上は仲いいんですよ．ただ，試合に負けたり，何か上手くいかないときに，誰かのせいにしたりとか．そういうのを平気で口にしたりする．『何であの子使ってるの』（選手）とか．『いやいやいや』（加藤）っていう．何か，そういうの平気で何かいっちゃう選手たちで．そういうふうに（スタッフが）させてしまってたっていうのがあったんですよね」
＊「結果にもつながったと」
加藤「はい．だから，こういうのじゃやっぱだめなんだなっていう」
＊「『何かもっとできることがあったのかのかな』（加藤）というようなことを．今振り返ると，思われることとありますか」
加藤「そうですね．それはもう次の年からもう徹底するようにはしたんですけど．やっぱりこっちが，その目標を立てたことに対して妥協しないっていうか．もうやり抜く．いくら選手の不満が出てきたりとかなんかしても，『この目標に向かっては絶対曲げない』（加藤）っていうものを指導者として，何か持ってないと，やれないんだなっていうのは感じました」
＊「先ほど，「選手を信じれなかった」（加藤）っていわれたのは，どういったことになるんですかね」
加藤「選手をよく観れてなかった．っていうことですかね．自分のなかで．組み合わせも含めて，選手たちを理解しきれてなかったっていうそれはその選手たちの不満とかそういうことをいろいろ聞きすぎてしまって．どっちかといったら．ぼくが，もう，『ブレてた』（加藤）というか．そういう状況で，何かもう選手たちと．選手を信じれない，信じられない」
＊「『判断が非常に難しかった』（加藤）っていうのもありますかね」
加藤「いや，もう，女子って怖いなっていう．ハハハハハハ（笑）．女って怖いな，っていう」
＊「その，それ以降に，そこを改善された具体的な工夫みたいなことはありますか」
加藤「具体的な工夫としては．その何か不平不満が出たときに．いや，もう，その．目標を明確化したっていうか」
＊「はい．1 年目は目標を明確にされてなかったということですか」
加藤「そうですね．あったんですけど．その，その目標に対しての取り組みに，『ブレがあった』っていう．『ああ．選手がこういうんだから』（加藤）こう」
＊「柔軟に対応しすぎてしまったというような意味ですかね」
加藤「そんな．いいいい方だと．柔軟にいろんなことを聞き，聞い，聞きすぎちゃったっていう．で，こっちの，こっちが示すべきものが『ブレてた』（加藤）っていう」
＊「そういう方法をとられたのは理由があるんですかね．いろんなものを聞こうというような姿勢で臨まれたということに関しては」
加藤「それは特に何か意識したことはないけど．でも，

やっぱり自分にその指導者としてもなかったんで．自信がなかったっていうのは．あるかと思いますね」
＊「自信がないから，選手のいうと通りに，選手が要望することを上手くやってみよう，みたいな」
加藤「『あ，そういうふうに感じてるんだな．じゃもう少しこうしてみようかな』（加藤）とかっていうような感じで．選手がより何か．『選手の，（選手）から不満が出ないように』（加藤）みたいな．それが目的になっちゃった．みたいな指導が」
＊「はい．なるほど．そうなると，やはりまとまりとして難しいものがあると」
加藤「はい．だなっていう」
＊「その経験から，その後変わられたことっていうのはあるということですね」
加藤「そうですね．もう，その目的をぼくがブレないように．もう『全国で優勝するっていう目的，目標に対して，ブレない』（加藤）っていうことを，次の年に徹底して．何をいわれようが「このためにこれをやってる」っていうふうにこっちももう，断固として．ブレずにやったんで．一応優勝はしたんですけど」
＊「誰かからアドバイスを受けられてそういうことなされたとかそういうこともあるんですか．自分のなかで気づいてやってみようというようなことですか」
加藤「そうですね．周りのスタッフ経験のあるスタッフの方はいましたけど．その方に特に．屈辱的なこともいわれて．『やっぱいけなかったか』（スタッフ）みたいな．何か．『やっぱ無理だよね』（スタッフ）みたいな（ネガティブな）ことを，いってくれたので」
＊「はい．そこら辺に対する反骨心みたいなものありますか」
加藤「そうですねもう．そこですねもう．『くっそお』（加藤）みたいな．『ぜってい（絶対）優勝してやる』（加藤）みたいな』
＊「取り組みが甘かったというような感じではないようにお聞きしてて印象を受けるんですけど」
加藤「ああ」
＊「そういったことではないんですよね」
加藤「でも，甘かったと思います」
＊「1年目の方は」
加藤「その何ていうんですかね．やり続けるとか．根気強く２年目の方がやれたみたいな感じはありますね．何ていうんだろうな」
＊「『ブレない』（加藤）ということが一番大きかったということですね」
加藤「そう．もうブレなかった．そう．ブレ，ブレなかった．『もう，どんなことしてでも優勝してやる．そんで，その屈辱的な言葉をいわせた（いわれた）あの人（スタッフ）をちゃんとこう，認めさせてやる』（加藤）みたいな」
＊「いわれた人を，（結果を出すことによって）認めさせてやるみたいな」
加藤「そう．そうです．そうです」
＊「ありがとうございます．それでは，次の質問に移らせていただきます．（事前アンケートによると，）加藤さんの指導が選手時代に受けた指導の影響を受けているということなんですけども．その，それがどのような影響で，どのように反映されているかっていうことを教えてください」
加藤「そうですね．まずは高校時代の，顧問の先生から影響を受けたと．で，それっていうのは，何かこういわれたというよりも，一緒にこう，体を動かしていろんなことを見せてくれた．っていうのが，すごいぼくのなかでは今も，今の自分の指導に影響してるなっていう．やっぱこう，見せることによって，納得，選手として納得するっていうのもありますし．それを見せられるっていうのが，ある意味『すごいな』（加藤）っていうのがあったので．その人のサッカーに対する．体育の先生ではないんで．数学の先生だったんですけど，でもサッカーの練習は必ず出てきてたし．で，そのプロに，プロを意識させてくれたのもその人なので．だからそういう．で，プロになるための，なるためには，ここの，『S（大学）に行った方がいい』（顧問の先生）とか．そういう何ていうんですかね．プロへの道を．こう，作ってくれた人というか．はい．そういう」
＊「サッカーは専門の方だったんですか」
加藤「サッカー専門」
＊「続けてこられた方なんですか」
加藤「あっ，そうですね．で，その当時も，Y（県）の教員チームでプレーをされてて．で国体にも何，何回も出てて．優勝も経験されてるっていう方だったんで」
＊「当時のその指導者の年齢はいくつぐらいの方です

か」
加藤「今から，今から 20 年ぐらい前か．というと 30，2，3（歳）ぐらいですかね．32，3，4（歳）．はい」
＊「その当時受けた指導が実際に加藤さんが，今，されている指導にどういうふうに影響されていますか」
加藤「だからできるだけ一緒に，何かこう選手たちとプレー，プレーできるであれば見せていこうとか．あとはそのサッカーに対して，真直ぐ．サッカーに対して真直ぐっていう表現がちょっと曖昧ですけど．ほんとにサッカー好きっていうのがにじみ出ているっていうところですかね．何か」
＊「どういったところからそのようなことを感じられましたか」
加藤「一緒にボール蹴ってて．の表情だったり，あとは」
＊「肌で感じる」
加藤「そうですね．はい．こう様子っていうんですかね．あとはそのサッカーを，指導している姿とか．あと，いろんな先輩だとか何かの不満とかにも向き合ってるというか．逃げずに．だからやっぱり試合に出れない選手も先輩でもいたし．そういう選手，OB とかにも対しても結構毅然としてたように感じて．感じたので．はい．何かそういったものって，今も．ぼくも何かこう間違った，何か曲がったことに対しては，何を思われようが『ビシッ』という．いったりとかも選手にもするんで．そこは」
＊「というと，立ち振る舞いの部分なんかも非常に」
加藤「そうですね，はい．はい」
＊「具体的に．具体的なエピソードがあれば教えていただきたいんですけれども」
加藤「具体的には何だろうな．何ですかね．具体的に，全体的に，その人の人柄なのかもしれないですけど」
＊「例えばその，事例がこういうこと．『不平不満があるときにこういう対応をされてた』とか．『こういうプレー中の，こういったところに情熱を感じた』とか．そういうことがあれば教えていただきたいんですけども」
加藤「何だろうな．何だろ．具体的に．何だろうな．でも，短い時間でも，グラウンドには来てたのかな．とか．そういう」
＊「どんなに忙しくてもグラウンドに顔を出すとか」
加藤「何か，はい．で練習終わって．遅くまで何かミニゲームをやってたりするんですけど．何かそういうのにも結構いたりとかしてて．何かうまく説明できないですけど．何か共に過ごす時間っていうのが長かったかなっていう」
＊「その辺りは加藤さんも意識されてますか」
加藤「そうですね．今クラブチームだと，大体練習前後合わせて（選手の滞在は）4，5 時間っていう時間なので．（選手がグランドに）来る．来てから帰るまでは，常にいますし．先に帰るとか，後から来るっていうことは，なるべくしないように．っていうか絶対しないようにはして」
＊「その辺りは非常に参考にされてるということですか」
加藤「そうですね．やっぱり，来たときの表情であったり．来たときの，何か雰囲気っていうか．選手の様子っていうのはやっぱり見たいですし．終わった後のまた表情とか雰囲気とかも気になるので」
＊「先ほどもお話しされてたように，観てあげるというようなことが非常に意識されてるのかなという印象を受けるんですけど．その辺りはやはり意識されていますか」
加藤「あー．そうですね」
＊「選手時代に，監督や指導者の方に観てもらっているな．ということは実感されていましたか」
加藤「そうですね．それは感じましたね」
＊「逆にこういったことは，自分はしたくないなというような指導とかっていうのはありましたか．その高校時代の指導者に限らず自分はこういう指導はしたくないなっていうのは，受けてきた指導のなかで」
加藤「受けてきた指導のなかで．でもそういうことは特にないですかね．『嫌だな』（加藤）って思うことは特になかったですね．基本的に指導してくれるっていうことは，その人が自分に興味と関心があって，よりよくなってもらいたいから指導してくれるわけで．いってくれることがどんなことであっても，ぼくは何か，ありがたいっていう気持ちっていうんですかね」
＊「じゃそういう気持ちというようなことは」
加藤「そうですね．それが，自分の本意に，でなかったとしても．そこから気づくこともあったりとかしたんで．特別何か指導されてよくなかったっていうのは，

ぼくはないですかね」
＊「そういった辺り，恵まれてたなっていうような印象は感じられますか，自分でも．ご自身でも」
加藤「そうですね．何もいわれないことのほうが，寂しいことだっていうふうなことも，感じてたんで」
＊「それは選手時代のときですか」
加藤「そうですね」
＊「そういった経験がありますか，何もいわれなくて寂しかった．っていうのは．それはプロのときでもいつでもいいんですけども」
加藤「そうですね．プロになると，そういうのはありますね．何がよくて何が悪いかなんていうのは誰もいってくれないですし．ただ，もう結果として，試合に出れるメンバーに入る，入らないが，それになってくる．評価になるんで．そういうのはプロになってから，感じましたよね」
＊「その辺りの経験も指導のなかで活きてますか」
加藤「そうですね．だから，いい過ぎてもいけないし，いわなさ過ぎてもいけないっていうような．だからそこのバランスは，人それぞれなんで」
＊「今指導されている選手たちっていうのはプロを目指している選手がほとんど」
加藤「そうですね．はい」
＊「そのなかであえて，そのとき．あの，プロ時代に経験された厳しさみたいなことを（指導で）出されるというようなこともありますか」
加藤「あります」
＊「あえて」
加藤「あえて．はい．観てて．あえていわない．『今こいつにはいわないでおこう』（加藤）とか．逆にメンタルがちょっと落ちてるやつ（選手）とかに対しては，『一言いっとこう（ておこう）』（加藤）．とか」
＊「全てがプロ時代に受けた経験をそのままするのではなくて．その選手の様子を観ながら」
加藤「そうですね」
＊「アプローチの仕方を変えるというようなことはされてると」
加藤「はい」
＊「はい．ありがとうございます．その他に指導経験で（自由記述アンケートによる）情熱とかそういったこと以外に何かありますかね」
加藤「指導経験で」
＊「あっ，指導，被指導．受けた経験で．（自由記述アンケートによる）情熱以外で．何か（アンケートに）書かれたこと以外で．話しながら，こういうのもあったなとかそういうものがあれば教えていただきたいんですけども」
加藤「選手のときに受けた指導で，今の指導で影響を受けてる．ってことですよね」
＊「はい．はい」
加藤「でも」
＊「もうこのあたりにつきますか．指導者の情熱というところで．辺りで」
加藤「そうですね．そういうところ（情熱）がやっぱり．そのメンタルの部分というのが，その人を動かす大事な要素だと思うので．そこって何ていうんですか．感じる部分で．何か，そうですね．その．その先生（高校生時の顧問の先生）がいろんな技術をこう見せてくれたことが，ぼくの技術，「あっ，こう，もっと上手くなりたい」（加藤）っていうようなことも．火をつけてくれたっていうのはあるかもしれないです．その技術的な」
＊「「見せれるものは実際見せてあげよう」（加藤）みたいなことはありますか」
加藤「そうですね」
＊「（現在指導する）選手に対しても」
加藤「はい」
＊「やっぱこう，目から入ってくることによって」
加藤「それもそうですね」
＊「はい．ありがとうございます．それでは次の質問に移らせていただきます．選手時代に受けた指導経験以外で，加藤さんの指導に影響を与えているサッカーに関する経験について，それはどのような影響でどのように反映されているかを教えていただきたいんですけれども．最初にでは，（自由記述アンケートの）『先輩指導者からの言葉』ということについて，教えてください」
加藤「これは．合ってんのかなこれ．答え．選手時代に受けた，指導経験以外で」
＊「先ほどの質問で答えてもらったこと以外で．ってことなんで」
加藤「（先程の話）以外でってことね」

＊「はい」
加藤「そうですね，大学時代の，コーチから．いわれた．ヘッドコーチの方からいわれた言葉なんですけど」
＊「これ選手時代ではない指導者になられてからということですね」
加藤「いや，ぼくが選手（のとき）」
＊「選手時代のときに，ですか」
加藤「はい」
＊「はい」
加藤「それでも大丈夫ですか」
＊「大丈夫です」
加藤「そう選手時代，大学の選手時代，何かこうぼくも行き詰まってたというか．何かこう，煮え切らないときがあったときに．そう『フッ』とこの言葉っていうのが．「グラウンドをもう少しこう，上から見てみろ」（大学生時の指導者）っていう一言が，『スッ』と入って．多分その指導者の方は『全体像を理解すれば？』（指導者）っていうことだとは思うんですけど．ピッチの．どこにスペースがあって，誰が．人の位置とか．そういうことだとは思うんですけど．何かその一言で，ちょっとこう，『ハッ』と自分の心，結構暗かった心に，『パッ』と光が見えたっていう，何かそういう一言を持ってるというか．その言葉の力みたいなものをすごい感じました．当時」
＊「実際に指導されるときも，その何かヒントになる言葉を使いたいなということは意識されますか」
加藤「そうですね．何かこう，一言で伝わる言葉というか．一言で気づかせられる．簡潔に．何かそういうものはいつもこう，模索しているような，気はします」
＊「何かこれまで指導のなかで，そういったこうかけられた言葉っていうのがあれば教えていただきたいんですけども」
加藤「結構忘れちゃうんですよね．自分がかけた言葉って．ヘッヘヘヘ（笑）．何だろうな」
＊「特にではその．加藤さんにその言葉をかけた指導者も，『この一言で』（大学生時の指導者）っていうよりも何気なくかけた一言だったんですかね」
加藤「そうですね．多分．今でも（当時の指導者と）そういう話になりますけど．んー，そうですね．何気なかったのか，何か意図があったのか．ちょっとわかんないんですけど．ただ試合で，中学生を見てたとき．男子のを見てたときに．大会で負けて．ベスト 8 で全国大会のベスト 8 で負けて．で，その後にいわせてもらったときの言葉を，（当時の）選手が（から）『印象に残ってる』っていうふうにいわれたときは，何かそういう．『同じようなことなのかな』（加藤）っていうのは．だからその，『いくら頑張ってても，自分の思い通りの結果には結びつくことがないことがある』（加藤）と．『ただ，その頑張ることを止めたら，何も残んないよ．だから，結果がこうであって負けたとしても，やり続けることが大事だ』（加藤）っていうような．『頑張り続けることがまた大事なんだぞ』（加藤）っていう話はしたんですけど．だからそれをその（当時の）選手が『今もまだ何か残ってる』っていうのを聞いたときは．何か，今の話だとそういうことかなとかっていう」
＊「その，不意に出てきた，話のなかで出てきた，感じなんですか．それとも『これは伝えたいな』（加藤）と思って準備されていったんですか」
加藤「いや，準備をしてたというよりも，そのときの雰囲気と．もう直観というか．だからぼくらとしても，『頑張ってるから，ここまで来れたし．頑張ってるから，頑張り続けたから，勝てた』（加藤）とか．そういういいことばかりじゃないなっていうのも．一生懸命やってても報われないことって，サッカー以外，社会出ていけば，誰にでもあることだし．そっちの方がむしろ多いことっていうのは．サッカーを通して感じてた，自分も感じてたことだし．自分も選手のときに，一生懸命やってたとしても，選手としては，2 年だし．出場時間としても，6 分とか．それしか出れてない．（と）ゆうのは経験してたんで．『パッ』とそのときは，そういう何か，準備をしてたっていうことよりも，『スッ』と出てきたっていう感じですね」
＊「はい．では次に，（自由記述アンケートに）『自分の経験から』という言葉があるんですけども」
加藤「はい」
＊「（それ）について教えてください」
加藤「そのプロを経験したっていうことで．誰もが経験できるものではないんで．その経験をしてるからこそいえる，伝えられることっていうのが多分，あると思うので．そういう意味でその指導をするにあたって，『まだ足りないよ』とか，『頑張ってるって思ってる

かもしれないけど，まだまだだよ』（加藤）とか．『もっと他のやつは頑張ってるよ』（加藤）とか．『プロになってからでも頑張り続けなきゃいけない』（加藤）とか．で，また逆に，悪い面というか，いいことばっかりじゃないんで．『プロの世界はある意味わがままじゃなきゃだめ』（加藤）とか．『もっと自分を出さなきゃだめだ』（加藤）とか．何かそういうのもないとやっていけないっていうのも感じたので．それを育成の立場から，どう，こう伝えていけるかなっていうのを考えてはいますけれども」

＊「考え方や取り組む姿勢のところでいわれる，指導されることが多いですかね」

加藤「そうですね」

＊「実際のプレーがどう，指導がどうというよりも」

加藤「はい」

＊「気持ちの持ちようのところが，経験してきたことを伝えたいというような」

加藤「そうですね．はい．やっぱり，技術があるからプロになれるかっていったら，多分そういうことでもないと思います，思いましたし」

＊「はい」

加藤「やっぱり，気持ちが強くないとっていうか．それがすごくぼくのなかでは感じたんで．さっきの評価じゃないですけど，（プロでは）誰も『いいとか悪いとか，こうした方がいいとか，こうだからだめだ』（スタッフ）とかっていうのはいってくれない世界なんで．結果としてしか出ないんで．やっぱそういう部分を直接伝えるときもあるし，間接的にこう，いい方を変えて．とか．『仲間は大事にしなきゃいけないけど，そこ（を）破らないといけない』（加藤）とか．っていう部分も」

＊「これまで指導されてきたのは，どの選手もプロを目指してる選手たちだったんですか」

加藤「女子は目指してる，目指してないっていう，女子もそうか．でも」

＊「上（トップ）を目指してる選手が」

加藤「そうですね．はい」

＊「楽しみながらサッカーを継続してというのは，選手にということは，メインで指導したことは」

加藤「それは，普及で 4 年ぐらいやっていたので．小学生と小学生以下はそんな形ですね」

＊「それでもその子たちも可能性がないわけではないですよね」

加藤「はい」

＊「（上を）目指す子も」

加藤「そうですね．はい」

＊「そういったなかで，やはりそういったことは．ご自身が経験されたことは何かしら伝えていこうと，っていうような主旨は常にお持ちでいらっしゃるということですね」

加藤「そうですね．はい」

＊「はい．ありがとうございます．それでは最後の質問に移らせていただきます．加藤さんの指導について，これからの課題等がありましたら教えてください」

加藤「そうですね．もう本当，自分がもっと人間的に大きくならないといけないっていうこと．人間力っていうんですかね．やっぱそういう部分．いろんな知識も含めて」

＊「具体的にはどういうことをお考えですか」

加藤「サッカーのこともっと深く考えないといけないと思いますし．それ以外の人間的な部分．何ていうんですか．いろんな経験とか，ことも．子どもたちに『チャレンジしろ』（加藤）っていっといて，自分がどうなのかなとか．何か新しい，全く知らない人と会ってみるとか．何か，全く知らない世界に飛び込んで行くとか．何かそういったことをしていきたいなあ．っていうのは，はい．

＊「そういったものを指導に活かしていきたい」

加藤「そうですね．はい」

＊「例えば，何かお考えのこととか，計画とかありますか」

加藤「計画ですか」

＊「その何も，自分の全く知らないことにチャレンジとか．世界にとかいうことで．何かこういうのをやってみようとか」

加藤「ありますね．ッフフフフフ（笑）」

＊「もし差支えなければ，教えていただきたいんですけども」

加藤「そうですね．漠然とですけど．漠然とっていったらあれか．違う，理学療法士っていうものの資格を，何か取ってみたいなとか．あとは，ブラジルに行きたいなとか．ハハハハハ（笑）」

＊「はい．それはサッカーの指導を」
加藤「指導も含めて．その自分の異文化に触れるというか．もう自分がどんだけ無力なのか．っていうか．何かそういうものも含めて．で，そのサッカーのルーツとかも．そのブラジルのサッカーがぼくは好きなので．南米の．スペインとかも，いろいろそういう．南米系っていうか南米のサッカーが本当好きなので．で，数年後にはＷ杯もあるんで．何かこう，ブラジルに『パーン』と行って．何か『今までの自分は何だったんだろう』（加藤）っていうか．何か見直すというか」
＊「具体的にこうサッカーの指導に関してだと，何かありますかね」
加藤「その，サッカーの指導っていうことよりも．（サッカー）だけにとらわれずに，サッカーの指導に関しては，（選手に）やっぱ世界を目指す．世界を目指してもらいたい．と思っている以上，（指導者が）世界を知る，知っておくべきだと思うので．見たり聞いたりは多分できるとは思うんですけど．直接そこに現場に行って，感じるものがある．そういうものを感じたい．だから直接足を運んで，触れていきたいっていうことが，何かサッカーに，活きるのかな．っていう．サッカーの指導，サッカーの指導っていうのはやっぱり人間を育てるというか．そのためだとは思うので」
＊「そのようなお考えの背景にあるルーツとかコアのところっていうのはどういったところがありますかね」
加藤「そうですね．何だろう．今までの自分の育ってきた環境．家族，うちの両親もそうかもしれないですけど，教え，教えっていうか．やっぱり自分のためというよりも，誰かのためであったり．人のためにやる．で，それがゆくゆくは自分に返ってくるというか．何かそういうものが，ぼくの育ってきた環境のなかには，いろんな人からそういうものを教わってきたんで．そういうこと．質問の答えになってますかね」
＊「なってます」
加藤「何か，結局人，人かな．っていう」
＊「実際にその人間的に大きくなられるとか，広い世界を知るとかっていうことのために，今，実際にされてる取り組みということはありますか」
加藤「今」
＊「はい．こういったことを意識されてるとか，こういったことをされてるとか」
加藤「今回も，のこと（インタビュー調査への協力）もそうですけど」
＊「はい．今回のことというのは」
加藤「ことっていうのは，インタビューも含めて，このＺ（市）に来るっていうのも．滅多にないオフだったので．その，やっぱりＡ（市）にいればそこの地域にしかいない．そこの空気しか見れないときに，何かちょっと違うところに飛び込んで．直感的に行くことで何か生まれるかなっていうのが自分のなかでもあって．そしたら，こういういい機会に恵まれて．こうやってお話もできるっていうことで．お話しさせてもらうことによって自分の考えも整理，何かできてきてるように．何かすっきりしてきてはいるので．何かそういうことって自分からアクション起こさないと，得られないものなのかなっていう．で選手たちに『自分からこうアクション起こしてボール受けろ』とか，『自分からまずやれ』（加藤）っていってるのに，『おれはやってるのかな』（加藤）みたいな．アッハハ（笑）．何かそういうのもやっぱり自分がいってることを，選手たちにいってることが，結構自分にいい聞かしたりもしてる部分もあって．うちの奥さんにはよく，『よくそんな偉そうなこといえるよね』（加藤婦人）とかっていわれるけど．んー，何かそうやって，指導者としても人間としても，そういう選手，周りの人に育てられて，成長させてもらってるんだなって思いながら．サッカーってそうなんだなーって思いながら．はい．そんなことを考えています」
＊「はい．ありがとうございます．インタビューは以上になります．ご協力ありがとうございました」

**注**

**1）ポゼッション**

ボールを保持するという意味．チームがボールを持っている際（攻撃時），ゴールを奪うためにボールを失わずに保持し，ボールを動かしながら，攻撃のチャンスをつくる，あるいはうかがうこと．また，チームとしてポゼッションするためには，ポジションのバランスを整え，正確なテクニックで攻撃を組み立てることが必要となる．

2）スイーパー（スウィーパー）

守備陣の後方に位置し，特定のマークを持たない守備選手．ディフェンスラインの裏（背後）に出されてくるボールを掃除（sweep）することからついたポジションの名前.

# 引用・参考文献

1)　會田　宏（2008）ハンドボールのシュート局面における個人戦術の実践知に関する質的研究：国際レベルで活躍したゴールキーパーとシューターの語りを手がかりに．体育学研究，53: 61-74.

2)　會田　宏・船木浩斗（2011）ハンドボールにおけるコーチング活動の実践知に関する質的研究：大学トップレベルのチームを指揮した若手コーチの語りを手がかりに．コーチング学研究，24: 107-108.

3)　會田　宏（2012）トレーニング科学において事例を研究する手続き―球技における実践知を対象とした質的研究を手がかりに―．トレーニング科学，24 (1): 3-9.

4)　會田　宏（2014）コーチの学びに役立つ実践報告と事例研究のまとめ方.コーチング学研究，27 (2): 163-167.

5)　秋田喜代美（2001）ショーンの歩み―専門家の知の認識論的展開　専門家の知恵．ショーン：佐藤　学・秋田喜代美訳．ゆみる出版：東京.

6)　青山清英（2016）コーチの学びのメンターとしての「私の考えるコーチング論」―なぜ, コーチが事例研究を行わなければならないのか―. コーチング学研究, 29. suppl : 1-11.

7)　朝倉雅史・清水紀宏（2010）体育教師の信念に関するエスノグラフィー．体育・スポーツ経営学研究，24：25-46.

8)　浅野友之・中込四郎（2014）アスリートのコツ獲得におけるプロセスモデルの作成．スポーツ心理学研究，41(1): 35-50.

9)　朝岡正雄（2011）ドイツ語圏における発達過程から見たコーチング学の今日的課題．体育学研究，56:1-18.

10)　Bolter, D. N. and Weiss, R. M. (2013) Coaching behaviors and adolescent athletes' sportspersonship outcomes: further validation of the sportsmanship coaching behaviors scale (scbs). Sport, Exercise, and Performance Psychology, 2 (1): 32-47.

11） Cassidy, T., Jones, R. and Potrac, P. (2004) Understanding sports coaching the social, cultural and pedagogical foundations of coaching practice. Routledge: London, pp. 17-29.

12） Côté, J., Salmela, J., Trudel, P., Baria, A. and Russell, S. (1995) The coaching model: A grounded Assessment of expert gymnastic coaches' knowledge. Journal of Sport and Exercise Psychology, 17: 1-17.

13） Cushion, C. (2011) Pierre Bourdieu: A theory of (coaching) practice. In: Robyn L. Jones at al.（Eds.）The Sociology of Sports Coaching. Routledge: London, p. 50.

14） Cushion, C. and Denstone, G. (2011) Etinne Wenger: Coacning and communities of practice. The sociology of sports coaching. Routledge: London, pp. 94-107.

15） デューイ・ジョン : 市村尚久訳（2004）経験と教育.講談社 : 東京, pp. 29-30.〈Dewey, J. (1938) Experience and education, Macmillan Company: New York.〉

16） 原仲　碧・中山雅雄・小井土正亮・桑原鉄平・森　政憲・浅　井武（2015）育成年代サッカーコーチ (元Jリーガー) のコーチング実践知に関するライフストーリー研究. コーチング学研究，28 (2): 163-173.

17） 原仲　碧・中山雅雄（2016）育成年代プロフェッショナルサッカーコーチのコーチングに関するライフストーリー．日本オーラル・ヒストリー研究，12: 123-144.

18） 畑村洋太郎（2007）決定学の法則．文藝春秋：東京，p. 242.

19） 生田久美子（2011）「わざ」の伝承は何を目指すのか―TaskかAchievementか．生田久美子・北村勝朗編　わざ言語―感覚の共有をとおしての学び」へ．慶應義塾大学出版会：東京，pp. 3-31.

20） 今田高俊（1986）自己組織性―社会理性の復活―．創文社：東京，pp. 5-137.

21） 今田高俊（2001）意味の文明序説　その先の近代．東京大学出版会：東京，pp. 29-43.

22） 稲垣正浩・今福龍太・西谷　修 (2009) 近代スポーツのミッションは終わったのか　身体・メディア・世界．平凡社：東京，pp. 246-248.

23）石川良子・西倉実季（2015）ライフストーリー研究に何ができるか．桜井　厚・石川良子編　ライフストーリー研究に何ができるか　対話的構築主義の批判的継承．新曜社：東京，pp. 1-20.

24）JFA技術委員会監（2012）サッカー指導教本2012　JFA公認C級コーチ．公益財団法人日本サッカー協会：東京.

25）JFA技術委員会監（2016）サッカー指導教本2016　JFA公認C級コーチ．公益財団法人日本サッカー協会：東京.

26）Jリーグ公式サイト（2014）
https://www.j-league.or.jp/aboutj/jleague/activities/player-development.html/

27）陰田隼貴・入口　豊・上野大樹・ベネット・ブレイク（2014a）反省的実践家としてのスポーツコーチに関する研究（Ⅰ）．大阪教育大学紀要，62 (2): 23-35.

28）陰田隼貴・入口　豊・上野大樹・ベネット・ブレイク（2014b）反省的実践家としてのスポーツコーチに関する研究（Ⅱ）．大阪教育大学紀要，63 (1): 33-44.

29）金川舞貴子（2006）校長養成・研修におけるショーンの反省的実践家論に関する一考察　～M. エロウのショーン批判を手がかりに～. 広島大学大学院教育学研究科紀要，55: 133-142.

30）木下康仁（2003）グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践．弘文堂：東京，pp. 89-91

31）岸野舞・無藤隆（2006）教師としての専門性の向上における転機：生活科の導入に関わった教師による体験の意味づけ．発達心理学研究，17 (3): 207-218.

32）北村勝朗・齊藤　茂・永山貴洋（2005）優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか？―質的分析によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築―．スポーツ心理学研究，32: 17-28.

33） 北村勝朗（2011）熟達化の視点から捉える「わざ言語」の作用．生田久美子・北村勝朗編　わざ言語―感覚の共有をとおしての学び」へ．慶應義塾大学出版会：東京，pp. 33-63.

34） Knowles, Z., Borrie, A., and TelferH. (2005) Towards the reflective sports coach: Issue of context, education and application. Ergonomics, 48: 1711-1720.

35） 小林多寿子（1995）インタビューからライフヒストリーへ.中野卓・桜井厚編 ライフヒストリーの社会学.弘文堂：東京,pp.43-70.

36） 小林多寿子（2000）二人のオーサー．好井裕明・桜井　厚編　フィールドワークの経験．せりか書房：東京，pp. 104-114.

37） 楠見　孝（2012）実践知と熟達者とは．金井壽宏・楠見　孝編　実践知―エキスパートの知性．有斐閣：東京，pp. 11-13.

38） Levin M. S. (1966) Malthus and the idea of progress. Journal of the History of Ideas, 27(1): 92-108.

39） Mallett C.J., Trudel P., Lyle J., and Rynne S. B. (2009) Formal vs. informal coach education. International Journal of Sports Science and Coaching, 4 (3): 325-334.

40） 松嶋秀明（2005）教師は生徒指導をいかに体験するか？―中学校教師の生徒指導をめぐる物語．質的心理学研究，4: 165-185.

41） 松山博明・土屋裕展（2015）海外派遣指導者の異文化体験とレジリエンス―アジア貢献事業による初めて赴任したサッカー指導者の語りから―．スポーツ産業学研究，25(2): 231-251.

42） 道田泰司（2015）近代知としての批判的思考．楠見孝・道田泰司編　批判的思考　21世紀を生きぬくリテラシーの基盤．新曜社：東京，pp. 2-7.

43） 文部科学省編（2013）私たちは未来から「スポーツ」を託されている―新しい時代にふさわしいコーチング―．学研パブリッシング：東京.

44) 村木征人（1991）スポーツ科学における事例研究の意義と役割―コーチング理論と実際の乖離撞着を避けるために―．スポーツ運動学研究，4: 129-136.

45) 中村雄二郎（1992）臨床の知とは何か．岩波書店：東京，pp. 2-11.

46) Nash, S. C., Sproule, J. and Horton, P. (2011) Excellence in coaching: The art and skill of elite practitioners. Research Quarterly for Exercise and sport, 82(2): 229-238.

47) 中川　昭（2016）私の考えるコーチング論：エリートアスリートのコーチング．コーチング学研究，29 (suppl.): 37-41.

48) 中山雅雄（2004）（財）日本サッカー協会のコーチングコンセプトの論理的，実験的研究の観点からの検討．スポーツコーチング研究，3(1): http://www.taiiku.tsukuba.ac.jp/sc/3_1/journal.html

49) 日本サッカー協会（2016）JFA公認指導者．http://www.jfa.jp/coach/official

50) 野口聡一・丸山　慎・湯淺麻紀子・岩本圭介（2016）「宇宙にいた私」との対話―宇宙空間での“つぶやき”に私の変化を見る．質的心理学研究，15: 171-192.

51) 能智正博（2011）質的研究法．東京大学出版会：東京，p. 120.

52) 小倉康嗣（2003）再帰的近代としての高齢化社会と人間形成―〈意味感覚としての隠居〉をめぐる現代中年のライフストーリーから．質的心理学研究，2: 56-83.

53) 小倉康嗣（2006）高齢化社会と日本人の生き方―岐路に立つ現代中年のライフストーリー．慶應義塾大学出版会：東京，pp. 7-13.

54) 小倉康嗣（2011）ライフストーリー研究はどんな知をもたらし，人間と社会にどんな働きかけをするのか―ライフストーリーの知の生成性と調査表現―．日本オーラル・ヒストリー研究，7: 137-155.

55) Pietschmann H. (1987) Technology of the new society. International Journal of Refrigeration, 10: 276-278.

56）リーズ・ミア：進藤正幸訳（2007）コーチングの基礎　サッカー・サクセスフルコーチング―指導者として成功するために．大修館書店：東京，p. 4.

57）Rodriguez M. (2008) The Challenges of keeping a world: Hannah Arendt on administration. Polity, 40(4): 488-508.

58）桜井　厚（2002）インタビューの社会学　ライフストーリーの聞き方．せりか書房: 東京，pp. 39-40.

59）桜井　厚・小林多寿子（2005）ライフストーリー・インタビュー　質的研究入門．せりか書房：東京，pp. 7-52.

60）桜井　厚（2012）ライフストーリー論　現代社会学ライブラリー7．弘文堂：東京，p. 6.

61）桜井　厚（2015）モノローグからポリフォニーへ―何が私を苛立たせ，困惑させるのか．桜井　厚・石川良子編　ライフストーリー研究に何ができるか　対話的構築主義の批判的継承．新曜社：東京，pp. 33-47.

62）佐藤　学（2001）専門家像の転換―反省的実践家へ　専門家の知恵．ショーン：佐藤学・秋田喜代美訳．ゆみる出版：東京.

63）佐藤　学（2015）専門家として教師を育てる―教師教育改革のグランドデザイン．岩波書店：東京.

64）佐藤臣彦（1993）身体教育を哲学する―体育哲学叙説―．北樹出版：東京，pp. 86-89.

65）佐藤臣彦（2000）体育学における哲学的研究の課題と二十一世紀への展望．体育学研究，45: 433-442.

66）佐藤臣彦（2011）コーチングの哲学．2011 Philosophical Exploration of Sport and Dance, pp. 59-73.

67）佐藤　徹（2016）創造的コーチング研究のために―事例から理論へ―．コーチング学研究，29 (suppl.): 13-20.

68） ショーン : 佐藤　学・秋田喜代美訳（2001）専門家の知恵. ゆみる出版 : 東京.〈Schön, D. (1983) The reflective practitioner: how professionals think in action, Basic books: New York.〉

69） 清水久三子（2009）プロの課題設定力．東洋経済新報社：東京，pp. 56-93.

70） 新村　出編（2008）広辞苑　第 6 版．岩波書店：東京，p. 2854.

71） Strean, B. W. (1998) Possibilities for qualitative research in sport psychology. The Sport Psychologist, 12: 333-345.

72） 田中優子・楠見孝（2011）批判的思考の抑制．楠見孝・子安増生・道田泰司編　批判的思考力を育む　学士力と社会人的基礎力の基盤形成．有斐閣：東京，pp. 87-108.

73） 東海林祐子・金子郁容（2014）コーチングのジレンマとその解決モデルの提案―高校運動部の実践事例から導かれた仮説に基づく考察―. コーチング学研究, 28(1): 15-28.

74） 徳田治子（2004）ライフストーリー・インタビュー. 無藤　隆・やまだようこ・南　博文・麻生　武・サトウタツヤ編　質的心理学　創造的に活用するコツ. 新曜社 : 東京, pp. 148-154.

75） 豊田則成・中込四郎（1996）運動選手の競技引退に関する研究：自我同一性の再体制化をめぐって．体育学研究，41: 192-206.

76） 豊田則成・中込四郎（2000）競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討．体育学研究，45: 315-332.

77） 豊田則成（2012）コーチングの心理．中込四郎ほか編　よくわかるスポーツ心理学．ミネルヴァ書房：京都，p. 140.

78） 坪田康佑（2013）コーチングと比較して考えるクリティカルシンキングの重要性．看護研究，54(6): 482-485.

79） 内山治樹（2007）有能なコーチとなるには何が必要か―コーチ論序説―．中村敏雄編　現代スポーツ論評17．創文企画：東京，pp. 40-55.

80） 内山治樹（2013）コーチの本質．体育学研究，58: 677-697.

81） 梅崎高行（2010）サッカー指導における相互的なバイアス構成の検討．教育心理学研究，58: 298-312.

82） ヴァン＝マーネン；村井尚子訳（2011）生きられた経験の探求―人間科学がひらく感性豊かな〈教育〉の世界．ゆみる出版:東京.

83） Watanabe, Y. Y. (2016) Flight made affects allometry of migration range in birds. Ecology Letters, 19: 907-914.

84） Werthner, P. and Trudel, P. (2006) A new theoretical perspective for understanding how coaches learn to coach. The Sport Psychologist, 20: 198-212.

85） Werthner, P. and Trudel, P. (2009) Investigating the idiosyncratic learning paths of elite Canadian coaches. International Journal of Sports Science and Coaching, 4(3): 433-449.

86） 山竹伸二（2015）質的研究における現象学の可能性．小林隆児・西　研編　人間科学おけるエヴィデンスとは何か　現象学と実践をつなぐ．新曜社：東京，pp. 61-83.

87） 山崎浩司（2011）質的研究の技術1―基本編―. 日本認知ケア学会誌, 10 (1): 106-113.

88） 山崎浩司・星野明子（2012）質的研究とその研究デザインはこう使おう．桂　敏樹・星野明子編　かんたん看護研究．南江堂：東京，pp. 111-147.

89） 吉田　毅（2012）競技者の現役引退をめぐる困難克服プロセスに関する社会学的研究：車椅子バスケットボール競技者へのキャリア移行を遂げた元Jリーガーのライフヒストリー．体育学研究，57: 577-594.

90） 吉田　毅（2013）競技者のキャリア形成史に関する社会学的研究―サッカーエリートの困難と再生プロセス―．道和書院：東京.

91） 吉田　毅（2014）中途身体障害者のスポーツへの社会化に寄与する他者に関する社会学的研究：骨肉腫を克服した元車椅子バスケットボール選手の語りから．体育学研究，59: 855-867.

92） 図子浩二（2010）スポーツ選手や指導者に役立つ実践の学としてのコーチング学の一つの方向性．スポーツ方法学研究，23: 99-104.

93） 図子浩二（2014）コーチングモデルと体育系大学で行うべき一般コーチング学の内容．コーチング学研究，27(2): 149-161.

94） 図子浩二（2015）体罰・暴力根絶のためのコーチング学からのアプローチ法．体育学研究，60: 1-6.

# 謝辞

まず，博士論文執筆にあたり貴重なご指導ならびに温かいご支援をいただきました，専攻長の會田宏先生をはじめ,筑波大学大学院人間総合科学研究科3年制博士課程コーチング学専攻の先生,職員,院生のすべてみなさまにこの場をおかりして，感謝の意を表します.

特に，中山雅雄先生には，博士前期課程入学前の段階から，博士論文の構想，まとめに至るまで懇切丁寧にご指導いただきました．浅井武先生には，研究に対して厳しい姿勢を保ち続けることの大切さについてご教示いただきました．長谷川聖修先生には，アドバイザリーコミッティーならびに研究報告会でのご助言と，廊下で顔を合わす度に励ましのお言葉をいただきました．渡辺良夫先生には，本研究の全体に対する課題を示していただきました．今後の研究活動のなかで，ご提示いただいた課題について一つひとつ丁寧に解決していく所存です.

体育科学専攻の清水諭先生には，コーチング学領域において，人文・社会科学的な研究の位置づけを明確にし，得られた知見をいかにコーチング現場に還元していくのかについて考える機会をいただきました．東北大学大学院教育情報学研究部の北村勝朗先生には，研究方法論，フィールドワークの手法等，さまざまな角度から研究についてご教示いただきました．博士論文は一つの区切りですが,今後も継続して研究活動に専心,研鑽していくなかで研究成果を蓄積できるよう,精進して参ります.

つくばでの7年間を振り返ると，大学院進学についてのご相談に親身になってのってくださった今西和男先生から中山雅雄先生をご紹介いただいたこと，研究生のときに吉田真斗くんと偶然潜り込んだ英語の授業にて大澤舞先生から聴講をご快諾いただいたことの2点が私の研究活動のスタートだったように感じています.博士論文執筆はまったくの想定外でしたが,出会いとご縁に感謝いたします.

洪性賛さん，小井土正亮さん，桑原鉄平さんをはじめ，サッカーコーチング論研究室のみなさまには，研究に対する的確なご意見から，論文執筆のサポート等，多大なご協力をいただきました．みなさまに支えられ，論文を完成することができました．また，修士論文を含め，コーチング実践に関するインタビュー調査にご快諾いただきました，コーチ，クラブ，学校関係者のみなさまからのお力添えに支えられ，博士論文を完成させることができました．心より感謝申し上げます.

一昨年の冬に急逝した祖母のマサヨさんに3年制博士課程修了等々のご報告ができなかったことは少しだけ残念ですが，人生は儚いものだなとあらためて感じています.

最後に，家族，友人，サッカー関係者，学校関係者をはじめ，これまで私をご支援いただきましたすべてのみなさまに感謝いたします．ありがとうございました.

2017年2月7日

原仲　碧